川柳塔

令和五年十二月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年　通巻一一五九号

日川協加盟

No.1159

十二月号

寒中見舞募集

○本誌　令和6年2月号掲載

○締切　12月15日（金）

※刷り込み用紙参照

第十二回 春の川柳塔まつり誌上大会募集

川柳塔社

川柳塔社では、日頃句会などにお出掛けになれない方々を含め、結社を越えて広く川柳をお楽しみいただく機会として、第十二回誌上大会を企画いたしました。参加要領は左記のとおりです。是非皆様のご参加をお待ち申し上げます。

課題と選者（各題2句　共選）

課題吟

「紙」
［青砥　たかこ（鈴鹿川柳会）
［江島谷　勝弘（川柳塔社）

「誘う」
［島田　駱舟（印象吟句会「銀河」）
［斉尾　くにこ（川柳塔社）

自由吟
［西　美和子（番傘川柳本社）
［小島　蘭幸（川柳塔社）

投句要領　規定の用紙（コピー可）または、用紙の入手できない場合は便箋などご使用いただいても結構です。

投句料　一〇〇〇円（切手は不可）

投句締切　令和六年二月二十日（火）消印有効

送付先　〒543－0052
大阪市天王寺区大道一－一四－一七－二〇一
川柳塔社　誌上大会係　宛
FAX専用　〇六－六七九六－九〇六六

賞及び発表　各題特選に賞呈　発表は川柳塔誌五月号誌上
川柳塔誌を購読されていない方には発表誌呈

2024年（令和6年）本社句会　開催日程表

会場：ホテルアウィーナ大阪

開催日	時間	会場	
1月8日（月・祝）	13:00～17:00	葛城の間（全室）	3F
2月6日（火）	13:00～17:00	葛城の間（全室）	3F
3月5日（火）	13:00～17:00	葛城の間（全室）	3F
4月5日（金）	13:00～17:00	葛城の間（全室）	3F
5月7日（火）	13:00～17:00	葛城の間（全室）	3F
6月7日（金）	13:00～17:00	葛城の間（全室）	3F
7月2日（火）	13:00～17:00	葛城の間（全室）	3F
8月7日（水）	13:00～17:00	葛城の間（全室）	3F
9月6日（金）	13:00～17:00	葛城の間（全室）	3F
10月5日（土） 川柳雑誌・川柳塔100周年記念 第30回 川柳塔まつり	同人総会　10:00～11:00	信貴	3F
	句会　11:00～17:00	金剛（全室）	4F
	懇親宴　17:00～20:00	葛城（全室）	3F
11月7日（木）	13:00～17:00	葛城の間（全室）	3F
12月6日（金）	13:00～17:00	葛城の間（全室）	3F

第38回文化祭いしかわ二〇二三

小島蘭幸

石川県七尾市のホテルに着いたのは、午後2時でした。荷物を預けて近くの食堂で昼食をして、一本杉通りを散策しました。花嫁のれん館では美しい花嫁のれんにふっと二人の孫の花嫁姿を想像してしまいました。

夕食は、藤田武人、栃尾奏子、木本朱夏、森中惠美子さんと一緒に美味しいすし屋さんに行きました。乾杯をして念願だった白エビの空揚げを食べることが出来ました。昼食が遅かったので、食べられるかなと思っていたのですが、すし10貫ぺろりといただきました。

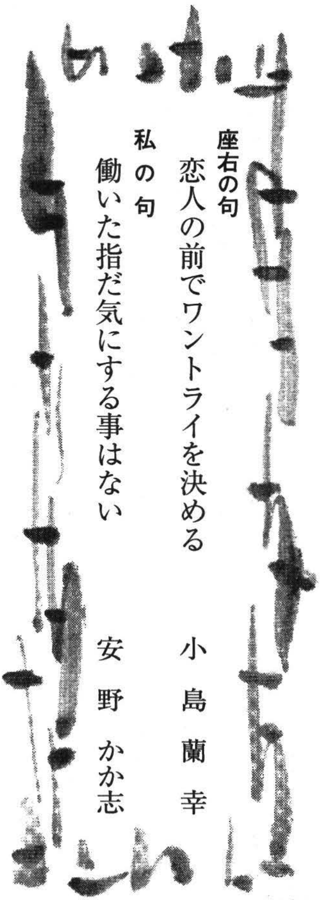
大会当日、会場の七尾市文化ホールに行くと、すでに多くの出席者で溢れていました。

受付を済ませて来賓控室へ行くと江畑副理事長が笑顔で迎えて下さいました。暫くすると来賓の文化庁の西尾氏と茶谷七尾市長が出席され、一緒に昼食をいただきました。

午後12時開会式、主催者挨拶で私は、川柳大会の楽しさについて話させて頂きました。

清興の「七尾まだら」（石川県指定無形民俗文化財）と「三引の獅子舞」（七尾市指定無形民俗文化財）は素晴らしかったです。会場の出席者の皆さまの大きな拍手が今でも耳に残っています。

続いて事前投句の披講・選評が梅崎流青氏の課題「祭り」から始まりました。事前投句は4題、選者4名の皆様の披講・選評は、とても素晴らしかったです。そして何よりも一生懸命さが伝わってきて嬉しく思いました。当日投句の披講・選評は3題、選者3名の皆様の披講は個性的でとても楽しく聞くことが出来ました。ただ事前投句が終わるまでは予定通り進んでいたプログラムでしたが、当日投句・選評は予定よりかなり時間がオーバーしてしまいました。この要因の一つに出席の皆様の拍手があります。入選句に拍手は不用です。少し時間が遅れましたが、第2次選者による大会入賞作品発表・選評、表彰式、記念撮影、閉会式と無事終えることが出来ました。次期開催地は岐阜県です。



座右の句

恋人の前でワントライを決める　小島蘭幸

私の句

働いた指だ気にする事はない　安野かか志

川柳塔　十二月号目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田　尋「サギ・高槻城址公園」

■巻頭言　第38回文化祭いしかわ二〇二三……小島蘭幸…(1)
四万十川川柳全国大会……木本朱夏…(2)
川柳塔（同人吟）……小島蘭幸選…(4)
菠薐草の花⑫……野沢省悟…(36)
英語 de Senryu ⑭……吉村侑久代…(37)
誹風柳多留一三篇研究 40……(38)
自選集……(40)
句集の森……山根梟人…(43)
温故知新……(43)
水煙抄……川上大輪選…(44)
せんりゅう飛行船⑯……新家完司…(59)
愛染帖……新家完司選…(60)
檸檬抄「彩　り」……鈴木いさお・川本真理子共選…(64)

四万十川川柳全国大会

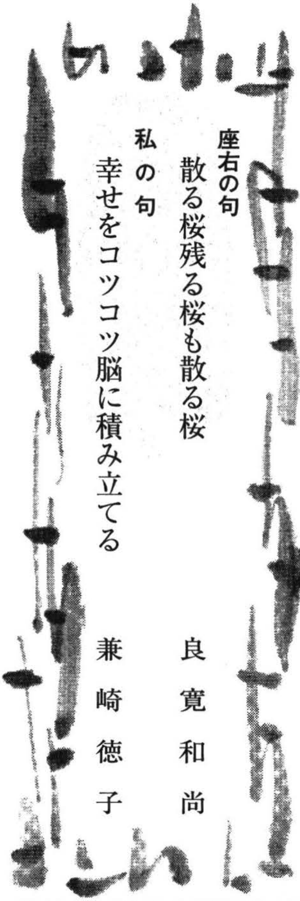
木本朱夏

「四万十川の青き流れを忘れめや」作家上林暁の言葉である。日本最後の清流と謳われる四万十川は、高知県西部を流れる四国内最長196キロメートルの一級河川。

8月26日（土）第23回四万十川川柳全国大会が開催された。新型コロナウイルス感染症による中止を挟み令和元年より4年ぶり。主催は高知県四万十市に本店を置く幡多信用金庫。川柳大会は23回であるが短歌・俳句大会は川柳大会よりも以前から開催されていると聞く。金融機関の主催による短詩型文芸の大会が永年開催されていることは全国でも珍しい。

第1回は平成12年8月、番傘の磯野いさむ主幹が講師を務められた。第4回は平成15年、講師は橘高薫風先生。川柳塔から15名が空路高知に飛んだ思い出がある。第17回は小島蘭幸主幹、第21回は新家完司理事長（コロナのため誌上大会）。第23回が木本朱夏。講師には事前に募集された作品の選考と川柳色紙2枚の提出が求められる。

一路集（「届　く」……柿花和夫選…(68)
　　　（「　百　」……池田純子選…(69)
初歩教室「カレンダー」……平井美智子…(70)
川柳塔鑑賞……斉尾くにこ…(72)
水煙抄鑑賞……平賀国和…(74)
■「作家水谷鮎美を論ず」より……福田山雨楼…(75)
インスピレーション・ナビ　印象吟……大西泰世…(76)
『麻生路郎読本』余滴(79)……桒原道夫…(78)
第38回国民文化祭・いしかわ百万石文化祭2023 入賞句……(80)
十一月本社句会……(81)
各地柳壇（佳句地十選／太田　昭・松原寿子）……(86)
柳界展望……(99)
十二月各地句会案内……(100)
■編集後記（ひとこと／松本文子）……道夫・眞澄・憲彦…(102)



座右の句

散る桜残る桜も散る桜　　良寛和尚

私の句

幸せをコツコツ脳に積み立てる　　兼崎徳子

書道の心得の無い私には、まず色紙を書くという難関が待ち構えていた。

さて当日会場の壁一面は色紙・色紙・色紙…。金子兜太の力強い句と書や、今を時めく夏井いつきの色紙、歌人のたくさんの色紙の中に川柳人の色紙も。過去に講師を務められた森中惠美子・大木俊秀・斎藤大雄・田口麦彦・小島蘭幸・新家完司等々。

壁面の中央、すぐ目につく場所に薫風先生の「栄光の日も一日は二十四時」の色紙。その真下に私の色紙「思いきり顔を洗ってあれは　夢」が。師弟ということで配慮して下さったものと思われるが赤面である。

「川柳の力」と題して講演が60分、そして入賞・入選の40句に対する講評が40分。「金は出すが口はださない」主催者側の姿勢に感謝と感動の大会であった。

四万十は確かに遠い。交通の便も不便だ。しかし、だからこそ守られるものがあることも痛感。四万十川畔からうち揚げられた6000発の見事な花火も忘れ難い。

第23回大会の結果

大会賞　　桑名　孝雄

地球儀のここが日本だ四万十だ

四万十市長賞　　藤田　武人

四万十のイオン海馬が目覚めます

川柳塔

小島蘭幸選

大阪市　平井美智子

あんパンが好きで淋しさ過敏症
武器として時々のぞかせるピンク
愛されていたくて嘘をつきました
半解凍のままで放置をされている
雑踏の孤独を埋める夕茜
恩讐を越え一本の曼珠沙華

堺　市　桒原道夫

鉄棒にぶらさがってる志
人前で猫といちゃついています
青空の広さに戦く歳になり
さびしい椅子がさびしいとこに捨ててある
蝙蝠が飛び交う夕べやや楽し
太陽光より月光が胸を灼く

大阪市　髙杉　力

あっち向いてホイいつから笑わなくなった
折り返し地点でブランコが揺れる
あさっての方に味方ならいます

阪市　石田孝純

安っぽい正義感なら醤油漬け
ひとりっこ同士のジルバ終わらない
じれったい自分がいつもそばにいる
君逝って二ヶ月未だ雲の中
慰められ励まされても夜ひとり
悔恨の泣き顔になる目玉焼き
白地図に君と訪ねた街を塗る
ＹＯＵ ＣＡＮとただ微笑んでいる遺影
いつか薔薇になれと悲しみ抱いてる

鳥取県　斉尾くにこ

よく見れば星の付いてる磨りガラス
口角は上向きお日さまが昇る
洋上の独立峰として日々を
おもしろの広がっていく守備範囲
ぽけっとに愛の欠片が落ちてくる
ペンを置く朝の誕生見とどけて

松葉杖見ると親友だと思う
車椅子でナースとトイレまで散歩
お見舞いに粒あんぱんを一袋
しょぼくれた顔自撮りして退院す
杖突いてみてもダンディにはなれず
リハビリの一歩へカールブッセの詩

岡山市　丹下凱夫

秋祭り孫そのかしリンゴ飴
足と脳鍛え白寿へすべり込む
ジャニーズも不滅でないと知る浮世
高値でも旬に食べたい焼きサンマ
二人なら食べていけると五十年
会計役は煙たいぐらい　ちょうど良い

堺　市　内藤憲彦

昭和生れはたくましく面白い
前書きも後書きもなくまだこの世
忘れたことも忘れてゆっくり朝ご飯
苦労したようなしてないような顔になり
この辺でお開きにしようかと思う
戦争のない一年でありますように

大阪市　谷口義

うやむやに終えれば誰も傷つかず
拒否されてフッと心が軽くなる
ばあちゃん役小百合に揺れるスクリーン
口で拒否目は許してる亡父だった
真実をうつした鏡もう見ない
水鉄砲だろうと戦許さない

羽曳野市　吉村久仁雄

変わらない目覚めにトーストカフェラッテ
二人ともだんまりそれでいいのです
さざなみのリズムで老いは迫り来る
久しぶり思わずハグになる姉妹
仲の良い妹と海の見える窓
野暮だなあ秋刀魚の骨を抜くなんて

桜井市　安土理恵

昭和史の家の重さも軽くなる
ふる里の鎮守の森の風シャワー
野の花のやさしさ似合う備前焼
脇役に徹して三猿を守る
週末の雨は心を重くする
北朝鮮サッカーまでも強暴だ

鳥取市　前田楓花

アルバムに刻む家族の五十年
始まりは電車に揺れる四畳半
次の世は夫に叫ぶオーイお茶
子どもらの絵日記今も捨てられず
半世紀まっすぐ向かい合い夫婦
夫の帰り口笛吹いて待つインコ

香芝市　山下じゅん子

貝塚市　吉道　あかね

曲り角の向こうで待っている明日
シナリオを書き替えてみる仲間入り
ちょい太が長生きと言ういい話
平凡がいい鯵の干物にお味噌汁
影法師元気でいてと付いてくる
出会った人の数が私の力瘤

枚方市　藤田　武人

頬撫でる風に季節の声がする
前向きに生きる私のピンヒール
故郷の味と響きがある老舗
さるカニとかちかち山の平和主義
不器用な箸で食レポする私
このカバン形見の服で作ったの

枚方市　栃尾　奏子

冷えた朝祖母棒鱈の水を替え
プリントゴッコ畳は年賀状だらけ
通知表かざしジングルベル歌う
障子紙はり替え前の大あばれ
大そうじさあ神さまがいらっしゃる
達筆の祖父担当の箸ぶくろ

黒石市　北山　まみどり

まだ秋を満喫できていないのに
身に染みて違いの分かる寒暖差
りんごなら色鮮やかになるけれど
背景に馴染んでしまうお年頃
秋晴れのすき間を何で埋めようか
今さらの一念発起ジム通い

羽曳野市　徳山　みつこ

愚痴は秋空へわたしは貴方の胸へ
わたくしの笑顔亡父に届かぬか
イエスノー迷っていますお月様
ブランコのひ孫にやがて羽生える
脳外科へ感謝一年無事に過ぐ
しんみりと唯しんみりと除夜の鐘

土佐清水市　辻内　次根

硝煙のたなびく空が泣いている
戦乱のニュースここだけは静か
一日に一合炊の字が薄い
こともなく精霊トンボ飛んでいる
一本の道にススキの穂が揺れる
欲張ると急に虚しくなってくる

今治市　永井　松柏

政治家のスピーチに魂がない
魂を揺さぶる永ちゃんのロック
名披講ハートに突き刺さる言葉
川柳はライフワークに値する
三つ褒め一つ諭して子は育つ
朝採りの野菜のエナジーを食す

羽曳野市　宇都宮　ちづる

子を産むかキャリアか揺れる四十路前
ＡＩが牛耳る世にはしたくない
非常用笛と小銭は持ち歩く
青痣に心当りがない老化
大阪人気持そのままオノマトペ
刻まれし名が呼びかける原爆忌

大阪市　宇都　満知子

未来って来年のこと明日のこと
ツーカーの間にあった石っころ
食卓の柳誌横っちょへ夕ごはん
不揃いのみかんが箱で届きます
子の自立点線になる家族の輪
半袖の隣に秋が座ってた

堺　市　今井　万紗子

病む妻に大好きだよと耳もとで
いつもの道今朝も笑顔が返せたら
亡父の歳追い越し母は花浄土
今日一日笑顔でいよう鏡拭く
あきれる程おしゃべり続く喜寿傘寿
若かった母を泣かせた事がある

神戸市　松倉　正美

無住寺で律儀に咲いた曼珠沙華
ギラギラと男剥き出しラガーマン
コンビニがデパート凌駕する時世

尼崎市　山田　耕治

痩せ秋刀魚妻と二人で半分こ
友の愚痴親身になって聞く夜長
川柳のネタを探って旅に出る
拾われて家族の話聞いている
桔梗の小鉢衝動買いをしてしまう
お隣の庭の柿とも五十年

三田市　村田　博

今もまだ母の匂いのする箪笥
庭の草水も肥料も遣ってない
Ｗ杯孫と二人で夜中まで
ライバルにハンデくれとは言えぬまま
食べ頃は賞味期限の前後だな
息抜きを偶にはしたいコルク栓

西宮市　亀岡　哲子

ハルカスでマンハッタンを飲んでいる
プレッシャー多すぎないか一人っ子
白旗は上げぬ僕にも意地がある
ありがとうお邪魔しますと住む地球
ホット牛乳両手で包むマグカップ
一羽来てたちまち十羽来た雀
暇だからゆっくりニュース見て怖い
ありがたくも怖くも進化するこの世
バージンロード曾孫もママのおなかにて

鳥取市　中村金祥

被災地の泥沼からの力こぶ
ごちゃまぜの都会に鬼が潜んでる
玄関の佇まい良い家庭だな
真実を知って世間が狭くなり
戦争をしてる場合か地球異変
たのもしい働く父の武者ぶるい

堺　市　坂上淳司

日本産魚介は禁輸するチャイナ
船籍で中国産と日本産
海鮮丼に舌鼓打つチャイニーズ
国産だと周氏も魚介食べてるぞ
汽笛一声力感あふれてた昭和
合理化で鉄路の響きまた消える

和歌山市　松原寿子

満月よ手作りだんご召し上がれ
君恋えば瞬き返す星に逢い
大根をスパッと決意変えられぬ
きっかけは友で巣籠りから抜ける
真っ白なページ続いた日の愁い
紛れなく呼吸している花畑

松原市　森松まつお

柿と栗秋を満喫して笑顔
ご近所に松茸なんぞ売ってない
三千円で毎年狙う八億円
O型のせいにしておく大雑把
人見知りなのに飲み会ついて行く
避難訓練今年も同じ顔揃う

鳥取市　吉田弘子

ゆったりのリズムに慣れて日々好日
時計二分進める暮らし自分流
秋ですね枯れ葉ブランコ蜘蛛の糸
何気ない呟き拾う娘に感謝
記録更新にんげん以上自然界
返事ない仏と対話通じ合う

大阪市　坂裕之

おまつりを楽しんでいる仲間たち
平和な日でも世界では戦争が
素晴らしい味を届けてくれた友
この秋のさんまはすごい高級魚
歳の差は関係なしに競い合う
大阪に人間らしさ溢れてる

防府市　坂本加代

出不精にコロナが拍車かけている
肩に手が温みが残る想い人
ショウヘイの走る姿の美しさ
アベレージ一ミリほどは伸びたかな
飲むために真面目に帰宅憎い人
いまさらにカミングアウトせずに去る

塩竈市　木田　比呂朗

煤払いにわか腰痛バレました
焼きいも屋我が家の角を忘れない
来年こそは免許証の返納
トライから教えるラグビーのルール
歓声をまた持ち越したハルキスト

弘前市　稲見　則彦

そう、だからわたしは猫が嫌いです
中秋の名月ジャズと赤ワイン
銀世界見慣れてしまうのが怖い
三連休今じゃ浮かれぬ人となる
ウワバミと酒呑童子とわたくしと

黒石市　石澤　はる子

台本に老後のページ欠けている
秋の日を一日旧友（とも）と語り合う
隣家からまさかのメロンおすそ分け
鼻の差で負けた悔しさ今がある
徐々に子へ引き継ぐ家の維持管理

横浜市　川島　良子

メディアの沈黙ジャニーズだけに収まらぬ
キミらしく生きているねと亡夫笑う
藤井八冠記憶に残す２０２３
原型に収まりきれぬ好奇心
川柳に遺そう家族との絆

上尾市　中村　伸子

後ろをやめる近頃習得したばかり
金木犀切って咲かない誕生日
ハロウィンのお菓子をあげる子もいない
心弱く娘の来訪を待ちわびる
競技かるた高校の頃したかった

朝霞市　前田　洋子

夏から晩秋グラデーションはない
プラネタリウム君も私も宇宙人
プラネタリウム馬鹿げているよ戦争は
まるで森小さな茶店鳥も来る
森の茶店心は里へ帰ってる

越谷市　久保田　千代

想い出の溢れる人が寝たきりに
筋一本通して孤独抱いている
余生なお心へ花の種を蒔く
逢えるなら月が残っているうちに
生き甲斐にしていた余生孤独です

東京都　川本　真理子

何となく残り数える時期になる
電子音鳥が律儀に返事する
小さめのジェスチャーだけで受け止める
秋風が吹くのを待ってスクワット
能天気に生きていくのが難しい

八王子市　川名洋子

孫の服ちょっと拝借行く秋葉
目を凝らし必死に秋を探した日
寒風に暑さ疲れの身を縮め
約束は守っています彼岸花
忘れてた妻の手を取るフルムーン

石川県　堀本のりひろ

ミスばかりなのに悠々八十路越す
老い二人八十路の壁を無事通過
会話無しでも通じます蚤夫婦
無理難題呆けたふりして砂かける
のんびりと夕陽背中に老い二人

可児市　板山まみ子

目標は死ぬまで元気歩く午後
おしゃべりに笑いころげて空きっ腹
預貯金を全部使ってからあの世
目標にしてると言われ草テニス
しっかりと食べて寝るのが得意技

各務原市　喜多村正儀

白旗を振る別の手に赤い旗
あきらめることを知らない火打石
立ち直るまで待っているふくらはぎ
にぎやかな方へ駆け出すちぎれ雲
聞かれたら少なめに言う年の嵩

名古屋市　山本三樹夫

満月に心も満ちて酒を飲む
鈴虫を聞いたのは地下鉄ホーム
飲みすぎて地球の動き早くなる
平和を願う買ったこけしに笑みがでる
阪神のアレに騒いだ戎橋

犬山市　金子美千代

会える時会わねば明日は分からない
若かりしころの話に笑いこけ
彼岸花の律儀彼岸に間に合わせ
充分ですもう便利にならなくても
秋ですね今年も諦めるサンマ

犬山市　関本かつ子

身の丈に合わせ軽くする荷物
物価だけ上げ日銀が動かない
おばちゃんと呼ばれなくなってから久し
ケアホーム幸せそうな人もいる
ややこしい話は明日にして眠る

豊橋市　西郷紀美代

親も子もトイレの明かり消し忘れ
出しゃばりをやめて息子が丸くなる
夏終わる少年らしくなる小二
ワクチンで守られている長寿国
聞く耳を持った息子は子煩悩

奈良市　東　　定生

指先にストレス溜まるデジタル化
処理水に反対できぬ魚介類
喉元過ぎればコロナ忘れる国
五年ほどほったらかしの非常食
物価高困り果ててるパビリオン

奈良市　大久保眞澄

女性登用比率ではないのです
友達だと勝手に思い込んでいた
秋があったと思い出させた涼しい日
将棋熱聡太一日にしてならず
痛みが消えたそれだけでホッとする

奈良市　加藤江里子

秋夜長「皇女エリザベート」を読む
「八十の壁」夫と違う箇所に線
ハチローの詩異国に暮らす孫のこと
ゴーゴリーの短編が好き切なくて
坂口安吾父の書棚で見つけた本

奈良市　髙橋敬子

三年ぶり今を楽しむ同期会
内気だった友も踊っている余興
電池切れ解散風が吹き始め
松茸秋刀魚遅れて秋もやって来た
沸騰化秋違わずにやって来た

奈良市　辻内げんえい

夜中のラグビーテレビつけたが見ずに寝る
妻と娘示し合わせて攻めたてる
「ジイ遊ぼう」今日も元気な弾む声
「どこの店よりあなたのうどん」褒める妻
昼はまたフードコートでワンコイン

奈良市　米田恭昌

内閣改造見切り発車の縄電車
お見舞の下手な嘘にも気が和む
弔問の顔ぶれ頷いている遺影
神様唖然絵馬に書かれた拙い誤字
猛暑炎暑まだ言い足りぬ夏だった

生駒市　飛永ふりこ

やっと秋雲からどんとエール来る
陽と会話松葉牡丹の片えくぼ
やんわりと秋が疲れを拭い取る
いっぱいの愛に伸びやか菊花展
バイオリン荒ぶ胸底澄み渡る

香芝市　大内朝子

川柳塔まつり楽しかったわねえ
もう少し生きられそうと心電図
永らえる命に恋をして感謝
わからない明日の目覚めを信じ寝る
生きてれば何かありそう好奇心

奈良県　安福和夫

駅ピアノ人間模様垣間見る
ホームレスやセミプロも弾く寛容さ
鍵盤に想い託せる素晴らしさ
別世界へ誘う即興幻想曲
口ずさむもしもピアノが弾けたなら

奈良県　谷川憲

妻からの家事の訓練まだ途上
ひと雨が心地好くなり羊雲
引き際でぐっと高めた人の価値
計算を避けては溜まる小銭入れ
通勤であふれたホーム懐かしい

奈良県　中原比呂志

乳ガンの啓発ピンクのリボンです
片乳房抱いてピンクのリボン付け
仲良しが競う万国旗の下で
百度石回る人無く傾いて
五年振り社会も変わるご開帳

奈良県　中堀優

脳ドック空っぽですと医者の弁
嘘はダメと風まで泣いて教えよる
酔ったふりして相槌を打ってやる
どう生きるか正解のない道をゆく
もやもやの霧が晴れたぞレッツゴー

奈良県　長谷川崇明

新米が炊けたぞふわり卵かけ
やっと4人ハモるダックス黄泉の国
八十路でもまだ坂上る電子辞書
風向きはどうあれ一度待ってみる
積んどくの本が読んでとする夜泣き

奈良県　渡辺富子

思い出を語れば初恋しゃしゃり出る
ブギウギのリズムに合わせウォーキング
いらいらの勢い借りて草むしり
好き放題生きた男も老いに負け
少子化へ青息吐息未来絵図

和歌山市　上田紀子

この御時世生きてるだけで儲けもの
秋風に戦力外を知らされる
世話やいてダブルパンチできた返し
成り行きに任せて夕陽落ちてゆく
風の私語知って知らずか舞う紅葉

和歌山市　柏原夕胡

残暑残暑に押されて秋のかくれんぼ
大好きな秋はどこにも見当たらず
悪い事しなくても首の難病
辛いけど付き合う他はない痛み
喜んでもらいにっこりプレゼント

海南市　小谷小雪

競うことしなかった日の茜雲
ティッシュでももらいたいもの参加賞
帰省の子と悩み分け合う台所
酸っぱさも愛敬だろう青みかん
スマイルが花マルつける普通の日

橋本市　石田隆彦

心配な顔が並んだ舞台袖
強面も笑みもなくしたデスマスク
ウォーキング脳に活力つける朝
何十年同じカーテン見て暮らす
老いの恋心にハネがつきました

京都市　藤井文代

雑踏に入れば脳裏にすぐコロナ
割れぬ夫婦茶碗今では老いの日々飾る
外出は病院通いばかりの日
他人ごとと思えぬ老いに来る病気
これでもかのコマーシャル反する財布

京田辺市　北野クニオ

稲穂垂れ雀群がる青空に
満月を眺めて秋の風情知る
暑さ避け老い二人にて夜散歩
飛鳥路をサイクル巡り彼岸花
転勤の辞令眺めて秋を知る

長岡京市　山田葉子

蚊一匹獲れずに笑うしかないな
言葉より手を差し伸べてほしいだけ
動物的カンを頼りに生きている
三食と注射薬で今日終わる
秋の服バトンタッチが早すぎる

八幡市　武田悦寛

冷奴から湯豆腐へ秋の風
家計簿が熱中症で救急車
母の日はプレゼント父の日メール
プレッシャーは濃いいコーヒーで薄める
腕相撲孫に完敗誕生日

大阪市　東敏郎

開かれた国会審議すぐ閉じる
物価高どたばた劇の透き狙う
一筆で書ける「ひらがな」十一字
逆光で撮った女性の光る髪
シュレッダーにかけた筈のメモ喋る

大阪市　今村和男

針葉樹人付き合いは苦手です
歳のせい世のせいにして日が暮れる
澄ましたら木々の会話が聴こえるか
減るほどに丁寧になる歯の磨き
適当な穴がないので掘っている

大阪市　岩崎公誠

自分の名忘れないため飲むサプリ
知らん間に年取ったなと友の声
終止符をどこで打っかを考える
倒産のニュース見る人の運
回転を忘れたコマはすぐ倒れ

大阪市　岩崎玲子

持ち歩く手垢の付いた愛読書
恐い記事日々血圧を上げにくる
少子化と嘆くばかりで策はない
頼み綱話とぎればタイガース
ケセラセラ毎夜寝る前唱えてる

大阪市　内田志津子

免疫力落ちたな朝ごはん不味い
スッピンの鏡に傘寿告げられる
下手な嘘ちっちゃな嘘もまっいいか
おばちゃんの飴にはないよ下心
嬉しさを詰めて膨らむ旅支度

大阪市　江島谷勝弘

朝五錠薬を飲んで元気です
一日は四十八時間ほしい
うっかりはしょっちゅうでしてあきまへん
壊れたら後始末できぬ原発
足し算も引き算も苦手になった

大阪市　榎本舞夢

骨折で衣替えする二年振り
ちょうどいい断捨離に向け整理する
塔まつり昔にもどり活気づく
久しぶり会えた喜び顔と顔
健康とボケぬ様にと五七五

大阪市　大川桃花

都知事さんもよいしょと洩らす午後三時
得意げにサンマ食べたと言うマダム
異常気象異国も被害免れず
歳ひとつ越す度不調背に増える
傘寿すぎ水を呑むにも要注意

大阪市　大沢のり子

触れにくい話はわたし聞いてみる
熟慮せず了解そして忘れます
射程距離ですが抜けない散歩道
月明かり川辺で石を投げている
眠れない夫と夜明けの砂時計

大阪市　岡田恵子

辻褄を無理矢理あわせ生きのびる
秘めた想い告げに行きます曼珠沙華
ヒロインは私ハッピーエンドです
病む夫がうなぎ食べたいなあなんて
ハッカ飴何か良い句が出来そうな

大阪市　奥村五月

監督は天気予報も気を配る
あの世にもアンテナ建てて総理殿
刑務所は住めば都と言えません
焦らずも必ず行けるあの世へは
孫もこぬ過疎の村へと来る蛍

大阪市　小野雅美

泣くもんか負けるもんかと仰ぐ空
自転車のパンクで明けた誕生日
お母さん地上の私見えますか
幸せが来るよう顔もストレッチ
店頭に文具並んでいる書店

大阪市　川端一歩

八冠で将棋文化に陽が当たる
秋ですね小さい恋でもしませんか
生前の笑顔を思う喪のハガキ
賽銭をちびり仁王の眼を見れず
また戦　憲法9条が光る

大阪市　古今堂蕉子

チャットGPTの尊厳忘れまじ
霜降りのステーキ食べてはるテレビ
十月一日まだ夏服で扇風機
鳥の戦かお祭りか今日は賑やか
生い茂る雑草夏ばてはしない

大阪市　近藤正

自給率明日にも日本飢える危機
基地強化今やっている時ですか
軍事ブロックよりも対話が平和呼ぶ
風雪に耐えて佇む彬の碑
ベーブルース超えて翔平驕りなし

大阪市　髙杉千歩

ガッタンゴットン名句を生んだ汽車の旅
紅葉して桜は暗き樹となりぬ
心眼が開き眼鏡はご用済み
何時からか子供のいない街になり
一日一善廊下のゴミをゴミ箱へ

大阪市　田中廣子

ガン告知手術成功医者が言う
三日目で痛み残るが退院だ
痛がるの見てるのつらい老いた妻
コスモスの迷路楽しい園児たち
満月をめでて一服お濃い茶を

大阪市　田中ゆみ子

自分だけのためにはできぬ百馬力
私にも殺意蚊・蠅・御器噛(ごきかぶり)
もし君が望むならばという返事
一番の友が夫になった小春
父の手から夫の手子の手神の手へ

大阪市　田原康雄

近くまで来たのでメールして帰る
近くまで来たら寄ってね書いておく
十五夜を惜しむよに母「ありがたや」
名月やこの地に居して友もでき
仲秋の宵コンサートほろ酔いて

大阪市　寺本実

思案してやはり諭吉にたどりつく
気がつくと噂の主が横にいる
ひらめきが出句の後に湧いてでる
閻魔様まだ弁護士が来てません
うっかりと大臣漏らす汚染水

大阪市　中井萠

手に負えぬ掴みどころの無い自分
初恋の人には会わぬ方が良い
ピッタリと意見が合う日たまにある
隙を見て赤信号を渡った日
不調にも年相応とにべもなく

大阪市　原田すみ子

子には元気ぶり夫には弱気見せ
老人ね若く見えるを嬉しがる
敬老の日弁当もらう枠に夫
経済効果目の当たりしたトラグッズ
ゆっくりと歩けるほどにやっと秋

大阪市　平賀国和

猛暑去りカメ虫飛来秋となる
妻退院日常戻り安堵する
買い出しの指示をあれこれ山の神
娘の掃除親の要る物捨てている
七十余年日本の平和ありがたい

大阪市　降幡弘美

楽しいね朝日にむかいランニング
マトリョーシカみたいに並ぶチンアナゴ
ママ友の悩みいいとこ三年よ
節約を楽しんでいる物価高
ざしきわらし誰か見た人いませんか

大阪市　山本加お里

まっさらな今日を刻んで日が暮れる
幸せは自分で気付き輝かす
ゆっくりと目を楽しみます美術館
心にも投薬くれる良き主治医
五年すぎ卒業しましょ医者が言う

大阪市　横山里子

子の前だけしっかり者の母になる
独り言増えた昼餉の秋茄子
生き恥を晒し野となれ山となれ
夜もすがら会話にならぬ二人居て
いつか着るいつかは無いと娘に言われ

堺市　柿花和夫

去年より小さくなった飯茶碗
スッピンで乗車フルメイクして下車
ライバルとの勝負楽しむ万歩計
常連は賄い料理食べたがる
教会で数珠を出しては駄目ですか

堺市　源田八千代

敬老の日　誕生日　祝ってくれる
ノンアルと麦茶ジュースで乾杯す
家康さんも両手枡掛け長寿筋
玄関の花道行く人も和ませる
センスいいお隣さんに花任せ

堺市　齋藤さくら

コロナ禍を忘れ去る日がきっと来る
清水の歴史を刻む石畳
達者でな友の笑顔が忘られぬ
まっすぐで寄り道知らぬ人と住む
一合の酒が楽しみお正月

堺市　澤井敏治

枯野詠む虚子のこころに見る景色
とんぼりに落とした青春のかけら
微笑みの中に潜んでいる本音
賑やかな人もいまでは家族葬
平和への礎だった哲氏の死

池田市　太田省三

移住の子部活は天体観測部
京の町僧侶が通う英語塾
顔を見て話せば分る遠い耳
覇気のない男へ鳩が寄って来る
忘却を武器に生きるぞ陽が昇る

柏原市　津村志華子

望郷の念ふつふつと藁の屋根
小川さらさら青菜を洗う母の影
肉親のだぁれも居ない里なのに
遠い日をパノラマにする夢枕
墓参りとても叶わぬ車椅子

河内長野市　大島ともこ

一肌も二肌も脱ぎ嫌がられ
従順な妻の覚悟に土下座する
どの顔で受け止めようかこの試練
納得は出来ぬが妻はビッグボス
よーいドンいきなり転び力尽く

河内長野市　木見谷孝代

目立たずとも居場所でらしく咲けばいい
笛吹けど踊らぬ非核への道
温暖化不漁続きで変わる食
やっとこさ剥けた今夜は栗ご飯
コスモスが元気をくれる畑仕事

河内長野市　坂野澄子

包帯が未だとれない恋の疵
意地通すわたしは白いドロップス
ひそひそに聞耳立てた箸袋
法話聞き藪蚊をたたく罪ひとつ
あらばしり届きふたりの弾む盃

河内長野市　中島一彌

叱らずに背で人生語る父
無い才を搾りに搾り作句する
劣等感バネに駆け上がる寵児
ワクチンを注射嫌いが7回目
子供らに負ける遊びで媚を売る

河内長野市　藤塚克三

頭に来たら先ずは三回深呼吸
老人は貧乏揺すりが体操や
まぐれですたまたまですと自画自賛
痩せるお茶毎日飲んで水太り
任しとけと気軽に吐けぬ八十路坂

河内長野市　村上直樹

賛助会員に祀り上げられついに寄付
月影に朋友を偲ばんひとり酒
汗と工夫いずれ記録は塗り替わる
欣求浄土きっと世界は丸くなる
ダイヤ婚なお馥郁と菊二輪

河内長野市　森田旅人

好きな道楽しい道を歩くのみ
どんぐりが落ちるとけものみちザワワ
お参りの道は老婆も歩けてる
道草の二人スマホを見てばかり
石を抱くお遍路笠に射す夕陽

吹田市　太田昭

口閉ざし私は秋の風になる
苦も楽も混ぜるスプーンを持つ余生
後退の文字を持たない蝸牛
三百六十五日休日となる悲哀
幸せを少し残して老い支度

高槻市　片山かずお

アルバムを捲れば甦る昭和
どこで打ったか分からぬアザができている
一日遅れまた速達の世話になる
腰ゴムのパンツ秋には手放せぬ
洗たく物をカメ虫払いつつ畳む

高槻市　島田千鶴子

秋場所の太鼓の音よ今日夏日
アレの日を待った待たせたようやった
スーパームーンさあ冒険にでかけよう
オブラートに包み君への愚痴を飲む
秋の子が遅くなったと駆けてくる

高槻市　初代正彦

寝つくまで半時ほどの小さい幸
頃合いをみて娘からくるメール
エアコンよりホーム炬燵が性にあう
小ぶりでもやはり秋刀魚のある夕餉
近所にもできたヨ無人餃子店

高槻市　富田保子

カラオケが今じゃ我が家の隠し味
色取りのお皿が誘う回り寿司
地下街の出方多彩にある造り
無駄話主婦の体操小半日
贅沢は我が窓で見る枯山水

高槻市　鳥居宏

恥ずかしや道行く人に助けられ
妻よりも蚊が好きなのは僕の方
死ぬなよと口ぐせの友急に逝く
疲れたよ猫の形であくびする
アメリカの代理武装のトマホーク

高槻市　松岡篤

治すのは君医者は治すの助けます
孫五人同じ爺から下戸上戸
マスクすると止めるの僕が二人居る
もう最後もう最後だとクラス会
絵日記に孫のどや顔透けて見え

豊中市　池田純子

児童書にポロリと涙秋の夜
秋風がさあと手招き旅仕度
ソーランソーラン元気いっぱい小学校
ノーサイドまで粘り抜きたい私も
猛暑後の今年は嬉々と衣替え

豊中市　上出修

揺れる歳もう過ぎました枯れすすき
大富豪も含まれている平均値
解散の空気読めない風見鶏
きんきんに冷えたビールで生き返る
ジョークにも嫌みたっぷり含ませる

豊中市　きとう　こみつ

綿飴のような赤ちゃん抱っこする
私事ではあるが私に孫できる
おっぱいは出ないが孫をだっこする
お乳やるたび娘が母になっていく
ビートルズを聞かせてみよう新生児

豊中市　藤井則彦

捨て方にも人の値打ちが垣間見え
今生の記憶が甦る最期
長年の節約癖で熱中症
自転車で駆ける人生悔いはなし
忘れっぽさがひょいと未来を切り拓く

豊中市　松尾　美智代

猛暑一転長袖さがす今日の雨
もう最後言いつつ集う友五人
歩きたい秋歩けない脚もどかしい
愚痴言わぬ夫に感謝草を引く
自転車漕いで一時間半孫が来る

豊中市　水野　黒兎

クラス会恩師囲めばみな童
村芝居村長さんは馬の脚
金比羅のごとく息切れ歩道橋
苦労した形で軍手捨ててある
ふる里の夕陽の中に溶けるバス

富田林市　中村　惠

シャッターの重さが朝を遠くする
風が囁きにくる病院のベッド
この次はたぶんわたしが邪魔になる
涙を流す絶妙のタイミング
飾るもの捨ててわたしの冬仕度

富田林市　山野　寿之

秋を蒔く汗汗汗の夏の鍬
種飛ばす西瓜がぶりとまだ傘寿
補聴器が耳に馴染んだ開く蓮
温い嘘優しい嘘に絆される
スニーカー弾む声高みかん狩り

寝屋川市　川本　信子

譲られた席に三回アリガトウ
芸術家に憧れて行く絵画展
白米に漬物で胃は満たされる
ほぼ皆勤仲良くなった丸ポスト
まだ傘寿活力沸いてやる気出る

寝屋川市　伊達　郁夫

黒ネクタイ車中で締めて行く通夜
ケイタイの孫の絵文字に思案する
妻が逝き夫婦茶碗を片付ける
受けた恩繋ぐと数珠が出来上る
カーテンへ隙間に揺れるサスペンス

寝屋川市　冨山　ルイ子

10月はまだ寒暖がままならぬ
厚地の服うす手の服と日に何度
冷蔵庫アイスクリーム入り切らぬ
リュックサック冬物追加してほっとする
晴れた空庭で家族で紅葉狩

寝屋川市　平松　かすみ

この歳を乗り越えられて五重丸
バースデーメロディー付きで来たメール
新聞もルーペ片手に持ちながら
就寝へ地震想定してコート
一羽折る度に溜息つきながら

寝屋川市　廣田和織

秋の色まとう女の成熟度
幸せを探し最後のマッチ擦る
街角を曲れば後期高齢者
妹ができて小さなママになる
定年へようやく僕に陽があたる

羽曳野市　磯本洋一

明日がある何があっても明日が来る
傍に居て平和な地球願う月
猫撫で声孫が覚えた何時何処で
給食を食べて弁当平らげる
花が咲き蝶舞う道をランドセル

羽曳野市　藤原大子

線香の香に安らぎつ墓掃除
難しい事はスルーでゆらり生き
遠慮ない友の注意で目が覚める
SNS道徳心が泣いている
腕組みをしていてチャンス遠ざかる

羽曳野市　三好専平

ひとときの命いただきて秋深む
今日はもうお母さんのほかに言葉なし
トラブル汚染ぎこちない政治劇
助けられ病棟静か医師笑う
小さな胡桃がにっこりお前のお昼

東大阪市　北村賢子

外出をする度増える花の鉢
ベランダを花いっぱいに家籠り
ひさびさの布団太鼓のたのもしさ
ありがたい今日も普通の日を過ごす
地球上戦火の消える日を祈る

東大阪市　佐々木満作

研鑽を積めば誰かの目にとまる
才は歳卆は卒略字使わない
不審メールとにかく開けず削除する
インバウンドマナーが少し欠けている
長生きは少し太目がいいそうな

東大阪市　西村哲夫

不老不死娑婆の事では無いようだ
寂しさにほとけ寂しい顔をする
義援金私は何をすればいい
答え合わせ遺影の前で泣きじゃくる
快晴も雨降る時も良い天気

枚方市　谷英也

八十路でも心ワクワクチョコレート
いつの日か君も私も千の風
プライバシー表に出せばシャボン玉
八十路でも恋する心脳活化
きみわれも昭和生まれの枯すすき

藤井寺市　鴨谷瑠美子

キリギリス悩んだことは言わぬだけ
白い花だったひっそり咲いていた
カレーライス多くを語らなくていい
ミキサーに入れると大阪弁になる
菊人形が始めています英会話

藤井寺市　鈴木いさお

八冠へ聡太が刻む神の棋譜
泣けるだけ泣いて友の死受け入れる
好きな人に好きと言えないあかんたれ
もう少し生きてていいですか私
南海トラフ生きてる内は来ないでね

藤井寺市　吉田喜代子

風邪ぐらい思えた昔なつかしい
体操を休みし我に電話来る
血3本抜かれて余病ない証
御褒美においしい米を買いました
虫退治薬をまけば雨が降り

箕面市　大浦初音

家に帰りまじめの仮面脱ぎすてる
丸くなったのは性格でなく背中です
言葉はいらぬどこへ行っても微笑みを
絵手紙に友の思いがにじみ出る
杖をつく歩幅に合わす二人づれ

箕面市　出口セツ子

弱いから強いふりしている仮面
優しさに触れると涙もろくなる
眠れずに小説読んでいる夜長
手の上で踊っておこう世は平和
優しい子居るから生きていられます

箕面市　中山春代

夏バテに感謝すんなりダイエット
瞬発力テスト信号が変わる
真夜中のラジオのっとる韓国語
「ヤバい・キモい・ムズい」通訳がほしい
早々と来年を買うカレンダー

箕面市　広島巴子

頑張ったワクチン七度打ち止めに
墓守りのようにあちこち曼珠沙華
曼珠沙華燃えて悲しい墓じまい
ピーヒャラらいいな巫女舞う村祭り
ブギウギのリズムで掃除軽やかに

八尾市　寺川はじむ

沸騰へ手術まだかと乞う地球
ロボットがメスを握っている主治医
わくわくで買った新車も乗り納め
アレあれを遊び心にして快挙
賞味期限切れて変わらぬ人の味

八尾市　村上ミツ子

夏から冬へ一足飛びに進む
探しても小さい秋が見つからぬ
いくつになっても叱ってくれる友がいる
叱られてもちっともいやな気がしない
かたはらいたきもの電車の中のメーク

大阪府　米澤俶子

遠い日の思い出祭囃子聞く
見た目には元気そうでも弱い足
刺激も効かぬ延びた輪ゴムのような脳
負けたのが悔しいうちはまだいける
追い風にもう頼らないマイペース

神戸市　奥澤洋次郎

ジャニーズ被害の多さメディアのアホさ
十月になって向日葵元気なり
謎だらけの私が詠んでいる川柳
冷めるコーヒ幸せが揺れている
今更に女房居らぬと困ること

神戸市　城戸誓子

妻の通夜開けて生きよと腹は減る
逝かれたら素敵ばかりを想い出す
せつなくてただ逢いたくて星月夜
逢いたくて泣きたい夜はぬる燗に
地球号泣線状降水帯

神戸市　輿水弘

うぬぼれラベル剥がしつきあいホンマもの
聞き流す術老いてすこーし付けました
昼行燈とんちんかんで座が和み
メタボで米寿怪しい薬それかもね
まっすぐに線が描けたらいいとする

神戸市　近藤勝正

夏と秋競い合ってる萌黄色
秋色を淋しく歩く八十の坂
やがて来る異常気象の寒い冬
ネギ刻む音が知らせる今日も晴れ
好きなもの最後に食べる貧乏性

神戸市　斎藤隆浩

熱帯魚のエサに売られている金魚
飲み放題元を取れない年になり
元彼の思い出刻むシュレッダー
車間距離時々変えて共白髪
酒と川柳スローライフの友として

神戸市　冨永恭子

健康であれば家庭に灯がともる
二人三脚勝手にせいと言えません
蒔き直しあきらめません芽吹くまで
行けもせぬ観光列車の冊子見る
お隣に座ってくれてありがとう

神戸市　敏森廣光

手を振れば相手もきっと振り返す
後期高齢望まぬ印つけられる
金婚式なんと遠くへ来たもんだ
プライドが生きるパワーで生きる邪魔
恥に恥上塗りすれば平気です

神戸市　能勢利子

七回目のワクチン済んでクラス会
コロナ禍に慣れて元気な日本丸
元気だと自然治癒力湧いてくる
出席と出して今日からウォーキング
十一月一日に花マルつけた仲間達

神戸市　山﨑武彦

懐かしや母の形見のくじら尺
鯨尺夜なべの母をいとおしむ
病む爺がむっくり起きる祭笛
まっすぐな道を真っ直ぐ行く愚直
プーチンが押すかも知れぬ近未来

明石市　糀谷和郎

明日あると信じる人に来る未来
深夜メール朝食中とハワイから
淋しいね水に流せばこれっきり
向きあえば律儀に返し来る木霊
笛吹くと背筋がすーと伸びてくる

芦屋市　荒牧孝子

夢うつつ母を呼んでも返事なく
鏡の中時の流れを思い知る
ときめきは胸の小部屋に隠し持つ
背負うものおろしたとたん又ひとつ
広い空運命すべて受け入れる

芦屋市　新阜義明

優先席ルール無視されじれったさ
打ち水も沸騰化するこの暑さ
回復力日々に長くへにらむ天
猪が人超えた島行く末は
綱不在漬物石が無い悔だ

尼崎市　宗和夫

転職コーディネーターほぼ手配師
若者も追い詰められて闇バイト
若者が夢を持てない国となり
政治家が変われば若者も変わる
二人でも混み合うトイレ洗面所

尼崎市　永田紀恵

芸術よヌードモデルにある矜持
過ぎた日の暮らしを語るわらべ歌
主なき隣家で留守居するやもり
肩書きが取れて余力はボランティア
七光り遠い昔に消えました

尼崎市　羽奈和子

ハンモックに重さ制限されました
ハルカスは抜かれても西日本一
ポン酢まで手作り自慢する夫
キャッシュレス横目に今日も現金で
スポーツも北の選手は命がけ

尼崎市　藤井宏造

日本の原風景に小津映画
LからLLはアッと言う間です
見切り品買ってひそかにVサイン
悪口を言うたび目付き悪くなる
退屈で近所の猫とにらめっこ

尼崎市　藤田雪菜

葉陰から虫の声して秋が来る
標示見て安心してる日本製
作句には側に控える辞書がある
横着をして大切な花瓶割る
山行きのリュック出番は今ジムへ

尼崎市　森　菊江

社長の歳見れば息子と同じ年
お尋ね者のように写ったマイナンバ
予定なし上茶を淹れてクラシック
きれいに食べた鯵骸骨になった
山盛りの飯食べた子もお爺ちゃん

尼崎市　山田厚江

十一月の日曜はみな埋まってる
好きな物本とあなたと缶ビール
ミゼットからベンツまで乗り父は逝く
一人カラオケ行ける様になった僕
ゼレンスキーの笑顔が一度見たいもの

加西市　山端なつみ

尻に火が付いてエンジンかかり出す
川柳塔また速達で送る破目
何事も完璧は無理忘れよう
本当に私が欲しいのは時間
八冠の重圧耐えよ藤井君

川西市　山口不動

老人に健やかなりし孫子供
ガイドさんタイガース帽被ってる
ふる里の生家を売ると兄が言う
生かされて今満月に吠えている
ウクライナ僅かな寄付でスミマセン

三田市　稲角優子

老い夫婦生命線を競いあい
握り合う手に歳月が溶けてゆく
折り紙が祈りの形になってゆく
押し花のすみれ微笑む母の辞書
非正規の割の合わないこの歪

三田市　上田　ひとみ

一時間経てば優しくなれるはず
お人形さんみたいに今日もその席に
隠しごとないなんてもう嘘ついた
あくせくと何を探しているのです
楽しい楽しいとまた言い聞かす

三田市　大西　重男

プロダクション往生際が悪すぎる
新世代席巻している将棋に碁
同胞の支援続きに疲れ出る
各界にNGリストありそうだ
秋晴れのような政治を民は待つ

三田市　九村　義徳

切り取り線ギリギリ渡り生きてます
空っぽの心に染みる亡父の声
雑草の如く生き抜き花咲かす
花しおり亡母の日記の最終章
相槌は打つが本音は出しません

三田市　住吉　美和子

秋風に夫婦の会話も刺がとれ
食欲が戻ってきたぞ鍋支度
味覚の秋持病の糖尿切ないワ
四季は巡り皆ひとつずつ齢をとる
猛暑日に豪華おせちのコマーシャル

三田市　多田　雅尚

善悪も重ねて生きた深い皺
逆らった父は無言の壁となり
旬の味知らず育った好き嫌い
朝起きた気分でマスク色も変え
ぼんやりと眺める窓に有る孤独

三田市　中山　昭美

迷ったら無難な方へ舵を切る
腕時計外す姿もイケメンだ
夫婦でも自分時間でリフレッシュ
尾ひれ足しおばちゃん話長くなる
面白く話したいのに根が真面目

三田市　野口　真桜子

風呂帰りふらり足向く屋台酒
真夜中の電話　介護突然やってくる
ぬいぐるみ抱きしめ絵本読みきかす
脇役の妻に尻尾をつかまれる
ぽっくり寺詣でるバァバの医者通い

三田市　堀　正和

核爆弾一万発もどうする気
今月の一大行事ドック入り
代役は無理だが杖にならなれる
飛べそうな気になる秋の日本晴れ
名月へ大吟醸が顔を出す

三田市　松下英秋

癌消えた医師驚いて妻安堵
家のどこか蝿はひっそり死んでいる
ヘルメット被って五センチ高くなり
恋愛の悩みあるらし小学生
介護するいつかはされる日も来るか

宝塚市　丸山孔一

灼熱の店頭焼鳥焼うなぎ
道案内するよと頭上赤トンボ
マスク取るなイメージが変わる
田んぼアート自然が徐徐に塗り上げる
この咳は風邪かコロナか喘息か

丹波篠山市　酒井健二

蹴っ飛ばす小石一つが見つからぬ
良心に恥じても元に戻らない
長老が仕切ると息が詰まりだす
真っ直ぐに生きてて心病んでいる
返せないご恩はユニセフに返す

丹波篠山市　藤井美智子

カレンダーメモに頼って恙なく
酷暑から開放されて鰯雲
目標は卒寿笑顔と足丈夫
果てるまでロマン道づれ老い歩む
けんかもし睦み合いした夫遺影

西宮市　福島弘子

鯨幕大往生の百弐歳
遺品整理老母の年季の鯨尺
趣味仲間いつもの笑顔会う安堵
残暑に耐え日増しに育つ亡母の菊
円安のボジョレーヌーボー少量瓶

西宮市　福田正彦

転んでもすぐ起き上がる人でいる
青春の眩しさ今も噛み締める
達観か驚く事は何も無い
程程の暮し目指すが些と辛い
雲流る月は一緒に走れない

南あわじ市　萩原狸月

助詞一つ輝く位置に入賞句
カラオケが話の腰を折る酒宴
店員に聞いて迷いの複雑化
諭吉ほど出番ないかも栄一は
予備知識ここの事かと旅歩き

岡山市　大石洋子

ストレスを門歯が受けてぐうらぐら
口角をあげておかねば泣きだしそう
百歳の骨のもろさよはかなさよ
一世紀生きた人です小さいです
好きだったメロン供えてお見送り

岡山市　工藤千代子

笑わせて笑って凪いできた妬心
よけいな事は言うなと梅干しの種
すぐ笑う癖でライバルなどいない
夫以外話し相手もなく昼寝
歳をとる楽しみだってありました

岡山市　永見心咲

一石を投じる御澄ましな沼へ
見え隠れ忖度好きの尻尾だな
引き際は自尊心との折合いで
隆盛を昨日の様に語るドア
きれいごとばかり並べて星月夜

岡山市　前田恵美子

凡人はやりたい事をしてるだけ
手をつなぎ夫の受診についてゆく
守宮とハエの戦い守宮加勢する
娘の家の鍵あずけられ忙しい
十五夜の月に平和をただ祈る

笠岡市　藤井智史

あなたへと合わせる音を置きにいく
ベロンベロンに酔う杞憂する未来
酒を呑む　何をやってんだろ俺は
若さでは負けるが苦労では勝てる
クオリティースタートの良い金曜日

岡山県　髙岡茂子

柿落葉神のセンスに酔い拾う
どの局も食べ歩きばかりのテレビ
スマホの操作一つ覚えて一つ忘れ
電車の内(なか)はスマホが支配する世界
ドライブレコーダーに見張られながらのドライブ

岡山県　田中恵

柿たわわたら腹食べていた昭和
さがし物半日かかるロスタイム
終電車風が見送る無人駅
ポンコツ車だけど私の味方です
前向きに生きる泣いても笑っても

岡山県　藤澤照代

ジョーカーを使い果たして妥協する
「オーイお茶」我が家にはない均等法
ドングリのお出掛けいつもベレー帽
本日は秋晴れしたいこと羅列
秋刀魚焼く煙恋しい換気扇

広島市　岸本清

名月を愛でる今夜は月見丼
レジオネラ意識しながら風呂掃除
わがままにのんびり過ごす老いの坂
辛口のコメンテーター待ち望む
財政難議員削減なぜやらぬ

尾道市　小川道子

天高く高く掲げたい恩義
限られた時間の中で泳ぎきる
感情の起伏おだやかなる海よ
認め合い信じ合えた星だった
魂を揺さぶるほどに秋が好き

尾道市　小畑宣之

八十路坂鏡に母の面影が
どん底と覚悟をすれば後が楽
鍬振るうクラシック良し演歌良し
あっさりが好き人間も料理もね
まだ若いテレビ見ながら泣いている

竹原市　岩本笑子

守るものあってか小さな鈴を買う
何を祈ろう花が散ってゆく
少女の心になって仏間の灯よ
四捨五入減らされたのはお父さん
ブドウ一粒今日の昼食はゆかいゆかい

三原市　笹重耕三

母さんの辞書には載っていない楽
畦道に父のヒントが落ちていた
縁側の椅子が脳ミソ空にする
何気なくうれしい雨上がりの虹
貧乏の我慢くらべはもう飽きた

山口市　兼崎徳子

アバターで仮想空間プチデート
違うからけんかになるの惹かれるの
恐いのは猫なで声の人でなし
死に顔は清く正しく美しく
やわらかに人の心を解く銘酒

岩国市　上村夢香

辻井さんのピアノ聴きつつ読む手紙
朱の鳥居独り占めする船上で
ほめられて彩り豊か夜の膳
お布施弾む長いお経をしばし聴く
おばちゃんはまたねまたねがまだ続く

鳥取市　池澤大飽

帯に合う着物探して街歩き
酷暑でも団扇ばたばたなんてせず
国無策ばたばたと会社倒産
小漁船がばたばた帰港日焼け顔
奥さんを大事にしろとひやかされ

鳥取市　奥田由美

乗り降りがどこでもドアの過疎路線
閉店で大人買いするボトル酒
出来るはずと孫がムチ打つダイエット
エンピツの細さ求めるダイエット
大掃除で貧乏神が残される

鳥取市　岸本宏章

朝はパンマッカーサーに仕込まれた
蜘蛛の糸生きる権利を主張する
初冠雪目視が頼りだったとは
体温を測るマシンがある関所
勝ち負けがはっきり分かる囲碁将棋

鳥取市　岸本孝子

歴史に残る暑さも無事に越えました
これも仕事三度きちんと食べている
虎万歳選手に貰い泣きをした
秋の夜は口遊みたくなる童歌
うずうずと出番待ってたおでん鍋

鳥取市　田賀八千代

虫食いのドレス儚く散った恋
我が胸で今も脈打つ時計台
あやふやな関係だから切れぬ糸
カロリーゼロ気ままな会話水温む
赤子泣くたびに母性が光りでる

鳥取市　永原昌鼓

クラシック流れ聞き入る歯科の椅子
痛い歯を抜いて馴染めぬめしの味
いいニュースいくら待っても届かない
幸せに今日も眠れる屋根の下
ふる里に飾る錦も金もない

鳥取市　福西茶子

補聴器を外して静かなる世界
徘徊を自己責任と言うなかれ
午後三時大学芋とコーヒーと
ご先祖が集まるように彼岸花
お墓から同じ高さに城がある

鳥取市　山下凱柳

ジャニーズスター人気どうなる気にかかる
秋の味覚求めて生まれ故郷へ
毎日が日曜なのも疲れます
気がつけばこんな年かと仏様
老人施設入所願うも狭き門

鳥取市　山野すみれ

一日をフリーサイズにして暮らす
日に余る嘘を摘み取る糸切歯
しょげててもコスモス揺れる散歩道
漬け物を褒め煮物には触れもせず
ささやかな野菊抱えて墓参り

倉吉市　大羽雄大

敬老会商品券に変えたコロナ
老人の多い町だが姿見ぬ
我が町に坂道のある散歩道
段上る上るよろこびリハビリー
妻が留守タッパー食品が並ぶ

倉吉市　牧野芳光

失言を刻み忘れぬようにする
階段を上って誰も下りて来ぬ
指切りで預けたままになっている
目を閉じて冬の荒野に身を晒す
私が死ぬと桜の木が生える

境港市　藤原久直

八十肩シャツの着替えも一仕事
独り言よく言う癖に気が付いた
素直です種も仕掛けもありません
優先席素直に座り感謝する
ワンテンポ遅れて笑う間の悪さ

米子市　池田美穂

自分だけはどんな嘘でも騙せない
急ぐ時は何故か隠れるかぎスマホ
松茸は匂いどこかに置いてきた
独居宅一日テレビしゃべってる
人恋し夫にやさしくなれる秋

米子市　伊塚美枝子

酒値上げうちの家計は大ピンチ
今朝もまたメガネ探しがルーティン
名女優になれる演技で送り出す
夜遊びの帰り満月道づれに
後数年天国行きの徳を積む

米子市　後藤宏之

カタカナ語手もとに辞書が離せない
調子は？と孫が心配してくれる
カラスのスクラムゴミ袋を攻める
暇つぶし少しいたずらでもするか
本当の悪（わる）はなかなか出てこない

米子市　後藤美恵子

天高く後の祭りの鏡見る
期待する出雲会議の縁むすび
クラス会青い時代にすぐワープ
女性の地位時代遅れを免れぬ
喫煙を注意し煙たがられてる

米子市　妹能令位子

準備した遺影の写真笑いすぎ
天国でダークダックスハモルだろう
ロマン追うやはりお金が必要だ
テレビでは戦地の臭いしてこない
百薬の長でなかった亡夫の酒

米子市　竹村紀の治

痛む歯がまだ残ってる生きている
居酒屋に特別シート持っている
収集車来るまで食べているカラス
買う度に教えて貰うセルフレジ
挨拶が済むまで待っているジョッキ

米子市　中原章子

真っ当に生きてコロナに立ち向かう
休むのも仕事と思い昼寝する
新聞の明るい文字を拾い読み
手や足が甘えていたら萎えてくる
当り前が日日失われゆく我が身

米子市　野川宣子

あたためた話の種を持って出る
ノンアルで気分だけでも仲間入り
七年後中秋の月眺めたい
平凡に暮らせる今がありがたい
年重ね負けず嫌いになるふたり

鳥取県　門村幸子

おっとっと加齢なんぞに負けられぬ
お気に入り独りのんびりする時間
ひらがなで生きてこの世を愛おしむ
猫のようにのらくら生きるのもベスト
「もっともっと」人間の欲果てし無い

鳥取県　竹信照彦

吾が家系八十五歳最高齢
よくもまあ斯くも生きたと自画自賛
妻長寿吾が終活に憂い無し
摂生し健康寿命全うす
帰路につくやっぱり痛み消えてない

鳥取県　本庄ひろし

咲きました功を奏した追肥料
大雨で怪物になる排水路
なつかしむ時代肴に先ず一献
読み聞かせ先に寝るのはおばあちゃん
伸び代が有ると信じて今日過ごす

鳥取県　山下節子

国宝の仏像虫に喰われてる
色柄で時代のわかる着物です
昭和史をアニメで知った現代っ子
予防注射終えて安心して暮らす
諭すのにきつい言葉は似合わない

松江市　石橋芳山

家族葬坊さん抜きでやんなはれ
どうだっていいさ誰も見ていない
甘かった姉だがニガクなってきた
光量に溢れて向日葵は消えた
身に覚えないのに泥沼に嵌まる

松江市　藤井寿代

壊れた地球人間も狂ってる
私サッカー隣で夫時代劇
ノートレと信じて通うテニスコート
岸田さん値上げラッシュに泣いてます
いろいろあったカレンダーもあと三枚

松江市　松本　知恵子

夏越えた白いポニーに会いに行く
やっと秋時間足らないスケジュール
秋の夜の水燈路良し松江城
栗あけび採る楽しさが懐かしい
早起きの時間楽しむ齢になる

出雲市　伊藤　玲峰

茜空見惚れ信号見落せり
二階住まい階段に足鍛えられ
転けないぞ転けたら駄目よ転けませぬ
先立った夫に守られ息災に
あと少し仲間で居ますよろしくね

安来市　原　徳利

中秋の月夜の酒はなみなみと
駆け込んだ庶民の味の発泡酒
夏の名残りに咲いたオーシャンブルー
お色気の裏声を出す螽斯
それぞれの立場で悩む多様性

東かがわ市　川﨑　ひかり

斜め顔亡夫の面影宿す孫
あかね空おんぶ母子の影のびる
影踊る偶数月の十五日
深い意味ないです愛想笑いです
秋祭り遺影と見てる孫の獅子

松山市　大内　せつ子

たこ焼きの蛸がコンニャクだったとは
笑って泣いて君とおんなじ道にいる
夕暮れの小道「一番星みいつけた」
気づかない振りかな頭掻いている
頭上注意だけじゃ足りない謀

松山市　栗田　忠士

故郷に僕の初心が埋めてある
深夜便何を届けてくれますか
明明後日と一昨昨日がコラボする
プレリュードの森で幸せをさがす
大根の白さが無垢を主張する

松山市　古手川　光

酷使した家のエアコンストライキ
秋ですよ!金木犀が近所から
晩秋の景色人生ふと重ね
ストレスは貯まった減ったのはマネー
よちよちでスタートよぼよぼでエンド

松山市　宮尾　みのり

辞書暦地図計算機好奇心
お相伴は村上春樹秋深む
来年も生きるつもりでカレンダー
山坂を越え初恋とつむぎ合う
苦労までもいい思い出に変える歳

松山市　柳田　かおる

正解が二つあるから選べない
息つぎが下手でクロールにはとおい
答ばかり求めて前に進めない
本心が玉虫色になっている
躓いて時計の針がぎゃくもどり

今治市　安野　かか志

夕焼けに明日の酷暑が予知される
内航で今も息する機帆船
失敬に来ないカラスは避暑なのか
千金の愛想笑いに客が寄る
一冊のショートショートで済む自伝

西予市　黒田　茂代

蠅も寂しいか書斎へ従いてくる
虫の声消えて芒のすすり泣き
琥珀色心の秋が深くなる
立ち位置を替えてじっくり自分見る
思い切り笑って原点に戻る

西予市　西田　美恵子

知った振りしたばっかりに残される
病名を告げられ友は泣くばかり
年金日今日はマスカットを追加
化粧した風が都会は吹いている
月はいいみんな仰いで見てくれる

高知市　三谷　松太郎

このところ思いの丈も液状化
長老と言ってくれるなまだ早い
老い先はふふと笑ってそれでいい
ゴールには自己愛が待つ一等賞
正座だと機嫌よくない猫がいる

阿南市　小畑　定弘

白い風わたしが残す一行詩
花の野に恋する人が揺れている
デコボコの道を選んだ意地っぱり
元気です今日も日記に嘘を書く
ありがとう良い爺さんでいたいから

熊本市　杉野　羅天

日本の証しだ捻り鉢巻だ
六十年の付き合い永し趣味元気
後期高齢次仙人と行きましょう
まっすぐな恋が似合うなあのお方
酷暑馴れ涼しく思う二十九度

宮崎県　黒木　栄子

しゃんとした背も気付けば丸くなり
たくわえたストレス山へ置いて来る
貰うのはうれしいお返しに悩む
剥き方で気性の分かるゆで卵
在りし日の一味ちがう祖母の蕎麦

北九州市　小松紀子

ありがとう優先席が心地好い
あるがまま受け入れくれる息子に感謝
三途の川原最愛の児と出逢う夢
リハビリは自分のためだ湧く気力
頑張った自分をほめて除夜の鐘

唐津市　坂本蜂朗

お銚子の底に沈んでいる本音
卒寿前杖はあるけどまだ飾り
四肢さすり老いをしみじみ噛み締める
長生きをしても叙勲とは無縁
学歴の壁を子供がひょいと越え

札幌市　小澤淳

北海道避暑の気分のない夏が
我が子には本気で打って悔いている
物価高スーパー6時以後が混む
空調も入れた嫁さん早く来い
街に熊山はドングリ不作なり

（前月分）大阪市　大川桃花

名所旧跡ないが平和な街に住む
猫がいて男がひとり無事暮らす
買物は夕方にするおばあちゃん
極端に記憶力減りメモ増える
特別な事は言わない長寿の秘訣

（前月分）芦屋市　荒牧孝子

無駄にした時間を悔いる老いの日よ
老いた今強い母でも弱くなる
忘れる字スマホの罪にしておこう
DNAほめられ育つ孫とばば
天国の住所教えて逝った友

（前月分）豊中市　池田純子

三歳のすねて見事な黙秘権
道くさはママにお花をあげる為
十歳の夢に濃淡付いてきた
お風呂の壁に地図とひらがなアルファベット
原画展しばし絵本の中に居る

（前月分）丹波篠山市　北澤稠民

喧騒世の中子供に未来ありますか
友の愚痴聞いてストレスためている
終点は故郷の地と決めている
散歩道秋をみつけて孫にメール
川柳の解る医者には安堵する

（前月分）山口市　兼崎徳子

年ごとに蝶にも蛾にもなるメイク
青春の終わりを告げた夏花火
ムキムキが今は何だかかっこいい
マッチングアプリで恋に落ちていく
手を焼いた私が今は恩返し

（榎本舞夢さん、山﨑武彦さん、黒岩靖博さんは42頁にあります）

菠薐草の花 ⑫

野沢省悟
「川柳触光舎」主宰

当たり前じゃないのよ普通に生きるって　大内せつ子

辞書によると、当り前（特に変ったことがないこと）。普通（ごくありふれていること）とあり、ほとんど意味は変らない。一句として漠然としているが、この似た言葉を並べたことで作者の想いが伝わってくる。僕が勤務した病院は、難病の患者さんや、重度心身障がい児（者）の方々が対象であった。その方々と接して来た僕にとって、この句を実感として感じてしまう。吾々は多くの普通でない中で、たまたま当り前に生きているのだ。

本当に痒いところがわからない　前田楓花

猛暑のせいか今年は蚊があまり出なかった気がする、蚊も猛暑には弱いかも。蚊に刺された痒さは、刺された場所もわかるし薬を塗ればスグなおる。作者の痒さはそんな痒さではなく、もっと根元的な痒さ。そうでなければこの句は生まれなかったと思う。たぶん読者の多くも持っている痒さ。

梨をかじり秋の甘さを音にする　水野黒兎

上手い句。梨の歯ざわりが聞こえてきそうである。鋭い川柳や穿ちの効いた川柳もいいが、この句のように日常の幸せを、掬い取る川柳もいい。「甘さを音に」は、これまでの川柳の研鑽による表現。

迷い込んだ蜂へ網戸を開けてやる　小谷小雪

秋というよりは初冬の風景。少し冷たい空気の中での作者のささやかな行為。初冬になると窓辺に小さな虫がよく死んでいる。ただこの蜂はまだ生きていた。どうせ死ぬだろう蜂だが、少しでも自由な世界で生きさせたい。そんな作者のやさしさのあふれた句であろう。

近未来人類博があるのかも　広島巴子

この句の前に〈憧れの恐竜博の大ロマン〉とあり、作者が恐竜と人類を同列に並べて眺めている壮大な句と思う。あれだけ繁栄した恐竜が隕石によって突然滅びた。人類だっていつそうなるかわからない。ただ、その人類博をみるのはどんな生物だろう。それを川柳で考えるロマンがこの句にある。

泥臭さ芋で育った海馬です　横山里子

「海馬」は脳の一部で、記憶をつかさどっているという。作者は自身を「泥臭い」と思っているらしい。そしてそれは芋を食べて育ったからではと推察する。この発想には驚いた。もしかすると食べ物によって記憶ができているかもしれない訳だ。読者の皆さん、ふり返ってみる必要があるかも。僕も思い当ることがちょっとあります。

朝顔のチュルンと萎む潔さ　福西茶子

山の向こうでニヤッと湧いた白い雲　牧野芳光

朝顔は、朝咲いているが昼すぎにはすぐに萎んでしまいます。「チュルン」は絶妙な表現。そして白い雲が「ニヤッ」と湧く。川柳は人事を詠むことが多いのですが、自然を詠んだってイイ。この二句には自然と川柳をつかって戯れている作者の姿があり、それがまた楽しく伝わってきます。

英語 de Senryu⑭⑭

麻生葭乃 『**福壽草**』(1955)

英 訳 **吉村 侑久代** Kim Horne

記念品社名れいれいしくきざみ

a memorial gift
company's name
carved ostentatiously

夜ふかしも朝寝も父にまけじとす

sitting up late at night
getting up late, too
son is not defeated by father

---

memorial gift 記念品 *company's name* 社名 *carved* 刻まれている
ostentatiously 人目を引くように *sit up late* 夜ふかしをする
get up late 朝寝をする *be defeated by* (人が) ~に負ける

~リバーウィローのため息~ ㊺ ブルガリアを代表する詩人、デミタール・アナキエフ

***Dimitar Anakiev*編ブルガリア俳句選集『人間』 *human:an anthology of Bulgarian haiku*(2023 Red Moon Press USA)の序文と俳句を紹介(1)** ＊俳句和訳: 吉村侑久代

ブルガリアはバルカン半島南東に位置し、トルコ、ギリシャ、ルーマニア、セルビア、マセドニアと国境を接しています。パソコンのサイトに、*Bulgaria*、*haiku, senryu* と入力するだけで膨大な数のブルガリア短詩形関連の情報があふれ出ます。個人の創作活動だけでなく、関連組織の行事や、書籍数に驚きます。今回２回にわたって紹介する"*an anthology of Bulgarian haiku*"も首都のソフィアをはじめブルガリア全土からの作品が収集されています。編著者のデミタール・アナキエフは、「作品はブルガリア詩人の心の核にあるアニミズム、神話的な要素、そして伝統主義の三つの特徴があり、それらはいわゆる西洋ハイクが地域文化の創作物であるのと異なる」と、ブルガリア作品の独自性を語っています。いくつか紹介しましょう。

Butterfly/ fixed with a pin…/ a new Calvary.
(蝶 ピンで固定されて 新しい受難) *Dimitar Stefanov (1932-2018)*

Winter lake/ I'm looking for myself/ under the deep ice
(冬の湖 深い氷の下で 自分自身を探す私) *Edvin Sugarev*

full moon/ the owl on the church/ with a halo
(満月 後光を背に 教会にとまる梟) *Lyudmila Hristova*

Continents/ are shipwrecks/ in the tear of God.
(ヨーロッパ大陸は 神の涙の中の 難破船) *Silvia Parusheva*

誹風柳多留一二三篇研究 40

高野範雄・山田昭夫
小栗清吾・細井龍夫
伊吹和男
清博美

320 すけんに向顔をなさぬきつい事

高野 「向顔」は、対面する事。顔を合わせること（『新編川柳大辞典』）。「きつい事」は、甚だしい。ひどい（『江戸語大辞典』）。

吉原の最上級の遊女である呼び出し昼三は張見世に出ないのを、冷やかし客は、ひどいじゃないかというのである。

山田 賛。

すけん物二階に居ルハしらぬなり　一二三22
見世売リをせぬけいせいは手がらなり

しかし、新造・禿の付かない平昼三あたりは出たようである。

もふせんて三分の顔となみの顔　宝九宮
真ン中に御座なさるゝが三分也　筥一24

小栗 賛。「きつい」は、ニュアンスのむずかしいことば。この句の場合もいろいろに考えられるが、素見如きには、顔を見せていただけないスターということで、「すばらしいことだ、えらいもんだ」ではないか。

清 同。「きつい」は悩ましい言葉だ。

321 とれ程な事か孔明首をまげ

高野 「どれ程の事」は、①数・量・程度・価値などを疑い問う意を表す。どのくらい。いかばかり。いかほど。なにほど。③たいしたことのない意を表すのに用いる（『日国』）。

「孔明」は諸葛孔明。名は亮。中国、三国時代の蜀漢の宰相。戦略家として名高く、曹操を破り天下に名を馳せた（『新編川柳大辞典』）。江戸庶民にとって『三国志演義』の諸葛孔明は人気抜群であった。

戦略家の孔明が首を曲げて考える位の事であるから、かなり難しい問題が発生したのであろう。

孔明か首をかだけだむつかしさ　明六仁3
孔明かうつむいて居るむつかしさ　一二5

小栗 賛。例句を含め首を傾けた句が三つもあると何かにこじつけたいが思い当らず。

細井 賛。「何れの場合の句か不明だが、孔明が最も窮地に立たされたのは琴の場面」だろうという南説をとります。

伊吹 賛。場面を特定するより、孔明の一般句とした方が面白いと思う。

清 小生は南説をとりたい。

322 後家のりうさんはねられたやつがふれ

高野 中条での堕胎と解する。「撥ねる」は、突き戻す。拒否する。

句は、中条へ入ろうとしている後家を見かけたのであろう。それを嘗ては言い寄って振られた男が言いふらしているというのである。現代でもこういう男は居る。

仲条かものさと後家ハ大丈夫　拾二19
御尤様と中条後家にいゝ　安四礼1

山田 賛。中条流とは限らないでしょう。

小栗 賛。「中条」を積極的に表現していないところを見ると、ただの流産か。珍しい句であるが。

伊吹　賛。妊娠するはずのない後家が流産。

清　中条での堕胎を流産とする礎稿には賛しかねる。流産と堕胎は別物とすべき。伊吹説でいい。

323　向ふの人の無ィとこへ下ヶられる

高野　「向うの人」は、「わらはの格子の内にたちて、さしむかひたる家のあきびとをよびて物かふとてむかひなる人々と、こゑあげてよぶもうつくしげなり」(『吉原十二時』)。吉原廓語。「向の人は質屋の人なり、……」(『麓の色』)。「下げられる」は、「この西河岸の二朱店は、格下げの遊女の懲戒の場でもありました。それぞれの妓楼の制度・習慣に反した行動のあった場合、楼主に甚だしく不利益をもたらした時には、上級の遊女でも、この懲罰を受けたものであります(『川柳江戸吉原図絵』)。「河岸」は、「遊廓の東・西の側は河岸とよばれた片側店で店の前は路をへだてて板塀でかこわれています。この板塀は遊女の逃亡を防ぐのと、外部からのすき見をふさぐ意味からのもの……」(『川柳江戸吉原図絵』)。

　掟を破った遊女は、西河岸あるいは羅生門河岸へ払い下げられた、というのである。西河岸を向うの無い所・下げられる。が作者の工夫であろう。

　おきてを破り西河岸へ配所する　四三31

　河岸つとめむかふの人に事をかき　宝12智4

小栗　賛。礎説は「河岸見世で向う側のない所」と言っておられるように読めるが、礎稿者ご引用の『吉原十二時』にある通り、「向うの人」は吉原の中で商売をしている人のこと。

　衣かへすると向ふの人をよび　宝10天2

　　―質屋

伊吹　賛。商人が来ない河岸見世に落とされる。

清　同右。

324　あいそうにいつたのだのに平をかへ

高野　「平」は、平椀の略。「平椀」底が浅く平たい椀(『日国』)。

　たいして美味しくない料理を、お世辞のつもりで「ご馳走様。大変美味しかったです」とか言ったのであろう。平椀へおかわりを持ってきたというのである。現代でもよくある光景。

　あいそうにいつたを下女ハ本にする　一一8

山田　賛。似たような話はよくありますよね。

清　賛。

325　長つほねうしをやすめて馬に乗リ

高野　「長局」は、長い一棟の中に多くの局(女房の室)を仕切ってある所。また奥女中が住むところから、その女中の称。禁欲生活を強いられているので、柳句では興味本位の対象として扱われている(『新編川柳大辞典』)。

　俚諺「牛を馬に乗り換える」をふまえて。長局は生理になったら、張形の使用を一時中止するであろうという想像句。

　長局御馬に乗ると牛ハひま　八一7

　長つほね馬を下リると牛に乗り　13宮3

清　賛。

326　来べき宵也さくらから毛虫下リ

高野　『古今和歌集』の衣通姫の歌。「わが背子が来べきよひ也さゝがにの蜘蛛の振舞ひかねてしるしも」の文句取。

　句意は、衣通姫の歌では蜘蛛が下がれば我が背子が来る。一方仲の町の桜から毛虫が下がっているから、主さんが来るであろうというのである。

　わかせこがくべき宵なりしちをうけ　天六和2

清　仲の町の桜に賛。

自選集

小島蘭幸

パスポート君の笑顔になりました
満身創痍のアイツいい顔していたな
赤とんぼドクターヘリに見えてくる
オートバイ柳誌を配るだけにある
愛そして最終章にいるふたり

木本朱夏

陽は西に帰りたくない靴の先
売り言葉買ってしまった不眠症
掴み損ねた虹がしずかに消えてゆく
目差すのはフリルの似合うおばあさま
川向こうがキラキラ光る急がねば

新家完司

秋晴れの夏日にススキ苦笑い
ささやかな楽しみひとつムカゴ採り
ばあちゃんの声が聞こえるムカゴ飯
愛情がない「ゴキブリ」という名前
僕を刻めば廃液と燃えるゴミ

髙瀬霜石

運悪くとなりあわせの下戸上戸
勉強会酒をベンキョウしています
相談に乗ることはない離婚劇
お開きにするかそろそろ電池切れ
生きているうちが華よと花吹雪

津守柳伸

朝顔がいびつに咲いた今朝の冷え
鶴彬偲ぶ同志へ百日紅
路郎師に今年も逢えた塔まつり
うっかりの怪我でも己の歳を知る
七回目ワクチン平和謳歌する

西出楓楽

暑がりの寒がりしょぼく生きている
方向音痴ボケてるのとは違います
ハロウイン何が面白いんやろか
遺伝子のいたずらはなく鳶は鳶
寝て暮らす十三日の金曜日

仁部四郎

年号としての文化があった江戸
文化とは例えば僕の魚釣り
文化とは例えば彼は選挙通
文化とは例えば自由恋愛論
文化とは例えば死刑存続論

平田実男

境界の杭が空気を重くする
再発はしないさせぬを二度三度
円満な家族手綱は母が持ち
年金とお隣さんが命綱
会則をつくりだんだん輪がすさみ

福士慕情

長い夏終わり短い秋になる
虫の音が次第に弱くなる時雨
西空へ飛んで帰らぬ赤トンボ
木枯らしがもう直ぐ雪を連れてくる
ヒマラヤを越えれば鳥も一人前

藤村亜成

嘘にくっつき真実顔を出す
信じないので大嘘ついて笑わせる
鏡の中に仮面を被ったままの顔
善と悪虚実はコインの裏表
存在の意義は人間の創りごと

松本文子

独りぼっちは一人じゃないとお月さま
思いのたけを綴る青い一行詩
ゆっくり歩く　そのうちに逭うだろう
本心が少し零れたマイカップ
ヒメヒマワリ誰かの為に咲いている

三浦強一

平和日本去り難く居る高気圧
記録的付く雨風に馴らされる
髭面の方が似合ったコロナ明け
老夫婦脳活してる口喧嘩
黙祷で始まる会となり久し

村上玄也

大臣待ち一気に整理する組閣
独裁者の側近つぎつぎ姿消す
民主主義守りきれるか星条旗
十八年ぶりとかで大阪元気出る
万博も良いが身近なトラのＶ

森山盛桜

俯いて拾う昨日の売り言葉
本当は蛇の目に降ってみたい雨
年寄りの現実プルタブが引けぬ
合戦の元を正せば柿の種
泡沫になる６Ｂのなぐり書き

山本希久子

余生なり欲もだんだん小さくなり
杖ついて歩く三拍子で歩く
もみじ葉は地に舞いながら別れ告げ
人恋し句会風景まな裏に
米寿の時計生を刻んで死を刻む

居谷真理子

苔むして死者に流れてきた時間
休みましょ　そして再び生きましょう
森が消えた誰に盗まれたんだろう
雨粒はみな持っている虹の素
Gパンの腿のあたりが秋である

川上大輪

核心にふれると雲が湧いてくる
腹減ったからデパ地下へ行ってみる
口笛を吹くとノラ猫寄ってきた
糠床を混ぜると母が甦る
ブレーキは要らん青春ど真ん中

北野哲男

当年とってと十歳若くサバを読む
卒寿越したそがれ色になって来た
遊べるはいい事と知る歳になり
失敗はいつも懐ぬくい時
新聞は訃報欄から読み始め

川柳塔（つづき）

（前月分）大阪市　**榎本舞夢**

骨折から労り合える気持知り
異常気象山火事地震起きている
露・朝の不気味な出会い要注意
阪神の九連勝とは快挙です
私も早く健康欲しいです

（前月分）神戸市　**山﨑武彦**

泥水も真水も飲んだ懐手
ジャスミンの香りほんのり請求書
水の音早や妻の手が荒れている
毎日が修行と思うこの残暑
戦争は懲りたし原発も不安

（前月分）河内長野市　**黒岩靖博**

都会から過疎地に移り鍬を振る
寒暖差ついていけない歳になる
若者は新聞読まずユーチューブ
モヤシだな息子の背中急に伸び
癌告知揺れる心に鞭を打つ

句集の森

『歴程』

山根梟人（やまね きょうじん）

また女を想えば葉蘭がゆれている
蚊帳の藍月の匂いがふりかかる
風は石を温めその風のもてる匂い
梅匂う妻より外に人語なく
枯木立の中で佇む失語症
庭下駄を履き忘れたいことがある
句の書けぬわが胸のうち雪が知る
白梅を愛して貧を恥とせず
年老いて静かに磨く銀の匙
老友が肩に雨滴を乗せて来る
ここで暗転という台本を手渡され
むらさきの山をみつめる青い樹々
わがむくろとも思わるる雲一片
春はまだ遠く日記に雪とだけ
どろ臭い男がまわす風車

（平成4年8月1日発行、島根県川柳協会）

温故知新

田中正坊川柳句文集『ペンシル』から

門限をつくった人が守らない
足の音　父も疲れているらしい
いかなごの釘煮が届き春となる
花明かり金子みすゞを読んでいる
小糠雨いつかひとりとなる二人
還暦は女ざかりよ桐の花
分かり合うことが一番むずかしい
群衆が散った広場に立つ孤独
映画館へ行く一人になりたくて
禁煙をしてから消えた句読点
心から人を愛したことがある
旗守る者が一人はいてもよい
女房に逃げられたならどうしよう
豊かではないが不足はない余生
窓のないくらしを君は知ってるか
紙風船　五つで死んだ姉がいる
童謡に軍歌ナツメロ父のうた

紫煙抄

川上大輪選

尼崎市　八木　幸彦

もう二度と飲むことはないストレート
人生の向きをきっぱり変えた駅
絶妙のトスで夫を立てる妻
煩悩を捨てて生気のない余生
読みかけてすぐ挫折した本の山
思春期の若者らしい乱反射

船橋市　中嶋　常葉

とめどなく誘いをかけてくる吐息
恋のかけ引き縺れる匙加減
君を逃がさない恋文の書き方
透明な地図を抱えて立ち上がる
不夜城を迷走しだす黒蜥蜴
楷書から草書へ恋の中だるみ

佐賀県　真島　久美子

海を見てきたかのような喋り方
淋しくて冬の境界線を踏む
最高の満月最低な私
まち針を持って戦に加担する
鳩尾を999が通過する
レタスへと鎮める親指の微罪

和歌山市　まつもと　もとこ

年輪を重ねて太くなる心
0点のテストの裏へあっかんべー
母老いて心配のタネ発芽する
すぐ恋におちるアタシの甘い癖
欲情を抑え淑女になる野菊
愛と罪つりあっている天秤座

東大阪市　青木　隆一

上弦の月を瞳の中に入れ
月で洗い流す今日の嘘ひとつ
月に誘われて迷い道に入る
すこしだけ欠けて朧が身に合うか
月笑うあかり肴に二合酒
月はあやかし目を閉じて受け入れる

米子市　川本　美津子

芋煮会近所の人と和む夜
金婚もすぎて呼び名がおいになる
他人には何時もやさしいお父さん
起きた時今日も元気と言っている
たまる物ごみとストレスふたつだけ
スマホには脳の回転追いつかず

山口市　中前　幸子

蜘蛛の巣がきらきら夕焼けの童話
傾いた虚構の家が捨てられぬ
煩悩抱いて枯れ野をまだ走る
凪の序章へ秘かな想い寄せている
大物らしい顔パスで通過する
手をつなぎ心も繋ぐかごめの輪

加古川市　石賀　邦子

葬送は六甲颪頼みます
神父様私は無神論者です
私でない私を生きてきた私
囁きが一言多い金魚草
噛み合わぬ気持抱えてやじろべえ
割り算の余りを拾うような恋

高砂市　裕木　るい

裏切られ大人になれたかすみ草
少しずつ傷付けあってご破算に
褒められて遠く遠くと跳ぶ綿毛

尼崎市　板谷　賢二

多数決ばかりじゃお湯は沸きません
ポジティブも過ぎるとひとり空回り
面白い人は二次会までにして
地球儀が縦回りする温暖化
信じてる糸一本の凧の旅
半額の声にお客は回れ右

大阪府　浦上　恵子

雨が降る花のあえぎが止まるとき
日記には書けない人が一人居る
うまいでもまずいでもない人にされ
ガタピシと身体傾く後期入り
どこまでが本音か判断を迷う
私の気付かぬ短所子に突かれ

大阪市　吉積　栄次

集まれば十人十色まとまらぬ
ぼんやりと外を眺めて午後一人
幾つまでペダル漕げるか眼よ足よ
人の世は操り糸にされるまま
幸せは無色無臭で無言です
質問に答えが出ない便秘薬
お願いと言われて嫌な予感する
結婚をアシストしたがノーゴール
終活はそっと一人で球拾い

富士見市　中島通則

行政が司法動かず基地の海
お喋りは得意お話は不得意
ペットショップで目が合ったのが運の尽き
決着をはっきり付けるリトマス紙
通販の同じ服着た人に会う

東京都　宮田栄子

デパ地下で古里銘菓食べて秋
猛暑から一気に厚着秋はどこ
四年ぶり同窓会も高齢化
新米は秋のご褒美食進む
リタイヤ後リュックをいつも背負っている

生駒市　永田芙美子

大根が主役のおでん母譲り
秋の風勇気もらって草笔り
誕生日あれよあれよと八十路越え
子育てに悲鳴聞こえる物価高
欲望の電車を降りて足るを知り

奈良県　室田行久

ぶちギレた妻に術ない機嫌取り
妻病気苦労が分かる物価高
母を見て勝気な迷子泣き崩れ
分けるから分かる科学の第一歩
ごっつあんてっさ一皿二口で

和歌山市　倉橋悦子

この痛み温めようか冷やそうか
町医者が消えて戸惑う蟻の群れ
来た道の水先案内人は母
曼珠沙華萩がこぼれて冬仕度
はるばると観光ですか寒気団

和歌山市　定松宏枝

出しゃばらず齢八十マイペース
お笑いで固い頭を揉み解す
帽子より姉さん被り似合う母
占いの幸運の日に蹴躓く
吉日を待ってクジ買う運試し

和歌山県　三枝眞智子

早々とおせちのちらしここかしこ
この世にはナンバーワンが多過ぎる
毎日がテレビづけでも気は確か
迷走を好む台風許せない
毎朝の一声花を会話する

京田辺市　加山勝久

国債を多重刷りして軍費増
打つ手なく南海トラフ祈るだけ
辺野古基地湯水のごとく税で埋め
寄り添うて毎年減らす交付金
ばら撒きと予備費が増える選挙前

大阪市　尾﨑文子

電池切れ時計止まれどほっとする
お布団でねられるだけで幸せだ
ゆっくりと竿売る声に聞きほれる
並べてるだけ落ち着く文学書
窓あるが隣のカベが見えるだけ

大阪市　阪本秀子

会計の端数をになう小銭入れ
レントゲンぽちっと撮る恋の傷
秋の風そっと労わる脳回路
靴底が弾んで今日がはずみだす
摂取量そぎ落としてる万歩計

大阪市　原幸子

老いた脳少し実らせ秋ですよ
空っぽの心が風にさらわれる
傷心の闇ゆすぶられ木魚打つ
いいじゃない只お茶すするだけの恋
故郷の風に和んで伸びる爪

大阪市　森廣子

祭り明け朝の広場に鳩が二羽
騙されて笑ってばかりお人好し
遊女も香具師も「蟹工船」の出る港
諦めて今際の際に吐く悪事
トカゲ一匹干乾びていた夏でした

大阪市　森田遊子

何度でも時を戻せる砂時計
カラフルな糸で傷口閉じておく
哀しみは抱き締め喜びは浸る
もの足らぬいつも笑っている遺影
軽やかにステップ踏んでいるつもり

泉大津市　助川和美

愛こめてレンジでチンの若夫婦
パソコンをポツポツ押して楽しむ日
ママ友は仲良しのふり別の顔
七輪にこだわるサンマ焼きかげん
しがみつくおもちゃ売り場の子に負ける

柏原市　神崎江

ダイエット再び誓う試着室
丘の上両手いっぱい街を抱く
ひと言が多くひと言諭される
うっかりを言い訳にする人がいる
最後まで言わせてくれぬ悪い癖

交野市　山野双葉

ただの風邪と言われ安心して寝込む
あるあると言われて晴れる老いの鬱
川の字の真ん中にいる抱き枕
あやとりは今も苦手なままでいる
稲穂揺れワルツ舞う舞う赤とんぼ

河内長野市　穂口正子

婆さんもたまのお出掛け紅も引く
化粧しても効果今一もう止めよ
母である事が私の弱いとこ
ゆるかったラジオ体操息上がる
ひょっとして良縁だった五十年

吹田市　西沢司郎

あの世でも君とは相互保証人
敵失を喜ぶうちはまだ子供
人生のゴールが見えてくる気配
早起きでたまに損することもある
そのうちに腫れが痛みに変わりそう

高槻市　三谷白黒

句が見えず友の体を心配し
相続で他人と思え兄弟は
敬老は生きてるだけで祝われる
スマホです時計とカメラ財布まで
やってみて時計とテレビ無い日々を

豊中市　貝塚正子

裁縫箱見るたび亡姉の手をしのぶ
お使いに御苦労様と飴三つ
頭より脚から先にきた老化
若者よ七十代の今動け
螺旋階段頭も足も疲れ果て

豊中市　齋藤奈津子

初対面失敗談で近くなる
高くても旬を食べたい高齢者
猛暑去り庭に雑草置きみやげ
大失敗笑うしかない照れ隠し
名月につい手を合わせ願いごと

大阪府　奥野健一郎

負けたなと思うあなたの褒め上手
段取りはいいが体がついてこぬ
二三粒味わってからブドウ狩り
気持だけちょうだいすると距離をとり
瓢々と敵も味方もなく歩む

神戸市　青木公輔

気配りはここまでその先迷惑だ
食卓に並んだ秋をひと掴み
人妻を恋う道順を間違えず
塩の甘さにすっかり酔うた夢を見る
衣替えしたのに誰も気付かない

神戸市　米田利恵子

紅葉も選り好みする着地点
ベテランが失敗談をしてくれる
見くびってた男が先に着いていた
責任が無いから楽にアドバイス
きっと嘘だ黙って聞いてあげましょう

神戸市　みぎわ　はな

バッカスの神に愛され卒寿なお
太陽を浴びて咲きたい水中花
生き切ったカラフルに塗った人生史
もう少し可愛い色で咲きたかった
誰褒めてくれずも自分褒めてやる

神戸市　村松久江

磨りガラス越しに記憶が通り過ぎ
老眼が許容範囲を狭くする
説明を聞けば聞くほど難解に
悲しみが消え去るように手を繋ぐ
大丈夫まだ真っ直ぐに立てるから

尼崎市　植野恒子

転んだらあかんあかんと足の裏
膝こぞう抱いて痛みが眠るまで
旅で会う人も景色も土地の色
影つれて帰る一人のくつの音
洗っても落ちぬ茶の渋我の染み

尼崎市　見山夢子

守ります言った言葉に嘘がある
生き方も守りに入り五十年
暑い中立っているのがやっとです
路地うらに子供の夢を置いてきた
缶コーヒタバコ一本彼の朝

尼崎市　山本百合

終戦の鶴の一声待っている
話の種三つ仕込んで友に会う
一泊の旅に準備の三日前
子の手品知らぬふりする種明かし
ばあちゃんと呼ばれていても母を恋う

小野市　田中辰夫

薬にも毒にもならず日日平和
点滅で白杖急かす青信号
種まきを迷う残暑と熱帯夜
弾んでた昔の足は神経痛
十時にも三時にも鳴く腹の虫

小野市　藤原泰宏

串カツを食べて寄席見て良い旅行
職業によって規律の甘辛さ
考え中頭の中は忙しい
コオロギが秋の夜更けを醸し出す
ぼんやりとしている時に句が浮かぶ

三田市　辻　開子

彼岸花情熱負けず燃やす赤
眠れないベッドにちょこん夜明け待つ
平凡にくれた一日感謝する
三食と昼寝そろそろ卒業か
陽のあたる特等席にお犬様

三田市　森　玲子

庭の草木老いて今では手入れも苦
もしかしてこれ詐欺かもと出ぬ電話
日に日にとオウム返しの孫二歳
グレーヘアー毛染めさよなら紅をさす
満月に無視も負けずと応援歌

三木市　山口　ヨシヱ

自由なんてほんとは見栄を張っている
三食をおいしく食べる骨密度
ときどきは無常の風が沁みてくる
雪月花やさしい風に身を委ね
えんぴつの芯尖らせて前を向く

丹波篠山市　内山　俊朗

探りかも間違い電話ご用心
自分探し老いて遭遇無二の趣味
肩肘張らずのんびりと適当に
詫びてます愚痴をこぼさぬ奥様に
気楽なの深い人より浅い人

丹波篠山市　河南　すみえ

雑草は無尽蔵によく育つ
百均であれこれ楽し夢描く
名も知らぬローカル線の旅が好き
知らん間に我を見ている月仰ぐ
案山子がねジーパンはいてよく似あう

西宮市　髙橋　千賀子

パイン飴並んで買ったおじいちゃん
あの世へは焦らずいまを謳歌する
年金も猫のおやつでほぼ消える
秋風が吹いてもマスク手放せぬ
秋風が帳消しにするあの猛暑

津山市　髙橋　由紀女

在りし日のサロン楽しむ亡父を見る
雨風に屈せぬ花の咲き誇る
必要の一人二人のバスを待つ
肩の荷が降りて聞き入る深夜便
一日に一度畑見て安堵する

美作市　岡本　余光

身の丈に愛を上乗せして生きる
生き下手を嘆いておれぬ朝は来る
諦めのよさ投げやりと誤解され
もの思いしなけりゃならぬ秋夜長
分相応の目線を少しだけ上げる

広島市　田桑　恵子

コーヒーの香りに本音混ぜてある
スマホから世界の扉みな開く
バイク音ふと目が覚める夜明け前
冷凍庫まずチェックする夕仕度
つい本音包んでくれる友がいる

広島市　森田博之

彼方よりは周辺照らす灯に安堵
反りが合わぬ仏になっても喧嘩する
天国は無理と階段座り込む
負け犬になって世間が読めて来る
来世にも仏同士の業がある

尾道市　村上和子

野の花のようにのびのび娘が育つ
戦を嘆きひまわり立ち枯れる
食卓へ一輪の薔薇老いふたり
秋空へ庶民の顔で蕎麦の花
この鉄路ゆけば古里彼岸花

竹原市　土井輝恵

順調です薬続けて飲みなさい
用心のため賽銭箱は置きません
第二次世界大戦の臭いする
コロナ禍よ風景までが様変り
ＡＩに心埋めたらどうなるか

福山市　新庄芳春

天高し新井カープに天晴れを
らんまんが終わり高知へ秋の旅
言い訳の途中で秋が過ぎていく
マンネリの行事も楽し秋祭り
宿命と思えば楽に生きられる

府中市　岸田武

円満とあなたに何がわかります
感じのいいおばさん神を売りに来た
取り直しあとの勝負は逃げて勝つ
敗北の美学きちんと礼をする
弁解の舌がなんとか切り抜けた

鳥取市　狭武紫陽

あんな日もそんな日もありこんな顔
現実を知れば鏡に嘘はない
おもしろい話もないししぼむ毬
好奇心探しにどこへ行こうかな
焦げ付きをこそげるように髪を切る

倉吉市　田中けいこ

礼儀なら知っているでも失礼も
わたくしの頭の中は秘密です
二人暮らし寝すぎの人と寝不足と
やんわりと注意されるとこたえるネ
ゴミ捨てた　もしもし落としものですよ

倉吉市　若松由紀子

街路樹の落ち葉コロコロ車道行く
安宿の壁の薄さに落ちつかぬ
うれしいな二本の足でまだ歩く
決心の三日続かぬダイエット
老い独りその日その日を生きている

鳥取県　田中重忠

常夏の国では出来ぬ雪ダルマ
腹を決め失明の妻みた五年
離農してもまだまだ光る鍬がある
老いました夢も希望も消えました
おかげ様九十七も生きてきた

鳥取県　橋谷静江

コマーシャル見れば財布を確かめる
秋の夜は月を眺めるゆとり持つ
永い道米寿の今を返り見る
年重ね手鏡見るも怖くなる
雨の日は電話のベルが鳴りつづく

松江市　椿　豊仙

人それぞれ大河ドラマを持つ昭和
夢にまで消したい過去が追ってくる
失敗も笑顔で語り挫けない
ここ一番相手の出方待つ余裕
澄みきった空気が残る過疎の村

松江市　中筋弘充

先生をやめたら平気誤字脱字
万歳までは覚えていいます二日酔い
クラス会診察券で盛り上がる
あげ底の刺身パックに努力賞
課長には勝たぬゴルフで課長補佐

松山市　郷田みや

満月の夜はさらりとした梅酒
お御輿の後をちょこちょこする法被
広場っていいな見上げる時計台
隅っこが落ち着くのです秋の風
諦めが早いのですね斜め読み

宮崎県　恵利菊江

ゴミ出しに猫の護衛がついてくる
彼岸花　季を忘れずに咲き揃う
シャッター街を野良猫が大手振る
陽の当たるベンチお喋りやまらない
ロボットが派遣切りする町工場

豊見城市　あら　さくら

遅咲きに咲いてる花が美しい
ほめ上手言葉たくみに使い分け
秋雨がポツリポツリと語り出す
追いつかぬ物価高にはため息が
意外にもチーズといちご口に合う

唐津市　前田廣幸

夕立に打ち水貰い深呼吸
往往に厭な予感が的中す
猪が地主に残すおもいやり
支払日のように早々誕生日
同窓会「あるある」ばかりで時が過ぎ

弘前市　小山内　真由美

砂時計ナナメだったら落ちつかず
幸せのおすそわけなど頂いて
ゆっくりと年をとりたくなりました
変わらない朝見慣れた景色好きな曲

横浜市　巖田　かず枝

好物のさんま苦手な人と居る
行く先を早く決めてと着物達
モンタンも短い秋に戸惑って
戦争や地震に津波忙しい

伊勢原市　小田　幸子

介護させ親は最後の子育てを
星一つまばたきもせず光りさす
持ってる色全部使った子供の絵
運動会ダンスステップ千鳥足

小田原市　虎澤　昭久

早朝に町を出てゆく清い月
老いて尚せっせせっせと爪が伸び
腐らずに枯れてみせるか老いの先
相槌を打ってるだけの聞き上手

東京都　尾畑　なを江

歳かしら食べているのに太らない
今からは笑顔で過ごす事に決め
辛くてもこの世に生きる喜びを
人生はガラガラポンよそんなとこ

東京都　髙岡　弥生

アドレスに来るのは全て迷惑メール
値上げしてふるさと納税どうしよう
人だらけ健康診断渋滞中
アナログの生活身体鍛えてる

名古屋市　冨田　末男

ローカルの番組里の母想う
平和でない国を知らない食べ残し
円満になれる理由にある絆
向き変えた風が明暗持っている

豊橋市　小松　くみ子

壁伝う蟻の行列お断り
裏の家更地になって変わる風
あんなにもいたカマキリの子よどこ行った
みず色に咲くツユクサもご褒美か

生駒市　饗庭　風鈴

エンピツを倒し歩いてきた迷路
一本の杖だけ頼り森を行く
中東の砂漠の悪夢まといつく
どこへ行く流浪の民に寄り添って

和歌山市　北原　昭枝

決断が出来ず見上げた秋の空
男と女すれ違っては生きている
見詰めてる振り子昭和を懐かしむ
聴きあきた話に耳をふさいでる

和歌山市　佐藤　まき

人道的扱い出来ぬこの国家
大変な犠牲があってこの平和
大切にしたい平和の有り難さ
家籠り退屈しないテレビ旅

和歌山市　西川　千鶴

大人にはなれぬ大人が多過ぎる
卒業は首席でしたが無職です
形見分け猫もチョコンと末席に
終電車土産の寿司も船を漕ぐ

海南市　山中　閑

相性よく今朝も布巾は蚊帳の生地
気散じにぶらりしゃらりと花野まで
待ちこがれやっと拾った栗小振り
重陽に祖母とあそんだ菊あまた

京都市　黒澤　良一

彼岸花あぜ道赤く埋めつくす
米寿３本足ヒヤリウハットで今朝も無事
句づくりを邪魔する齢と語彙不足
赤い実と糸瓜の黄花猛暑を惜しむ

大阪市　池野　惠美子

免許証六十年で返納す
老いて今料理番組スルーする
秋風を待っていたよに食事会
春は花秋は落葉に泣かされる

大阪市　久木野　孝治

医者嫌い我慢の末の救急車
悪いのはあなたじゃないと悲しい目
葬儀場だけが賑わう過疎の村
目標を思い出せない十二月

大阪市　白谷　よしみ

転ぶ転ぶと分かってた嗚呼無情
わたし乗せそこ退け退けと救急車
名を呼ばれああ生きている風が吹く
病棟に歓声する午前二時

大阪市　中村　峰子

わが未来今日と明日とでいっぱいだ
立ち止まる何か忘れているようで
みえはらずケチに徹して嫌われる
夢にみたほんとに秋がやってきた

大阪市　前川　善之

秋祭り各地の囃子鳴りやまぬ
プロゴルフ恐怖のバーディー息を呑む
ソーメンからうどんに変わる秋の味
北の幸サンマの姿何処へやら

大阪市　松田　聰

行き過ぎた円安止められぬ政治
もういくつ寝たらと歌う子もいない
真夏からおせちのセール気ぜわしい
血圧の上下少々気にしない

池田市　倉本一弥

ああ言えばこういう妻に吾黙す
髭剃ると身体スイッチオンになる
身嗜み老いてはひとつ清潔に
転居するスーパー近いマンションへ

泉大津市　葛城隆雄

季節感もぎ取る地球温暖化
行く宛も無いまま今日もテレビ番
温暖化四季の風情もままならず
勝負服気だけ高ぶり空振りに

吹田市　岩口のぞみ

扇風機しまうその日にこたつ出す
朝の空気布団に潜る気持ちよさ
スポーツの秋チャンネルめぐるバトルあり
朝誓う今日は絶対休肝日

摂津市　荻布律子

鏡文字自分のことが判らない
ブラインド心の角度変えてみる
秋バテに自律神経フル稼動
したい事している事と違う日々

摂津市　野々村レイ子

年金で行ける範囲の旅をする
道筋を立てた子育て軋み出す
負け犬になりたく無いと爪をとぐ
一日をウッカリ過ごし出る欠伸

寝屋川市　坂本ミヨノ

満月拝む百歳人生楽も苦も
蕎麦屋湯げ百歳までに幾ら食べ
新米香るにぎり梅干顔出した
香るコーヒ青空眺め杖もつき

羽曳野市　黒木ひとみ

若者の活力欲しい老いの国
畦道を十字に染める曼珠沙華
三婆が元気揃い田舎旅
三歳のお向かいの娘とお友達

阪南市　藤岡笑三

待つ間行き交う人の品定め
青春譜君吾ともに舞った日々
通学路潮騒聞いてペダル踏む
総出にて迎春準備杵振るう

藤井寺市　松井正義

秋が来たさあ忙しい山歩き
冬ま近インフルエンザ踊り出す
暑い夏去って秋ですアウトドア
だんじりのお囃し秋を曳いてくる

松原市　吉野一心

酔って寝る父に涙の跡がある
答出たカード占いまたしてる
相談せえよ　しつこいあんた悩みやわ
一期一会会わなきゃよかた人もいる

テレビ観る広告ばかり新聞も
玄関で待ち合わせして蚊にさされ
あめ玉がコロナマスクで良く売れる
業者間食欲の秋死語にする

八尾市　田邊浩三

秋蝶があわだち草とコラボして
紅葉マーク三年間のお墨付き
うん美味いテレビの料理それればかり
温いとこ陣取り寛ぐ枯蟷螂

大阪府　髙木道子

日本が魅せてくれますアジア戦
パリ予選バレーボールに魅せられて
勝ちました涙涙のインタビュー
忘れごと折り合いつけて生きてゆく

神戸市　石川克美

湿布薬貼って出かけるクラス会
尾を振って犬も挨拶する散歩
検診日血管探す注射針
点滅をじっと待ってる老いの杖

神戸市　酒井宏

心から苦いと知った君のウソ
真夜中にコンビニのドア開けにゆく
いつまでもふくらまぬ夢胸底に
見上げればネオンと月とむらくもと

神戸市　田本古鈴

赤い羽根僕の甲斐性五〇〇円
将来の納税者運ぶ園児バス
薄くなりわからんようになる縁者
会えなくて喪中葉書で終わる人

神戸市　濱口祐一

脳トレにペンを走らすひる下り
しんじつをあかせば愛がとおざかる
言いわけを弁でごまかすエゴイスト
長命も国のたからとなる未来

神戸市　山根弘華

夢追うた日々も懐かし衣裳箱
終活もきっちりしたいシュレッダー
少子化に太鼓の音も鳴らぬ里
卒寿の母静座始まる神ほとけ

三田市　生田えい子

あの二人お安くないとピンと来た
ＪＩＳマークラベルが誇る日本製
コンビニでトイレを借りてガム二つ
独り暮し地域の愛に感謝のみ

三田市　幸田厚子

歳月が碑に刻んだ名風化さす
妻と行くまっすぐな道まだ続く
タイムマシン未来の僕に会いたいな
笛吹けど踊らぬあなた何様で

三田市　野口龍

高砂市　松尾柳右子

懐かしい香りで鍋が煮え詰まる
歯科眼科米寿の旅は万全に
リフォームが出来て同居の笑い声
節料理満載せわしないテレビ

丹波篠山市　澤　良子

定年後野良着が私のユニホーム
蒔くよりもこぼした種の花立派
食べるあてないけど植える冬野菜
知りもせず知ったかぶりのホラ吹き屋

西宮市　高瀬照枝

転ばずにね　むすめ必ず言い残す
旬の物食べて百歳たどり着く
雨降れば老いた体の足止める
化粧品むすめ買う人塗るわたし

広島市　松尾信彦

不器用をかばってばかり玉の汗
にぎやかに急かせる母の聞き上手
忖度と見栄が中身のアンケート
メリハリをアップデートに頼る老い

三次市　伊藤寿子

アッケラカンの奥さま手先も器用なり
入院中ときいてたけれどコロナでね
わたしが先と思ってたのに空を見る
わたくしに妬かれた時もあったとか

鳥取市　上山一平

目や舌の肥えて嬉しい秋が来た
舌が肥え手打ちの蕎麦も物足りぬ
大国の核廃絶も舌足らず
舌の根も乾かぬうちに冬支度

鳥取市　大前安子

一手間を加えた料理家族待つ
日日の座を譲らぬ猫が尾を振るよ
音読の口へほどよい茶を入れる
聞く児の目胸の中へと入り込む

倉吉市　宮田風露

やっと秋汗腺閉じて来たような
秋らしくなって一息つけました
夕焼けこやけ隣の坊と手を繋ぐ
大落暉カラスが飲み込まれそうな

鳥取県　佐々木静恵

つい一言申したくなる老婆心
世の乱れ老いて達磨の目で生きる
老いた足知って吸うのか蚊の覚悟
秋冷えで始まりました関節痛

松江市　山根邦代

なつかしの友の電話に涙ぐむ
残り物あれこれ寄せて一品に
誕生日忘れずに電話くれる友
米寿ごえ薬きらいで元気なり

大洲市　花岡順子

出来ぬこと増えたな老いを受け入れる
困ったらまず頼んどく鎮守様
かゆいとこまでは届かぬ福祉の手
何でやろ田舎のバスがまた消える

那覇市　禱　モモト

親は子の可能をうまくのばしたい
小遣いは計算出来ぬ独り占め
貯えは出来ぬ年金節約を
ラグビーのルール知らねど観戦を

那覇市　宮　すみれ

ほめられて血流さらり若がえる
この暑さ出かける勇気ありません
久々のビール持参の花火会
ゆらゆらと心の底の熱帯魚

唐津市　坂本良二

母が逝き自由になった寂しさよ
また値上げ細る年金物申す
お互いを競い高めて辿る道
甦る夕焼け雲の帰り道

（前月分）鳥取県　橋谷静江

生かされた運へ私の長い道
意識せず腰に手をやるくせがつき
ここからは余命だいじに楽しもう
秋場所の相撲テレビにかじりつき

（前月分）吹田市　岩口のぞみ

好きな店よくつぶれずにがんばった
客足もコロナ前には届かない
誕生日わたしがあなたを産んだ年
悩まない食べたいものをつくってる

（前月分）大阪市　森　廣子

そっと風優しく笑う彬の碑
ぼんやりと辿る青春ほろ苦い
ぼろぼろに母を壊した認知症
崩れる美学あわ雪のかき氷
昔の釦十七歳が甦る

（前月分）尼崎市　見山由美子

妻という名前に惚れた私です
寝て食べて元気の元は自然体
おーいお茶初めて夫入れたお茶
火の用心あなたの心燃やします
薬指こっそりワイン忍ばせて

（前月分）京都市　黒澤良一

京アニ裁家路は遠く人影もなし
最高裁沖縄の民意より基地重視
蝉しぐれこの静寂に惹き込まれ
米寿意地35度と我慢比べやせ我慢

156

大谷翔平を讃える

大谷翔平は岩手県水沢市（現・奥州市）出身で今年29歳。詳しい経歴などはウキペディア等に載っていてスマホでも確認できますので省略します。ここでは、投手と打者の二刀流による素晴らしい活躍ぶりから受けた感動や、同じ日本人としての誇らしい気持ちを詠った句を採り上げてみます。

大谷の試合に合わせ起きる朝　岩口のぞみ
朝一に大谷さんに会うテレビ　堀　正和
ショウヘイの平和な景色見るテレビ　助川　和美
大谷が打てば夫婦は仲直り　山口　不動
辛うじて翔平さんで気が晴れる　前田　洋子
後光差す大谷くんの笑顔から　石田　孝純
翔平の案山子にびる群雀　津村志華子

大リーグの試合をリアルタイムで観る習慣などなかったのですが、大谷翔平が活躍をするようになってから、実況中継に合わせて早起きをして楽しみが増えました。そして、我が子のように思える翔平の鮮やかな動きを観ているうちに喧嘩も雲散霧消。苦労など欠片も見せないその朗らかな笑顔を見るだけで気持ちも晴れやかになります。恐いもの知らずの群雀たちも翔平の案山子にはビックリでしょう。

大谷のホームランには疲れとぶ　齋藤さくら
大谷に負けじと飛ばせ甲子園　谷　英也
イッツショータイムこの英語だけ聞き取れる　松田蟻日路

投げて打つ走りも凄いショータイム　山田　雅子
投打走一喜一憂ショータイム　山下　凱柳
投手大谷打者大谷に救われる　中村　伸子
ショータイム沈む列島盛り上げる　丸山　孔平

大谷のホームランは弾丸ライナーのようなものあり、巨大な円弧の滞空時間の長いものありでビックリさせられます。大谷がホームランを放ったとき、アナウンサーの「イッツショータイム！」の「ショー」は翔平の「翔」。その程度までは理解できますが、他の実況はさっぱり分かりません。投打の二刀流で出場しているとき、自らの失投での失点を自らのバットで取り返すことができるのも凄いところ。

サムライの兜世界に知れ渡る　坂本　加代
ぐうたらを奮起に変えた二刀流　輿水　弘
投げて打つどこの星から来ましたか　小林　祥司
ベーブルースを超えた翔平驕りなし　近藤　正
オオタニさんの汗を知らないテレビ席　柿花　和夫
僕も買いたい翔平のユニホーム　隠岐耕四郎
帰省して大谷の家探しあて　菊地　政勝

エンゼルスは今年からホームランを打った選手に兜を被せていますが、やはり一番似合うのは大和男子の大谷翔平！

二刀流の元祖はあの伝説的なベーブルースですが、今季ホームラン王となった翔平は彼自身が伝説の英雄になりつつあります。超人的な活躍に茶の間は大喜びですが、それは人知れぬ地道な努力の賜物です。その「汗」を見せないのも翔平の謙虚さでしょう。米大リーグで今季のレプリカユニホームの売り上げ一位は翔平。実力も人気もナンバーワンです。

愛染帖

新家 完司 選
（投句245名）

疲れたらイルカの声を聴きに行く　福山市 新庄 芳春

（評）疲れを癒やす方法もいろいろ。水族館や海中ウォッチング等でイルカの「キューキュー」という優しい声を聴くのもベスト。

減便のバスに足腰鍛えねば　羽曳野市 徳山みつこ

（評）いずこの企業も人員不足などで合理化。バスまで減便とは残念至極。かくなる上は足腰を鍛えて「テクテク・テクシー」だ！

計算の苦手な妻が貯めている　奈良市 米田 恭昌

（評）数学的な計算は苦手だが、老後を考えた貯蓄はしっかり。「生活力」は算数や国語などではなく本能的な勘で学び取るのだろう。

清貧を誇る夫に苦労する　大阪市 森田 遊子

（評）清貧とは「行いが正しく、私利私欲を考えないために貧しいこと」。立派とは思うが、台所を預かる妻は遣り繰りで大変である。

鈍感力これがけっこう役に立つ　川西市 大坪 一徳

（評）何事に対しても敏感にピリピリ受け止めていると心身共に疲れてしまう。鈍感力は立ち直りを早めストレスを緩和してくれる。

のんびりと歩けないのは親譲り　東京都 川本真理子

（評）鷹揚でありたいと思うのだが、気がつけばセカセカ歩いている。不本意ではあるが、ご先祖から受け継いだDNAでは仕方なし。

地下鉄は今はメトロと言うんだよ　川西市 山口 不動

（評）気がつけば、いつの間にか「東京メトロ」とか「大阪メトロ」になっている。だが高齢者は馴染んだ「地下鉄」が言いやすい。

息が合いイナバウアーをするバナナ　岡山県 藤澤 照代

（評）平成十八年度の流行語大賞にもなった荒川静香の大技イナバウアー。よくよく見ればバナナが揃ってやっているではないか。

今の世に古稀は九十または百　豊中市 水野 黒兎

（評）古稀とは「人生七十古来稀なり」から七十歳を指す。だが、今や七十歳など珍しくもなく、九十歳でも古来稀ではなくなった。

これからは弱音吐くのも生きる術　三田市 北野 哲男

（評）現役のときには「負けてたまるか！」と、強気で突っ走ってきたが、弱ってきた体力に合わせて素直に折れるのも人間的でいい。

亡き人の顔をしている曼殊沙華　富田林市 中村 惠

曼殊沙華彼岸の入りを知っている　安来市 原 徳利

生と死は隣り合わせよ曼殊沙華　鳥取県 門村 幸子

余生なお燃えよ燃やせと曼殊沙華　福井市 伊藤 良一

もう少し咲いてて欲しい彼岸花　大阪市 森 廣子

やっと来たとっくに来てたはずの秋　尼崎市 板谷 賢二

素足からハイソックスへ秋は急　池田市 大田 省三

出番待つ秋とび越した衣更え　大阪府 米澤 俶子

文庫本に紅茶をつけて秋の風　八幡市 武田 悦寛

秋色の山海食に舌鼓　西宮市 福田 正彦

はとバスで会話も弾むコロナ明け　東京都 宮田 栄子

共生といえどコロナよ敵は敵　唐津市 前田 廣幸

マスク外せばやっぱり歳は歳でした　堺 市 今井万紗子

見慣れた字届き心が凪いでゆく
海南市　小谷　小雪

伸びしろはあるよ傘寿の五七五
米子市　妹能令位子

川柳の発芽率一割程度
丹波篠山市　内山　俊朗

気休めに始めた趣味が蟻地獄
奈良県　室田　行久

全没にしっかりしろと影を蹴る
池田市　倉本　一弥

糖尿病それでも汗は塩辛い
幸せな人と会話が弾まない
高砂市　裕木　るい

五欲とや今は食欲だけ残る
褒められて僕は成長するタイプ
藤井寺市　鈴木いさお

今朝もまた何を探しているのだろ
寂しさを武器に八十路の恋始め
大阪市　原　幸子

付き合いは広いがみんな高齢者
足腰の代わりに口がよく動く
米子市　竹村紀の治

よそ行きの名前もひとつ持っている
忖度はやめて一本道を行く
黒石市　北山まみどり

連帯責任しっかりホタテ食べましょう
タダだからワクチン打った七回目
堺　市　内藤　憲彦

膨らんでいる鼻カラオケに行くらしい
大阪市　石田　孝純

ライバルも同じ所にシミがある
鳥取市　前田　楓花

自転車に乗らないことが努力義務
宝塚市　岸田　万彩

喜べば喜び事がやって来る
東京都　尾畑なを江

川の字になって寝た子が二児の母
境港市　藤原　久直

父の家リフォームしても掘り炬燵
日に三度笑えるように暮らしてる
尼崎市　宗　和夫

絶対の約束できぬ歳になる
百歳までいきられそうなちょい太り
貝塚市　吉道あかね

明け六つの水暮れ六つの酒　守り神
悪友といっしょに叩く皿小鉢
弘前市　髙瀬　霜石

孫娘笠置シズ子を口ずさむ
北風の口笛を待つ冬コート
大阪府　宇都満知子

一日に一度は二階上り降り
人が見ていると思えば背は伸びる
倉吉市　大羽　雄大

内科医の眼鏡の奥を覗き込む
出掛ける妻鞄を閉めてまた開けて
府中市　岸田　武

フレイルを学ぶ　小太りでいいんや
河内長野市　木見谷孝代

お芋さん太ることなどもういいの
三田市　上田ひとみ

一通り食べる試食の海老せんべい
大阪市　髙杉　力

空っぽの頭だけれど愛はある
大阪市　平井美智子

贅沢は敵と知りつつ店屋物
横浜市　菊地　政勝

言語化のできない恋を抱いている
佐賀県　真島久美子

悪いのは俺かと周り見てしまう
松江市　石橋　芳山

家族です納骨堂へ愛犬を
那覇市　禱　モモト

点景として放棄地に立つ案山子
今治市　永井　松柏

咳き込まないために飴玉持ち歩く
松山市　柳田かおる

まっすぐな道をヨタヨタ歩いている
倉吉市　牧野　芳光

座り込む姉を立たせるのは至難
大阪市　古今堂蕉子

いらちには合わぬテレビのワイドショー
神戸市　奥澤洋次郎

自信作　春巻き酢豚ハンバーグ
横浜市　川島　良子

まあいいやもうよかろうは老いの敵　河内長野市　村上　直樹
後期高齢開き直って金髪に　和歌山市　上田　紀子
別嬪をチラ見しに行く御堂筋　丹波篠山市　酒井　健二
生涯現役　老害とも言われ　札幌市　三浦　強一
少しずつ自分を壊す加齢病　京都市　藤井　文代
時々はボケているかと妻に訊く　小野市　藤原　泰宏
私のやがてにはない認知症　鳥取市　岸本　宏章
腰痛に蹲踞の姿勢上手くなる　神戸市　城戸　誓子
膝も腰も曲げて年寄りらしく立つ　高槻市　片山かずお
石橋をゆっくり渡り早や卒寿　神戸市　山根　弘華
まだまだと閻魔を追い返す百寿　尾道市　村上　和子
百歳時代八十路まだまだ林住期　奈良市　安福　和夫
百までも生きてどうする何をする　香南市　桑名　孝雄
延命はいらぬ散骨バルーン葬　西宮市　福島　弘子

台風に屋根シーサーが守りぬく　那覇市　宮　すみれ
台風に向けて舵きる赤トンボ　大阪市　島田　明美
一年が短い大人になってから　浜松市　中田　尚
高級な老人ホームなら入る　枚方市　栃尾　奏子
渡らせて頂く気分錦帯橋　美作市　岡本　余光
癒やされて昭和と同じ夕陽みる　香芝市　大内　朝子
今日は晴れＡＩよりも当たる下駄　枚方市　藤田　武人
口だけはゼンマイ巻けば使えそう　鳥取市　田賀八千代
闇の中白さ浮き立つ月桃花　豊見城市　あらさくら
牛乳瓶の底の眼鏡で彫る天女　堺　市　坂上　淳司
生存を回覧板にマーキング　河内長野市　森田　旅人
大都会ネオンが隠す人の欲　三田市　野口　龍
元夫にちょっぴり未練ある私　豊中市　きとうこみつ
ＭＲＩ地獄もきっとあんな音　高槻市　初代　正彦

暇だから笑う練習でもするか　米子市　後藤　宏之
散歩かな徘徊やろか午後の五時　三田市　堀　正和
捨てられぬ古着に温い思い出が　尼崎市　藤田　雪菜
景色見て乗り越してると苦笑い　高槻市　松岡　篤
母が言う　もっとゆっくりしてお行き　大洲市　花岡　順子
転ばずにね　むすめ必ず言い残す　西宮市　高瀬　照枝
いいことがいっぱい選挙のお約束　土佐清水市　辻内　次根
校長に謝罪会見講習会　唐津市　仁部　四郎
仏壇は消えて床の間にはアニメ　鳥取県　斉尾くにこ
ドクターもナースも虎も味方です　岡山市　丹下　凱夫
ゴーヤのレシピお嫁ちゃんからメール　桜井市　安土　理恵
若者に好評芋の煮ころがし　寝屋川市　川本　信子
チクタクと深夜も刻む腹時計　大阪市　小野　雅美
取ってあるさよならのとき言う科白　松原市　吉野　一心

バス待ちの時間潰せぬ田舎旅　羽曳野市　黒木ひとみ
待合室時計の針もスローテンポ　西予市　黒田　茂代
豆腐屋が残る京都は文化的　東大阪市　青木　隆一
ありがとう何度言ったか言われたか　豊橋市　八甲田さゆり
失恋の瘡蓋痕があるハート　三原市　笹重　耕三
幸せの香りご飯が炊けました　鳥取市　狭武　紫陽
名水と呼ばれる迄はタダの水　神戸市　斎藤　隆浩
野良猫か地域猫かを問うてから　岡山市　永見　心咲
大食いショー裏番組は飢餓ニュース　富士見市　中島　通則
考えることを拒否してスマホでポン　大阪市　田中ゆみ子
マスコミは袋叩きがダーイ好き　神戸市　敏森　廣光
幸せな顔が集まるクラス会　羽曳野市　宇都宮ちづる
棚の奥古古米あり悩んでる　弘前市　稲見　則彦
草むしり頭いらないから好きだ　米子市　池田　美穂

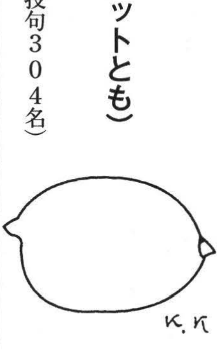
軽口をたたくと空気入れ替わる　広島市　松尾　信彦
新聞が毎朝届くいい国だ　鳥取市　永原　昌鼓
自分への甘めのネジを締め直す　堺　市　太田　昭
大三元上がり今年の運使う　大阪市　野坂真美子
竹輪から覗く私のテリトリー　広島市　羽城　裕子
年老いたされど心はまだピンク　豊中市　上出　修
見えないがそこまで来てる福の神　防府市　坂本　加代
生きるって簡単じゃない衣食住　弘前市　福士　慕情
絵手紙からこぼれ落ちそう実る秋　岩国市　上村　夢香
だらだらとくどい説教食わせ者　鳥取市　上山　一平
キャラメルは噛んでも飴は噛んじゃダメ　豊橋市　小松くみ子
ポックリ寺に行くグループに入ってる　尼崎市　山田　耕治
安っぽい話肴に縄のれん　寝屋川市　廣田　和織
訳ありな顔してあおる昼の酒　羽曳野市　吉村久仁雄

アレソレの話弾んで酌み交わす　奈良県　渡辺　富子
生ビール僕の再生エネルギー　広島市　岸本　清
爺さんの孫ですビール四杯目　笠岡市　藤井　智史
缶ビール冷やし忘れてうろたえる　寝屋川市　伊達　郁夫
心地よく無口がしゃべる酒二合　豊中市　齋藤奈津子
酒二合憂さ忘れ五合我忘れ　神戸市　みぎわはな
淋しさを紛らすたびに酒がいる　米子市　野川　宣子
熱燗へ父の笑顔が眼に浮かぶ　東大阪市　北村　賢子
降りといで一緒に飲もう鎌の月　堺　市　澤井　敏治
乾杯の声も弾んでコロナ明け　米子市　伊塚美枝子
相席の女しっかり呑み食べる　大阪市　岩崎　公誠
梅酒からぽつりと秋へ弾く愚痴　生駒市　飛永ふりこ
二次会は目配せだけで決まります　松山市　郷田　みや
自分史に酒という字が闊歩する　尼崎市　永田　紀惠

共選欄　檸檬抄

（薫風書、カットとも）

（投句304名）



「彩り」　鈴木いさお　選

善人の秋を彩る塔まつり　高槻市　初代　正彦
テーブルの彩り妻の苦心作　鳥取県　竹信　照彦
国技館彩り添える砂被り　大阪市　内田志津子
少年を夢に駆りだす多色刷り　松山市　栗田　忠士
孫ひ孫喜寿の宴は花ざかり　大阪市　岡田　恵子
彩りは黄色一色タイガース　羽曳野市　磯本　洋一
彩りは青のみで良し秋の天　熊本市　杉野　羅天
人生に彩りくれた男達　神戸市　村松　久江
頬紅で母を彩り茶毘に付す　唐津市　坂本　蜂朗
自家野菜彩り添えて食誘う　橋本市　石田　隆彦
七五三彩りきそう稚児の列　箕面市　大浦　初音
花好きの棺へ真赤なバラ添える　神戸市　奥澤洋次郎
趣味の幅広げ彩る老い仲間　米子市　伊塚美枝子
背伸びしてもぎ取る彩りの欠片　広島市　羽城　裕子
晩酌に彩り添える妻の笑み　富士見市　中島　通則

「彩り」　川本真理子　選

百歳になったらホームの彩りに　桜井市　安土　理恵
彩りを添えようもなきお爺さん　川西市　山口　不動
褪せた糸華やかにする金婚譜　三原市　笹重　耕三
彩りを足して八十路へ二人旅　福山市　新庄　芳春
彩りを終え白黒の老夫婦　八幡市　武田　悦寛
無彩色だった貴方に会うまでは　大阪市　田中ゆみ子
彩りにあなたを添えて丸い卓　和歌山市　まつもともとこ
めいめいの個性に光る彩がある　豊中市　水野　黒兎
少年を夢に駆りだす多色刷り　松山市　栗田　忠士
園児かく彩とりどりの未来絵図　奈良市　米田　恭昌
百色の色鉛筆も描けぬ夢　富山市　伴　よしお
カラフルな傘駆け抜ける通学路　大阪市　東　敏郎
通学路色とりどりのランドセル　米子市　竹村紀の治
幼子の瞳の奥に映るもの　生駒市　響庭　風鈴
残ってた赤いマニキュアつけてみる　尼崎市　藤井　歌子

赤とんぼ野に一片の彩放つ　尼崎市　板谷　賢二
ご贔屓の化粧まわしで土俵入り　大阪市　東　敏郎
イケメンの彩りもいるので呼んだ　大阪市　大沢のり子
七色の声と笑顔があればいい　黒石市　北山まみどり
彩雲は佳い日の予感芋煮会　和歌山市　佐藤　まき
私流四季を彩る帯着物　山口市　兼崎　徳子
彩りが激しくなったコマーシャル　大阪市　榎本　舞夢
複雑な彩りまぜてきた便り　枚方市　藤村　亜成
色とりどりの花に囲まれ魔女になる　大阪市　原　幸子
天然色西部劇見た日のショック　三田市　堀　正和
彩りを終え白黒の老夫婦　八幡市　武田　悦寛
通学路とりどりのランドセル　米子市　竹村紀の治
彩りを失くした街が泣いている　神戸市　敏森　廣光
泣きべそに彩り添える青い空　羽曳野市　三好　専平
自分史に彩り添える五七五　阿南市　小畑　定弘
千羽鶴の彩り病室の虹か　神戸市　米田利惠子
ひとりごはん彩るものもないままに　八尾市　村上ミツ子
石室の彩り見事蘇る　堺市　坂上　淳司
十二色あれば十分画布埋める　和歌山市　松原　寿子
指笛と彩り添える島の唄　那覇市　宮　すみれ
五百円出して十品目サラダ　枚方市　栃尾　奏子
お刺身に彩り添えるつまの菊　米子市　後藤美恵子

ムーディーな夜を彩るピアノソロ　鳥取県　斉尾くにこ
声出して笑うビタミンカラー達　佐賀県　真島久美子
シューマイのグリンピースがいい仕事　大阪市　宇都満知子
味よりも満艦飾の料理本　大阪市　今村　和男
味よりもインスタ映えでメニュー決め　高槻市　松岡　篤
彩りがきれいで箸が迷ってる　犬山市　関本かつ子
隅の席ミラーボールのような人　三田市　上田ひとみ
あの人は見えぬ孔雀の羽を持つ　枚方市　栃尾　奏子
仏へと近づく 彩度上げておく　笠岡市　藤井　智史
彩りは揃うメインが決まらない　大阪市　髙杉　力
彩りのはずの女が主張する　橿原市　居谷真理子
気が付けば妻の補色になっている　郡山市　安藤　敏彦
運動会の空カラフルに万国旗　奈良市　大久保眞澄
カラフルな万国旗が願うのは平和　羽曳野市　徳山みつこ
万国旗争うこともなく並ぶ　米子市　池田　美穂
多民族繋ぎ彩れ平和の輪　宝塚市　丸山　孔一
青い地球をモノクロにするヒト科　尾道市　村上　和子
コスモスの彩りフワリ母の色　豊中市　池田　純子
紫苑桔梗紫を抱き母の墓　鳥取市　狭武　紫陽
母の葬スッピン肌に紅をひく　大阪市　内田志津子
頬紅で母を彩り荼毘に付す　唐津市　坂本　蜂朗
終章に彩り添える「ありがとう」　越谷市　久保田千代

岸田内閣彩り添える五人雛　和歌山市　上田　紀子
宴会の紅一点は古希の坂　堺　市　齋藤さくら
夏から冬へ紅葉の秋が走り去る　大阪市　古今堂蕉子
飲みに来いコンパニオンも呼んである　東大阪市　西村　哲夫
彩りにあなたを添えて丸い卓　和歌山市　まつもとともとこ
彩りは二の次味で勝負する　鳥取市　岸本　孝子
灰色の里にコスモス曼珠沙華　大阪市　石田　孝純
復興へ彩り添えたルミナリエ　堺　市　澤井　敏治
手術跡私彩るものが増え　神戸市　城戸　誓子
彼岸には彩り映えるお墓前　枚方市　谷　英也
多彩な具最後に散らす紅生姜　大阪市　横山　里子
野仏のおしゃれに赤いよだれかけ　唐津市　仁部　四郎
大会に華を添えてるチアガール　大阪市　吉積　栄次
パセリ添え完璧になるオムライス　鳥取市　狭武　紫陽
家計簿は赤字だらけでにぎやかだ　松江市　藤井　寿代
旅の宿膳は贅沢秋の彩　大阪市　森　廣子
日本の四季を紡いで四季の彩　富田林市　山野　寿之
雨上がるやる気を起こす虹が立つ　尼崎市　藤井　宏造
私を彩っている友の数　黒石市　石澤はる子
秋色を三坪の庭に添えてみる　神戸市　近藤　勝正
彩りがきれいで箸が迷ってる　犬山市　関本かつ子
病室の殺風景に赤いバラ　鳥取市　吉田　弘子

ごめんネのかわりハートのオムライス　大阪市　平井美智子
彩りは地味でも老母の味が好き　西宮市　福島　弘子
少年のポリシー　弁当は茶色　大阪市　島田　明美
彩りに欠けるオヤジの手弁当　鳥取市　奥田　由美
色彩は無くとも里の煮ころがし　柏原市　津村志華子
彩雲は佳い日の予感芋煮会　和歌山市　佐藤　まき
絵日記の彩り僕の影は濃く　東大阪市　西村　哲夫
一色が足らず自画絵が締まらない　明石市　糀谷　和郎
自画像のバックに虹を描くつもり　貝塚市　吉道あかね
何色を足せば私の虹になる　寝屋川市　伊達　郁夫
彩りに手間どり過ぎて未完成　吹田市　西沢　司郎
ふっきれて違う濃淡付けてゆく　海南市　小谷　小雪
喜びも悲しみも混ぜ染め上げる　香芝市　山下じゅん子
手術跡私彩るものが増え　神戸市　城戸　誓子
千羽鶴の彩り病室の虹か　神戸市　米田利恵子
病室を彩る孫のクレヨン画　奈良県　室田　行久
病室の殺風景に赤いバラ　鳥取市　吉田　弘子
我が背には彩の文字介護職　松原市　吉野　一心
キラキラとネイルの十指弾む手話　西宮市　亀岡　哲子
彩りにプラス思考を混ぜ合わせ　米子市　中原　章子
モーニングコール独り暮しの彩りに　神戸市　奥澤洋次郎
秋色を三坪の庭に添えてみる　神戸市　近藤　勝正

彩りの薄い日もありお茶を飲む　鳥取市　山野すみれ
わくわくと山の彩り待つリュック　箕面市　広島　巴子
万国旗争うこともなく並ぶ　米子市　池田　美穂
運動会の空カラフルに万国旗　奈良市　大久保眞澄
錦絵を羽織ったような秋の山　宮崎県　黒木　栄子
声出して笑うビタミンカラー達　佐賀県　真島久美子
日に干した布団に海の四季の彩　土佐清水市　辻内　次根
青春のページ彩るビートルズ　河内長野市　坂野　澄子
彩りの豊かな秋はどこいった　羽曳野市　吉村久仁雄
彩りは心の錦だけでよい　美作市　岡本　余光
彩りがあるからこの世飽きもせず　唐津市　前田　廣幸
喜びも悲しみも混ぜ染め上げる　香芝市　山下じゅん子
彩りを足して八十路へ二人旅　福山市　新庄　芳春
終章に彩り添える「ありがとう」　越谷市　久保田千代
隅の席ミラーボールのような人　三田市　上田ひとみ
シューマイのグリンピースがいい仕事　大阪市　宇都満知子
パプリカが似合わぬ老いの台所　橿原市　居谷真理子
キラキラとネイルの十指弾む手話　西宮市　亀岡　哲子

秀　句

人生暮色おしゃれ心はすこしある　松山市　柳田かおる
ブギウギが老いの暮らしに花添える　堺　市　内藤　憲彦
無彩色だった貴方に会うまでは　大阪市　田中ゆみ子

ふるさとの運動会は赤と白　宮崎市　押川　胡坐
ふるさとは黄色の海に浮かぶ島　弘前市　髙瀬　霜石
古里は無限の彩で帰り待つ　三田市　北野　哲男
折々の花で彩る無人駅　宮崎県　黒木　栄子
紅葉に彩られてる無人寺　大阪市　原　幸子
廃屋に萩の彩り景になる　米子市　妹能令位子
錦絵の中で流れてゆく時間　和歌山市　北原　昭枝
山を染め野の彩りも神の筆　河内長野市　村上　直樹
彩りは心の錦だけでよい　美作市　岡本　余光
自然の彩度何も足してはなりません　岡山市　永見　心咲
人生の秋には秋の彩りが　尼崎市　宗　和夫
色の無い庭を彩る秋茜　和歌山市　西川　千鶴
灰色の里にコスモス曼殊沙華　大阪市　石田　孝純
彩りを失くした街が泣いている　神戸市　敏森　廣光
泣きべそに彩り添える青い空　羽曳野市　三好　専平
彩りは青のみで良し秋の天　熊本市　杉野　羅天
点睛の一筆畔の彼岸花　河内長野市　森田　旅人
野仏のおしゃれに赤いよだれかけ　唐津市　仁部　四郎

秀　句

複雑な彩りまぜてきた便り　枚方市　藤村　亜成
今生の際を彩る彼岸花　岐阜県　喜多村正儀
薄野に夕日が落ちてゆくところ　岡山市　丹下　凱夫

「届く」（投句　212名）

柿花和夫選

見届けたい二人の孫のお嫁さん　丹波篠山市　内山　俊朗
宅配より声を聞きたいプレゼント　箕面市　出口セツ子
拍子木で昭和が届く紙芝居　河内長野市　藤塚　克三
ゼロひとつ取ればエルメス手が届く　三田市　村田　博
自分宛の荷物が届く旅帰り　鳥取市　岸本　宏章
ホームシックいい頃合いに母の便　唐津市　坂本　蜂朗
手の届く範囲にしとく大掃除　犬山市　金子美千代
糸電話君のハートが届いてた　唐津市　仁部　四郎
背伸びしてとどくあたりに置く明日　岐阜県　喜多村正儀
宅配の兄ちゃんにハイアメひとつ　三田市　野口　龍
赤紙が届く時代にならぬよう　米子市　中原　章子
蛇口から今朝も平和が迸る　富田林市　山野　寿之
通販で届くのは皆妻の物　大阪市　東　敏郎
夢を追う天まで届け子らの凧　弘前市　福士　慕情
満月に届きそうだよ背のびする　岡山市　大石　洋子
宅配の秋の香包むローカル紙　寝屋川市　長尾　千賀
物干し竿背伸びをしたらまだ届く　香芝市　山下じゅん子
届かない枝にはたわわ甘い柿　大阪市　島田　明美
母の愛天国からのラブレター　摂津市　野々村レイ子
手の届く位置に私の夢を置く　貝塚市　吉道あかね
下り坂の景色をしかと見届ける　今治市　永井　松柏
手話だけでちゃんと心は届いてる　藤井寺市　鈴木いさお
黒電話までは親の目届いてた　加西市　山端なつみ
聞く耳へ庶民の声が届いたか　横浜市　菊地　政勝
メールより虫の知らせが先に来た　三田市　北野　哲男
饅頭が届いて辛党の小言　柏原市　津村志華子
通販で届く美人になるクスリ　横浜市　川島　良子
もうちょい先も少し左痒いとこ　河内長野市　大島ともこ
雪便り富士はやっぱり日本一　大阪市　田中ゆみ子
夏の恋もう終わりねとライン来た　豊中市　上出　修
まごころもレターパックにつめておく　和歌山市　まつもともとこ
冥土からメールが届きまだ来るな　枚方市　谷　英也

佳　句

言外に意味を持たせて贈り物　南あわじ市　萩原　狸月
いつでもいいと黄泉から届くご案内　香南市　桑名　孝雄
主婦業の休暇届が置いてある　三田市　九村　義徳
名月を観ろとメールの命令書　宝塚市　岸田　万彩
銀杯が届き百寿に照れる母　河内長野市　中島　一彌

人

届け先間違えていた恋心　富山市　伴　よしお

地

離婚しましたとニコちゃんマークが届く　弘前市　髙瀬　霜石

天

後悔が昨日の私から届く　郡山市　安藤　敏彦

軸

休肝日に届いた地酒罪作り

「百」

池田純子選（投句 213名）

百歳へ母の意欲にリスペクト　香芝市　山下じゅん子
百歳のところどころにある付箋　寝屋川市　廣田　和織
百歳が身近に居てる令和の世　大阪市　原田すみ子
百歳の私の顔を見てみたい　貝塚市　吉道あかね
百歳をめざし納豆まぜまくる　東大阪市　青木　隆一
気が弱くわたし卒寿をめざしてる　大阪市　江島谷勝弘
百年後も青い地球であるように　堺　市　澤井　敏治
生き抜いて戦後百年見てみたい　大阪市　平賀　国和
百均で買ったノートに夢を盛る　豊中市　水野　黒兎
百均へ行ってじっくり世相見る　丹波篠山市　酒井　健二
百均を彩るメイドインチャイナ　鳥取市　前田　楓花
百円ショップの森で迷子になりました　弘前市　髙瀬　霜石
大阪のおばちゃんは百獣の王　河内長野市　藤塚　克三
百度石祈りの数に丸くなり　尼崎市　山本　百合
コンマ以下競う記録の百メータ　富田林市　山野　寿之
安心は百人力の妻と居る　香芝市　大内　朝子
五百羅漢どの顔見ても父の顔　寝屋川市　川本　信子
プーチンは百叩きでも飽き足らぬ　藤井寺市　鈴木いさお
相も変わらず百鬼夜行の永田町　奈良市　米田　恭昌
百万遍拝む届かない平和　安来市　原　徳利
百名山いまはテレビで登ってる　神戸市　酒井　宏
百薬の長に命を削られる　弘前市　福士　慕情
百科事典ほこり被ってふてくされ　大阪市　岡田　恵子
百万円の利息は顕微鏡で見る　岡山県　藤澤　照代
書くだけでむずむずしますこの百足　三田市　上田ひとみ
百聞よりまず一見をするスマホ　豊中市　藤井　則彦
満点でないから好きになりました　和歌山市　柏原　夕胡
百態の雲パンになり象になり　大阪府　米澤　俶子
百花繚乱とはいかないがうちの庭　東大阪市　北村　賢子
主婦業にまだ百点が貰えない　羽曳野市　藤原　大子
たからかに百と言う鬼かくれんぼ　宮崎県　惠利　菊江
百どころか千回言うぞありがとう　大阪市　古今堂蕉子

佳　句

百点のテストが弾むランドセル　鳥取市　岸本　宏章
子育てに百面相を使い切る　鳥取市　大前　安子
憧れが輝いていた百貨店　尾道市　村上　和子
百態を演じた空もいつか秋　岐阜県　喜多村正儀
胸に棲む小物ばかりの百の鬼　橿原市　居谷真理子

人

百歳の笑みは仏にどこか似る　箕面市　出口セツ子

地

「百人力」パワー秘めてる母の愛　豊中市　齋藤奈津子

天

百態の蝶と語らう藤袴　河内長野市　森田　旅人

軸

子等に託す百年後の青い空

初心教室

題 ― カレンダー

平井美智子

今月の題（カレンダー）も発想が広がりにくい題だったので同想句が沢山見られました。自分ならではの感覚が入っているか、独自の表現ができているか再考することも大切な事のひとつです。

原（原句）参（参考句）

★リズムを大切に！

原 カレンダー今日は無事とひとり言　鈴子
中6音ですので
参 カレンダー今日も無事にと独り言

原 カレンダー噤んだままの記念日　律子
カレンダーが噤むなんて素敵な表現なのですが下4音です。ハロウイン・クリスマスなど記念日の具象を入れて見ては？
参 カレンダー噤んだままの誕生日

原 誕生日の日付記すカレンダー　さくら
中六音ですので
参 誕生日の日付を記すカレンダー

原 カレンダー一緒に見ているアリバイを　芙美子
中八音ですので
参 アリバイを確かめているカレンダー

原 二重丸つけて待ちます孫誕生　純子
下6音の表現が少し気になります。
参 花丸で孫の誕生待っている

原 不調な時期縋る日めくりの格言　歳重
面白い見付けなのですがリズムが取れて無いような気がします。
参 日めくりの格言頼る不調な日

★表記に注意しましょう！

原 日捲りを捲るとその日動き出す　泰宏
捲るの漢字、片方を平仮名にしました。
参 日めくりを捲ると朝が動き出す

原 予定いれ月ごと増える予約診　開子
無理に五音にしようとして（予約診）というぎこちない言葉になりましたね。
参 診察の予約ばかりのカレンダー

★イメージをひろげよう！

原 カレンダー月が終ればゴミの中　夢子
本当にその通りなのですが・・。
参 カレンダー終った月に悔いがある

原 カレンダー恋文届く記される　レイ子
プップッと切れた感じがします。
参 恋文が届き花丸カレンダー

★参考にしてください

原 カレンダー国旗出す日がわからない　一平
祝日を旗日といって国旗を揚げましたね。
参 国旗マークあれば嬉しいカレンダー

原 友に会う今からこの日二重丸　不二夫
（今からこの日）をすっきりさせると
参 友に会う約束の日の二重丸

原 被災の地主なし家カレンダー　一心
プップッと切れた感じがしますので
参 カレンダーだけがポツンと被災の地

原 趣味仕事書き込みズバリ羽伸ばす　良子
羽と羽根、どちらを選ぶかは感覚です。
参 趣味仕事書き込み今日も羽根伸ばす

原 年金の受給の印孫来る日　くにお
年金と孫。ダブルの楽しみですね。
参 年金の受給日　孫がやってくる

原 大安に良いこと何かありました　栄次

期待した大安日だったのに・・。

参　良いことが何もなかった大安日

★このままでも良いのですが・・

原　今月も元気に過ぎること願う　照　枝

カレンダーに手を合わせている照枝さんの真摯な姿が目に浮かびますが・・。

参　今月も頑張ろうねとカレンダー

原　日めくりは朝一番の日課です　のぞみ

充分きちんとできているのですが下五を変えてみるのも一考。

参　日めくりは朝一番の応援歌

原　何の日か思い出せない○印　タ　カ

○印あるあるの感がします。丸印をイニシャルに変えるだけで物語ができます。

参　Mの字が思い出せないカレンダー

原　ひと月の予定書き込むカレンダー　ひとみ

その通りですが少し工夫をしましょう。

参　花丸も△もあるカレンダー

原　夏休み終わりやれやれカレンダー　閑

やれやれに作者の気持ちが出ていますが他の表現にしてみました。

参　夏休み終わりひと息つく暦

原　カレンダー妻子の予定から埋まる　博　之

カレンダーを下五に持ってきてみました。

参　妻と子の予定で埋まるカレンダー

原　時々は過去に旅するカレンダー　龍

助詞の使い方。どちらが好みですか？

参　時々は過去を旅するカレンダー

原　カレンダー白地ない程予定書く　えい子

白地ないを言い換えてみました。

参　カレンダー隙間ないほど書く予定

原　書いたのも見るのも忘れカレンダー　静　恵

（忘れ）の後に（た）を入れてはいけませんかというコメント付きでしたが私はこのままでよいと思います。あるいは

参　書いたのに見るの忘れたカレンダー

★添削不要の句　◎は優秀句

○カレンダー妻専用の予定表　美　恵

専用という言葉がわかりやすいです。

○年金日花丸つけて待っている　尚

（花丸）にウキウキ感が出ています。

○デイの日にハートが付けてある暦　双　葉

デイの日は朝からルンルン。前向きな生き方に乾杯！

○媚薬のよう君の暦の謎の丸　えみこ

謎の○にドキドキしたりイライラしたり。媚薬のようが恋する女性の表現ですね。

○あれこれと予定ばかりが先走る　風　鈴

今月はあれとこれと‥予定が一杯。但し月末には繰り越す予定を書き込む羽目に。

○日めくりを捲り忘れて四日経つ　風　露

忙しかったのか、無為な日々だったのか。四日という数字が納得です。

○カレンダー今日の予定はまだ白紙　幸子

約束の電話を待っているのか、それとも決めかねていることがあるのか。作者の鬱々とした感じがよく出ています。

○カレンダーに私の管理してもらう　百合

して貰うという受け身の表現が面白い。

○百歳へ今日の歩数を書く手帳　行　久

心意気と日々の努力。素晴らしいです。

◎空白が埋まらぬままのカレンダー　邦子

カレンダーに空白があると何となく不安になります。それは心の空白に繋がるのかもしれません。しっとりした佳句です。

カレンダーに楽しいことをいっぱい書き込めるような新年でありますように。

川柳塔鑑賞

同人吟　斉尾　くにこ
—11月号から

やさしさの土台痛みと哀しみと　　吉道　あかね

痛みと哀しさがあっての強い礎石なのでしょう。見せている日常はやさしい色合いで佇んでいるのでしょうが、痛みと哀しみがあるからこその優しい色合いなのですね。「やさしさの土台」の表現に惹かれます。

鍵隠すところを犬が見てました　　山田　耕治

ヘソクリの在りか、秘密の在りかを見られてしまった。犬に。なんとも微笑ましくて川柳味たっぷりです。

食事量減った分だけ飲むサプリ　　岸本　宏章

サプリメントは花盛り。髪、脳、目、皺から膝まであらゆる部位に効く高齢者向けのサプリのＣＭを見ない日は無いくらいです。でも一番のサプリは年齢制限の無いトキメキかも。

だんだんと遠ざかる夫との距離　　黒田　茂代

月日を重ねると安心感が生まれて心地よい距離感がお互いに解ってきます。遠ざかる距離は信頼の距離ではないでしょうか。一か所が繋がっていればＯＫ。

昔話遠くに置くと美しい　　鴨谷　瑠美子

昔話だと前振りを付けても内容によっては生々しく感じることもある。距離を置き他人事として聞く分には美しい。

好奇心大事な夏のビタミン剤　　久保田　千代

夏バテをしない為にもビタミン剤は大切ですが「好奇心がビタミン剤」だなんてそんな発想をされる女性はきっと魅力的な方でしょう。年齢を言い訳にしてついつい好奇心に蓋をしてしまいがちですが外へ出かけましょう。未知の今日が待っています。

折り鶴が一斉に飛ぶフルムーン　　喜多村　正儀

ファンファーレでも鳴ったかのような状況にも思えます。折り鶴もご家族も、祝福しているフルムーンなのでしょう。

そよ風の葉音やさしいシンフォニー　　上田　紀子

夏から秋へ季節の変わり目に吹く風は心地よく木々の葉を揺らし交響曲を奏でているような。作者のゆったりとした心持もうかがえます。

通院出来て元気だったと今わかる　　山田　葉子

病気だから通院するのでしょうが、川柳作家の目はなんともユーモアたっぷりで微笑ましい。確かに重病者になれば通院も困難になるでしょう。ある意味元気だから通院が出来るとも言えます。

背伸びして覗いてみたい百年後　　武田　悦寛

一世紀後の世界や地球はどのようになっているのか興味津々、確かに覗いてみたくもあります。戦争は無くなり温暖化も落ち着いて子や孫は平和で有って欲しいと願わずにいられません。

歩幅まで合わせれば過呼吸になった

宇都満知子

歩く速度まで合わせると酸欠になりそうですね。夫婦でも友でも車間距離が大切に思えます。過呼吸の表現が面白い。

哀しみが透ける風呂場の磨りガラス

小野雅美

お風呂場はひとり心まで裸になるところですから、日常にまぎれさせている哀しみと向き合う場所でもあるのです。朧にとするはずの磨りガラスがより鮮明に映し出す哀しみ。

宅配へ冷えた麦茶を出す猛暑

中島一彌

小走りで猛暑の中、配達をされてきたお兄さんへ感謝の気持ちで差し出した冷えた麦茶。その優しさと心遣いに配達員さんはきっと生き返られた心持でしょう。

缶ビール一缶ほどの通り雨

廣田和織

ひと雨欲しいなと思う猛暑に降ったのは、乾ききった大地を湿らせたほどの通り雨だった。それを「缶ビール一缶ほどの」とはなんて面白い表現でしょう。ガッカリ感もなんか楽しくなってきます。

あの世から吠えていそうなプリゴジン

羽奈和子

ニュース映像に何度となく流されたあのプリゴジンのお顔は「あの世から吠えていそう」に共感いたします。

哀しさは女を終るメスのあと

安土理恵

ずーんと読む人へ迫って来る一句です。手術をされて、お元気になられて、一見以前となにも変わらない暮らしに戻られたように周りには映るのだけれど、本人にしか分からない体にはメスの痕が残されている。「女を終えたのだと想う」哀しみが読む人へ伝わってくる。

海渡る梨鳥取弁を喋る

吉田弘子

鳥取の自慢の二十世紀梨は輸出もされて海外の方に喜ばれていると聞きます。誇りをもって鳥取弁を喋っていて欲しい。

太陽に殺人罪で逮捕状

成田雨奇

今年の夏は酷暑でした。熱中症でお亡くなりになられた方々、送迎バスの中で命尽きた園児など多数の事故がありました。殺人罪で逮捕したい太陽でした。

直立の標的戦意失せました

永見心咲

あがらい、歯向かって来られれば戦意注入して対処の仕方もありますが、真っ直ぐな無防備には矢も鉄砲も敵いません。「直立の標的」であることが最強なのかも知れません。

覗きたい覗かれたいの障子穴

大内せつ子

覗きたいのは分かりますが「覗かれたい」との見付が川柳家の目ですね。寂しくて誰か覗くのを待っているのか、何か誇らしい物が有り見て欲しいのか。どちらにしてもそれが障子穴とはそそられます。

ハンドルが過去へ過去へと切りたがる

石澤はる子

車のハンドルでも自転車のハンドルでも前へ前へと進む方が得意なはずなのに何時からか過去へ過去へと向きたがるようになってしまう。仲良しとのお喋りも昔話の方が盛り上がりつついつい昭和を慈しみだしている。また、午後のひとり時など思い出すのは賑やかだった頃の家族の様子。穏やかで成熟のひとときなのでしょう。

水煙抄鑑賞

―11月号から

平賀国和

哲学の道に屁理屈おいてきた

岡田恵子

京都のいわゆる哲学の道は屁理屈を考える道でもあったのですね。京大哲学科田辺元教授は大東亜戦争を美化し戦争支持の屁理屈を説いたのでした。

若さ保つ薬やっぱり嘘だった

米田利恵子

老けないよう暮らす秘訣は笑うこと

中村民子

人生を飾る一句が出てこない

田中重忠

十月の川柳塔まつりで井尻吉信先生からフレイル予防に関するお話があった。若さを保つには食と社会参加が大事ということであったが、塔まつりに参加されている方々の元気のよさに感心されておられた。川柳は若さを保つ秘薬らしい。

モンゴルの国歌も欲しい大相撲

三輪くにお

ハワイ、モンゴル、欧州から来日した若者は、国技を支えてくれました。最近はモンゴル抜きの大相撲は考えられないくらいです。モンゴルの国歌が流れたら日本人も頑張るかも。

星降る夜は銀河鉄道発車する

中前幸子

澄み切った秋の星空を見上げると、銀河鉄道が走っている気がします。いつか僕も乗ってみたいなどと空想します。

知識にはテレビとスマホ有れば良い

尾畑なを江

若者は新聞を読まないようだ。電車の中でもスマホに首ったけ。新聞社も不景気になり、毎日新聞の囲碁本因坊戦の賞金は三分の一に減額されたとか。

カオスの時代　平和な世界来るだろか

倉本一弥

一粒も残さず平和のめしを食べ

青木公輔

はだしのゲン全十巻を読みました。今も世界は戦乱の時代、平和なご飯やパンを食べられる時代になって欲しいものです。

梯子した遠い昭和の映画館

北原昭枝

いつまでも昭和懐かし夢見てる

河南すみえ

団塊世代の私にとって、戦後の昭和は貧しくとも良い時代だったとの思いがあります。最近はフォレスタの昭和の懐かしい歌を聞き楽しんでいます。

バチアタリなのに晩鐘の絵が好き

森田遊子

パリ・オルセー美術館でミレーの晩鐘や落穂拾いの絵を見て感動したものです。農民の祈る姿に、無宗教の私も敬虔な気持ちになったことでした。

百均に二百　三百円値札

禱モモト

貴重な百円ショップにも値上げの波が押し寄せてきそうです。残念です。

スーパーでサンマと鯛を見比べる

今村和男

鯛よりもさんま鰯が喜ばれ

田中辰夫

庶民の魚が高値の華になりました。秋刀魚を食べると豊かな食事をしている気持ちになります。

「作家水谷鮎美を論ず」より

「川柳雑誌」（昭和27年1月）

福田（ふくだ）　山雨楼（さんうろう）

（三）鮎美氏の作品傾向

所謂鮎美調の代表的なものとしてはロマンチックであることだ。著名な数句を拾つて見ると

いつしんに恋を守つて湯ざめする
さびしくも父は枕をおちてゐる
月の出をまてば笛さへなるものを
君雲を話す心になり給へ
さびしさのあまりにながき葱坊主

などが光つている。次に魂と云う言葉を使つた句が割に多いから数句を挙げる。

魂を酒連れだつて何処へ行く
幸運のその魂は創らざり
ろうそくの光りにみゆる魂よ
　古木君の結婚を祝う
おもしろき夜の魂が飛び込んだ
掌のなかの子の魂を尊べり
屋根のおもみに耐ゆる魂
　亡父七回忌
子沢山など霊魂の滅ぶべき

これらの句は思索的に相当掘下げてはいるが、まだ甘さが残つている。これは鮎美氏の性格が明朗で円満なところに由縁するのかも知れない。が何よりも氏がロマンを好む詩人である証左であつて、そのカラー持ち味は随所随所に発散されるのである。

（中　略）

「句に必ず美をプラスしたいのが私の態度です」と鮎美氏は語つているが、ロマンと繊細な技巧を通じて美しく自然と人生を伴奏した句が尠くない。

灯を消せば秋は流れて仕舞うなり
良き心花を忘れてゐたりけり
泡白く生れる昼のおかみさん
めだかの列の雲を逆のぼり
いちゞくの日向に枝は川のうへ
合掌の膝にも雲に似たるもの
岩躑躅お不動さまの上に咲き
科白にもないうつくしき心の燈

川柳の場合善なるが故に、真なるが故に美感をそそる句が多い。しかし本道はあくまで美に参入することでなくてはならぬ。おかしみを通じて表白されたる十七音美、これが川柳なのである。右の内お不動さまの句など川柳の真髄に触れたほほえみを禁ずることができない。技巧と云う点ではさすがに練達の名作家、鮎美氏ならではとうなづかせる句が枚挙に遑がない。

噛みきれぬものに乞食の歯を見せる
寂光へするどく笑ふ佛さま
信心に嵐のなかをまつしぐら
心太を闇に捨てたる凡夫かな
恩讐は彼方へ消えて風の影
たねなすびまどろむあきのふかかりき
濁流へろうそくの灯の片ちびり
金策の顔が歪んだ凹んだ
だいにごう柳の枝をみて暮し

（中　略）

句会における鮎美氏の活躍はめざましく、昭和二十五年度中優勝三回に及び本社から表彰されるカツプを獲得された。正に横綱の貫禄である。が自分はここに驚くべき事実を発見した。それは氏に天位に入つた句が非常に多く、しかも優れた句であることだ。数多い天の句の中から若干拾い上げる。

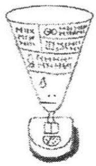
神様を信じて裸婦は寝そべりぬ
父の影子の影鶴の影もよし
幻は消へて欄間の佛達
涼み舟ゆれてるまゝに手を叩き
大晦日上唇がかはいてゐ
我が姿善い事をした影になり
君雲を話す心になり給へ

（以下略）

インスピレーションナビ 印象吟 大西泰世選

（投句１７６名）

とうとう優勝しましたね、タイガース。それほど熱烈なファンではないけれど、三十八年振りとなるとやっぱりテレビを見てしまいました。



ウクライナの悲劇が終わっていないのに、また別の戦争が始まって、タイガースのビールかけを見た同じテレビの画面から、悲惨な映像が流れて来るのです。

日本という国も何やかやと問題は有るにしても、絶対に平和を手放してはならない、絶対に、です。では、ナビを。

あらいやだ頭を置いてきたみたい　黒石市　北山まみどり

（評）どこへ、なんて聞きたいけれど、あんまり暑いと考える事を拒否したくなるのです。エッ、違う理由なの？

中秋の名月見事隙が無い　鳥取県　竹信　照彦

（評）大自然が見せる雄大さや美しさには、圧倒されてしまいますよね。邪悪なニンゲンはシャットアウトだって。

マヨネーズ何時も逆立ちさせられる　三田市　多田　雅尚

（評）あれって、やっぱり強制的なんですね。使う側の都合しか考えてなかったんだわ、お気の毒にねぇ。

着飾ってお値段立派かき氷　尾道市　村上　和子

（評）最近は季節に関係なく人気ですって。でも、あまり立派なお値段になると庶民の口には入りにくくなるんですが。

トリセツを読む時いつも虫メガネ　大阪市　宇都満知子

（評）でも、居るんでしょうね、トリセツ全部読むエライお方は。虫メガネを取り出した意地ってものもあるしナ。

筍はてんつくてんと竹になる　加西市　山端なつみ

（評）てんつくてん、だってカワイイ！　筍だって夢や希望をもって大きくなるのかしら、スゴイね。

いつまでも幸せそうな鳩時計　羽曳野市　徳山みつこ

（評）不穏な昨今の世の中でも、鳩時計はきっちり自分の役割を果たします。だって平和と幸せの象徴ですもの。

住民票がない熊が町へ出る　米子市　妹能令位子

（評）笑っておれない熊の出没、食べ物が無いという熊側の事情も切実そう。でも現実は恐怖でしかありません。

殊更に試飲ワインのうまいこと　朝霞市　前田　洋子

（評）試飲とか試食とか、実際に買って帰るとベツモノのように思えることがあります。あの少量がいいのかしら。

もう半分まだ半分のせめぎ合い　上尾市　中村　伸子

（評）もう、まだ、のせめぎ合い。よく言われますよね。楽観的か悲観的にとらえるか、性格バレバレだよ。

叶うならロゼッタ石の里帰り　河内長野市　中島　一彌

かんたんなかんじがふっとでてこない　犬山市　金子美千代

清濁を併せグラスを丸く飲む　弘前市　福士　慕情

猛暑日に跡形もなく溶けたパフェ　堺　市　澤井　敏治

如何程の値打ちあるやらないのやら　和歌山市　上田　紀子

カクテルに潜ませている罪な嘘　横浜市　菊地　政勝

重い王冠王様も楽じゃない　和歌山市　佐藤　まき

わたくしに魔法をかけるロゼワイン　香芝市　大内　朝子

畑仕事終え一杯の水沁みる　羽曳野市　吉村久仁雄

今日だけは大河ドラマの主人公　弘前市　髙瀬　霜石
目の奥は笑っていないはずですね　大阪市　小野　雅美
ただひたすらカルピス飲んでそれっきり　高槻市　松岡　篤
止めてくださいルールルールで縛るのは　松山市　栗田　忠士
するすると重たいものが降って来る　大阪市　森　廣子
また振られ2フィンガーで酔えぬまま　三田市　村田　博
芸術家輝く孤高なる一人　熊本市　杉野　羅天
英単語覚えただけで喋れない　松山市　郷田　みや
悪友という名の酒が心地良い　大阪市　平井美智子
アナログの道で出会った人数多　生駒市　饗庭　風鈴
オン・オフを切り替えている改札機　枚方市　藤田　武人
トラ柄のこのメガホンで勝ちを呼ぶ　橿原市　居谷真理子
体重を気にせずパフェを平らげた　鳥取市　前田　楓花
平均をとります五回計ります　広島市　羽城　裕子
この中に刺客の水虫がいるぞ　松江市　石橋　芳山

ギリシャ語で仲良くしろと書いてある　佐賀県　真島久美子
ぽっちゃりで健康指数高いのよ　河内長野市　森田　旅人
言い訳を酒の目盛りに書いている　奈良市　大久保眞澄
脳ミソが重くて立っていられない　松山市　大内せつ子
うまく出来ましたかしら初めてのシェーク　札幌市　三浦　強一
古代王あの悪行がバレるかも　豊中市　上出　修
お代わりはございませんと念押され　三田市　堀　正和
喝采は一瞬でした微炭酸　松山市　柳田かおる
リサイクルショップで売れぬ物もある　高砂市　裕木　るい
グラスには乾いた街の物語　大阪市　髙杉　力
朝一にコーヒー飲んで始動する　防府市　坂本　加代
戻るって言ったやないの待っている　神戸市　奥澤洋次郎
それ見てみ頭でっかち蹴躓く　堺　市　内藤　憲彦
不漁続き鰯サンマに手が出ない　河内長野市　木見谷孝代
カクテルをください夜がまだ早い　今治市　永井　松柏

積み上げた知識をひけらかす加齢　神戸市　冨永　恭子
今日家事はしないと決めてから陽気　大阪市　森田　遊子
三センチ程浮いておりますいい知らせ　藤井寺市　鴨谷瑠美子
落書きの曇りガラスの傘マーク　尼崎市　藤田　雪菜
平均を保つ我欲はみんな捨て　三木市　山口ヨシヱ
サインコサイン三角形が大好きで　大洲市　花岡　順子
亡父の齢越えてしみじみ酒の秋　西宮市　福島　弘子
握り拳開いて少し楽に成る　大阪市　吉積　栄次
トロフィーにスイッチオンが付いている　名古屋市　冨田　末男
眠くても四時には猫に起こされる　西宮市　髙橋千賀子
カンパイの挨拶長くもう待てぬ　香芝市　山下じゅん子

1月号発表

(11月15日締切)

(平本　霧石人　画)

柳箋に2句

『麻生路郎読本』余滴(79)

「雪」⑧

桒原道夫

「雪」6号の78、79頁は、ひぐるまの「信濃遍路」。川上日車が信濃の旅の感懐を述べている。一部抄出しておく。

〈□篠の井では改札口の欄を手摺に、四五人の兒守が汽車を眺めてゐた。あの兒等がこんな田舎に何の蟠りもなく住まつてゐて、東京や神戸の都會へ出る事が殆んど自分の意志で自由にならぬ此境涯を何年續けてゆくだらうか。都會へ出ねば都會の苦悦のわからぬこの兒等の心で描いてゐる都の灯は、又となく尊いものと言はねばならぬ。

□輕い傾斜の高原である。振り返ると落葉松の尖つた先が、高原の端から少し見えて居る。踏む土には雑草、折々月見草が霧に濡れた花片を見せてゐる。輕井澤の十月は針一つ落しても音のする程靜であつた。淺間の煙は頭の上を這つてゐるのであらうが霧に閉されて見えない。絶えず十間以内に人間の臭ひのする都會の平らな道を歩てゐるわたし等には異国の空を仰ぐ感じがあつた。輕井澤の十月、それはわたしにほんとの淋しさと廣さを覺えしめた。〉

80、81頁は、中谷義一郎の「劇作者としてのシヨウ」。

82、83頁は、「冬雑詠」として五人の俳人の句が3句ずつ掲載されている。一人1句ずつ挙げておく。

吹くは北風泣くに泣かれぬ日の光り　董哉
がんがん日のあたる落葉焚く　和露
冬の蠅と冬の蠅とは何してる　鬼史
何ンの火に焦げし正月の下駄　游魚
三百六十五枚目の年越し暦　鵜平

84、85頁は、游魚選「雪俳壇」。

86頁の路郎の「雪新短歌会記事」は、一部6月号に掲載済みなので、当日の句を5句挙げておく。

ひき汐の泥のふくらみ月夜なり　日車
ひき汐に捨てしものあらはに見ゆ　路郎
焰をつかみては捨てる　日車
十四の春剃刀がほしかつた　鬼史
格子から剃刀を渡したり　蜀洞

「雪」7号は、大正5年2月1日発行。通しの頁で89〜108頁。

90〜93頁は新短歌作品。

日車「一切」8句より

卓に手を措けば毒藥など思ふ
無常感じつ雑多の人を見る酒場

緑郎「小鶴」8句より

唇(くち)の笹紅(べに)が光る午后の陽ざし
皷打つ小鶴の指に透き通る血

「紅茶」のタイトルで三名の句

卓ちめたう紅茶の鉢亂れてあり游走子
篳篥の抽斗に太陽を閉めたり　至水
頰をなづる紅茶の湯氣のやはらかさ　＊素女
太陽(ひ)を拜むこころねたしと思ひけり　同

＊(葵(あおい))素女(もとめ)は、麻生葭乃の別号。

路郎「榮光」7句より

春早々の小包二人して解きぬ
親船を離れてきりきりと舞ひぬ

94、96頁は、川上日車の「新編瓦版」。一部挙げておく。

〈層雲の十二月號かで、碧梧桐氏門下の人々の句を指して「既に層雲で新しい陳腐になつてゐるやうな觀照が少くない是等の人々も、口では層雲を排しつゝ、やがては

事實の上で、層雲の進んだ道を後から進んで來るのでないかと思はれる」といふ事が書いてあつた。之は思慮綿密な井泉水氏として、甚だ不注意な言葉である。若し層雲で新しいものと自信してゐる句が、他で既に吾々の言ひ古したものとの批評を受けた場合、何と答へるであらう。東より進む者と西より來る者とは、何れも一度は自己の踏み占めた道に立たねばならぬ。所詮は文藝である。只其境涯に絶えず向上の鞭を振つて自己を進めるより他に道はない。幾ら新しきものを尊重し、それが唯一の武器であつても、模倣であれば何の意義がその間に潜んでゐやう。望むは井泉水氏にこの理解を持つて貰ひたき事である。〉

95頁の小出楢重「奈良より」を載せておく。

97、98頁は、中谷義一郎の「劇作者としてのショウ」。

99頁は、牧野虎雄の挿画。

100、101頁は、1月22日夜、宗右衛門町の禅六で開かれた第二回雪新短歌会の句の報告。何句か挙げておく。

「彈力」

酒のまぬ時に壺は破れたり　日車
夢に見しものの彈力や強かりき　游魚
大地より芽ぐむ彈力あるもの　白帝城
彈力の二分の一の妻ゆきぬ　南北
彈力ある戀となりきる　綠郎
根氣よく妻の夢を聞いてやれり　路郎

「さび」

錆釘が火にありし　鬼史
橋の袂にさびついてゐる家　雲下紅
ペンの錆みつめて藥など思ふ　日車
神さびた女の顔に言ひよらず　路郎

102頁の、宮林菫哉「哀傷品」8句より

冬の夜のこの歳してとなるほどな
行年の雑巾かけし顔かな
大年のさよならと壁そゝりたつ

103頁の、藤原游魚「餘寒」8句より

すいせんへすいせんへ水曲りけり
はるさむの疊で死ねぬこゝろする
大時計の影する水の浮寝鳥

104、105頁の游魚選「雪俳壇」より

枯草に火を放ちても心なぐさまず　正行
北風並木のなかほどの石かな　游魚

106頁の路郎の「店頭六號記」は、消息や連絡事項を記した欄。何項目か挙げておく。

□

*1牧野虎雄氏、兼崎地橙孫氏同人として新に加入さる。（略）

□

本誌一の四號に「道祖神」及「山羊見てる百姓」の傑作をみせられたる小穴隆一氏、今回同人を辭退されたる（略）

□

一月十五日、葵書店（雪発行所）左記の處へ移轉せり。大阪市西區江戸堀北通二丁目二十番地。（略）

□

移轉後のどさくさまぎれへ喜多村綠郎氏來訪。共に*2紅梅亭をきく。

＊1　牧野虎雄(1890～1946)は、洋画家。兼崎地橙孫（1890～1957）は、河東碧梧桐門下の俳人。

＊2　紅梅亭は、法善寺裏にあった寄席。

（次回に続く）

第38回 国民文化祭・いしかわ百万石文化祭2023（10月22日）

第38回 国民文化祭・いしかわ百万石文化祭2023「川柳の祭典」選考結果、事前参加は1388名、当日参加は363名。大会各賞は下記のとおり。（太字は同人）

入賞句

文部科学大臣賞
いのちみな生きてひとつになる祭り　青森県　岩崎眞里子

国民文化祭実行委員会会長賞
てっぺんに立てば迷子になるらしい　**奈良県　加藤江里子**

石川県知事賞
傷ついておいでアップルパイ焼けた　愛媛県　正岡鏡花

石川県教育委員会教育長賞
戦争と平和を兼ねる武器らしい　北海道　飯田活魚

七尾市長賞
緞帳が下りる瞬間まで祭り　**青森県　髙瀬霜石**

七尾市教育委員会教育長賞
七難をかくすと僕が消えました　石川県　表ようこ

一般社団法人全日本川柳協会理事長賞
祭りです白で生まれて白で死に　北海道　田中良積

一般社団法人全日本川柳協会理事長賞
先端にいるのは命ある兵士　岐阜県　毛利まさ子

石川県川柳協会会長賞
泥水も火の粉も今のありがとう　石川県　竹中つる子

石川県川柳協会会長賞
モナリザはきっとモンペが似合うはず　茨城県　小島一風

二次選者　雫石隆子・島田駱舟・大楠紀子・黒川孤遊

本社 十一月句会

◇十一月七日（火）午後一時
アウィーナ大阪

立冬の前日とは思えない夏日に近い気温の7日、11月句会は、106名（うち投句者13名）の参加で開催された。句会に先立ち、過日逝去された参与八木千代さん（米子市）に黙祷を捧げた。

今月のお話は木本朱夏さん。題は「選者考」。川柳を始めて、作り方は教えて頂いても、「選」の仕方をきちんと教わる機会はあまりない。その中で、完司理事長には、抜く句は右、迷う句は真ん中、没の句は左、の三つの山を作ること、小出智子さんには、天地人にはスケールの大きな句、好きな句は佳句にと、薫風師には、選句に物語性を、初鳴きは自身の川柳観が伝わる、秀句に準じる句をと教わられた。尾藤三柳さんによると、選句の最終的な判断は、幅広い知識と経験に裏付けられた選者の「勘」だという。選者をするからには勉強せよということのようだ。

またご自身の経験から、披講の際の心構えも教えて頂いた実りの多いお話でした。

（眞澄）

月間賞は島田明美さん（大阪市）
（司会—武人）（脇取—恵・志津子）
（受付—寿之・昌代）（懸垂幕墨書—耕治）
（清記—憲彦・国和・力）

席題「靴」　居谷 真理子 選

肩減りの靴誇らしく脱いである　米田利恵子
靴そろえ今日のつまずき無き祈る　輿水 弘
新品の靴に悪いが古探す　福田 正彦
赤ちゃんを待つフェルトの靴買うて　平松かすみ
くたびれた靴はオヤジの古い友　廣田 和織
下駄箱の奥にひっそり登山靴　木嶋 盛隆
定年を迎え靴にも感謝状　佐々木満作
靴を脱ぐとこは敬遠してしまう　上田 和宏
勝ったみたい玄関の靴暴れてる　石田 孝純
頑張った亡夫の靴は捨てられぬ　柴本ばっは
てるてる坊主に見てもらう新の靴　小島 蘭幸
黒い鳩群れて軍靴のひびく街　木本 朱夏
外減りの靴に姿勢を叱られる　荻野 浩子
機嫌良い靴音のして妻帰宅　藤原 大子
この靴をはけば明日は君の許　中村 恵
靴鳴らし今は夫と歩いてる　藤原 大子
揃えられた靴いい子に育ってる　加藤江里子
ストレスの形に靴を脱ぎ捨てる　水野 黒兎
百足の靴履き替えている百足　川上 大輪
片減りの靴で邪馬台国を追う　酒井 健二
子を真似る父も汚れたクロックス　藤田 武人
明日への一歩になるか靴をはく　奥澤洋次郎
靴下の穴も来ている通夜の席　伊達 郁夫
新しい靴が欲しいと車椅子　髙杉 力
卒寿には卒寿の踊り赤い靴　みぎわはな
初出社ガラスの靴をはいて出る　川端 六点
新しい靴も寄り道大好きで　石田 孝純
ショッピング靴のウインク見逃せぬ　津守 柳伸
長靴と軍手を干して満ちている　小島 蘭幸
酔えばまた自分の靴が見つからぬ　宗 和夫
ペチャ靴になってしまったシンデレラ　中岡千代美
スリッポンもう七十路はかがめない　吉村久仁雄
無機質な音響かせている軍靴　平井美智子
残った靴俺のでないが仕方ない　西上 遊二
今晩もポチの枕はぼくの靴　川端 六点
どなた様も気付いてくれぬペアシューズ　山田 耕治
片方の靴の行方を知らないか　中村 恵

佳

探しますガラスの靴を手がかりに　松下 英秋
現場へは何度も行けと靴が言う　藤田 武人
美しくひとりを生きた人の靴　栃尾 奏子
水虫が燦ぐ長靴汗の農　山野 寿之

一歩引くばかりでちびてゆく踵　小野　雅美

人

まっすぐに歩ける靴を探してる　廣田　和織

地

八十五靴下だけを派手にする　上田　和宏

天

今日も元気靴音高く生きてます　敏森　廣光

軸

かっこいいあの娘安全靴はいて

兼題「あなどる」　敏森　廣光　選

軽に乗り預金残高二億円　青木　隆一
痩せサンマいつかはきっと高級魚　今村　和男
あなどってた部下がまさかの新社長　藤井　則彦
ジュニア川柳八十路の私兜脱ぐ　堀本のりひろ
侮るな敵は夜鍋で牙を研ぐ　太田　昭
勝負めし「と金」の動き注視する　東　敬朗
八十路でも割り勘負けはしませんぞ　松岡　篤
今の首相ぐらいなら誰でもできる　大久保眞澄
侮るな戦後を生きたエネルギー　内田志津子
敬遠でボクと勝負をするらしい　吉道あかね
子供でも悪い大人を嗅ぎ分ける　西上　遊二
おとなしい部下が会社を訴える　青木ゆきみ
張り子だった虎が今年は本物だ　上田　和宏
ケナされても平気容姿では勝っている　島田　握夢
あなどるな飯の数では負けてない　居谷真理子
核兵器持たぬと核にあなどられ　柿花　和夫
侮った薄着クッシャミ三回も　山本　昌代
軽くみた坂に足元すくわれる　宇都満知子
パイン飴しゃぶる姿につい油断　村田　博
亀までがあなどるわたしの歩み　鴨谷瑠美子
あなどりも油断もあって詐欺にあう　川端　六点
あなどってはならぬ日本に近いよその国　きとうこみつ
格下とついあなどって予選落ち　奥野健一郎
もくもくと進むカメには負けました　大浦　初音
黒幕はアナタでしたか霞草　栃尾　奏子
あなどるな爺と婆には金が有る　酒井　健二
子供たちを侮るなかれよく見てる　平賀　国和
ペットボトルまさかの蓋が開けられぬ　山下じゅん子
傲慢な侮り許さない気概　中村　恵
侮った小石に思い知らされる　山野　寿之
不祥事を甘く見ていて墓穴掘る　村田　博
ボケてるが昔は企業戦士だった　松下　英明
あなどられミサイルが飛ぶ日本海　野口真桜子
一匹の蚊に一晩中あなどられ　米田利恵子
あなどるな老いの恋にもある痛み　廣田　和織
薄財布中身は無いがアルマーニ　宗　和夫
あなどると人差し指は銃になる　川上　大輪

佳

好きな子を奪っていった冴えぬやつ　冨永　恭子
パソコンのボタンごときにあなどられ　酒井　健二
方言の友はアラビア語ペラペラ　青木ゆきみ
以前なら楽に出来てた逆あがり　斎藤　隆浩
大波を除けて小波に掬われる　平井美智子

人

あなどりの心の中にある油断　大浦　初音

地

侮って恋の深さに落ちている　中村　恵

天

知れば知るほど侮れること何もない　上田　和宏

軸

あなどったら牙むき攻めてくる地球

兼題「ガチャン」　村田　博　選

空から車落ちればガチャンでは済まぬ　藤井　宏造
クレーンから鉄骨落とし大惨事　福田　正彦
ホームランガチャンと鳴った草野球　佐々木満作
台所のガチャンは猫かまた妻か　藤井　則彦
腹いせに古伊万里の皿叩き割る　太田　昭
ひび割れに早く気づいていたならば　冨永　恭子
出棺に合わせガチャンと飯茶碗　坂上　淳司
コソ泥に間違えられた盗み酒　内藤　憲彦

ガチャンガチャン元気な母が居てくれる　古今堂蕉子
切る前に切られた今日は遅くなる　加藤江里子
ミシミシガタガタユサユサガチャンタスケテー　川端　六点
嘘やろうガチャンと留置所の鍵　奥澤洋次郎
ガチャンガチャン祖母の機音耳底に　西出　楓楽
もう過去の遺物です卓袱台返し　木嶋　盛隆
近鉄電車ガチャンガチャンとよく揺れる　川端　六点
ガラガラガチャンバケツを蹴った千鳥足　澤井　敏治
仕舞いにはガチャンと切った長電話　西村　哲夫
遮断器が降りるまでには出す答　島田　明美
自販機にガチャンと落ちる富士の水　山野　寿之
シャッターをガチャンと京に老舗閉じ　水野　黒兎
威勢良い妻で茶碗がまた変わる　古今堂蕉子
一か八か本音ガチャンとぶっつける　柿花　和夫
あたったら砕けた僕の失恋記　居谷真理子
恋破れガラスのハート割れる音　伊達　郁夫
校舎越え民家の窓へホームラン　油谷　克己
ああ嬉しガラガラがちゃん大当り　榎本　舞夢
ショーケース次々と割る闇バイト　谷口　東風
ペアグラス投げつけたって晴れぬ鬱　小野　雅美
ドラマめく場面が目の前で手錠　荻野　浩子
児の病名聞いて心臓割れました　柴本ばっは
悪さして蔵に入れられ鍵ガチャン　鈴木いさお

西陣の街はガチャンと歴史織り　青木　隆一
言い訳はそこまでですとホッチキス　栃尾　奏子
ガチャンからメトロノームが狂いだす　川上　大輪
胸の鍵ガチャンと掛けて恋終わる　山下じゅん子
オヤ顔からぶつかったのねブルドッグ　大久保眞澄
事故車見てビッグモーターほくそ笑み　坂上　淳司

佳

割ったのは確か「お菊」と聞き及ぶ　東　敏郎
美人に見とれ前の車へガチャン　鈴木いさお
キッチンへまた鮭取りに熊が来た　内藤　憲彦
奔放に手を擦り抜けていく卵　中村　恵
諫早のガチャンと閉めたままの門　きとうこみつ

人

遮断機がガチャンと降りて永い冬　木本　朱夏

地

町工場今日も生きてる音がする　居谷真理子

天

連結器ガチャンと揺るぎない絆　吉道航太郎

軸

透明な自動ドアーが悪いんだ

兼題「華やか」　矢倉　五月選

薔薇飾る仏壇君の誕生日　石田　孝純
花一輪挿して華やぐお手洗い　斎藤　隆浩
華やかな過去を語らぬホームレス　三宅　保州
部屋中を花で埋めて家族葬　今村　和男
ひとときのときめきだった貸衣裳　川上　大輪
華麗なる一族消えて荒れた庭　山下じゅん子
華やかに笑顔咲かせる生き上手　大内　朝子
陛下に学ぶ控え目な華やかさ　新家　完司
耳打ちにうふふと笑う少女たち　栃尾　奏子
沢山の花を買いましょ誕生日　立蔵　信子
華やかな式を二回も　今一人　原田すみ子
華やかの裏が怖いね宝塚　上田　和宏
大谷の一投一打にファン沸く　東　敏郎
華やかな顔立ちほどに目立つ皺　山下じゅん子
賑やかに案山子も踊る村祭り　川上　大輪
華やかな裸体が受ける勝ち名乗り　居谷真理子
秋を盛るワンプレートのお惣菜　冨永　恭子
華やかな舞台支える馬の足　平賀　国和
何気ない仕草に華のある女　藤田　雪菜
やはり離婚したのか華やかになった　藤井　宏造
カツラ着け老い華やかに飛びまわり　山本加お里
華やかな未来を語る離婚式　酒井　健二
二度も見たトラの雄叫びありがとう　輿水　弘
毒キノコみたい華やか夜の蝶　森　廣子
舞台の蔭で黒子静かに汗を拭く　青木　公輔
華やかに寂しさ飾る棺の中　長尾　千賀

桜は偉いちゃんと散り時心得る　西出　楓楽
百色のクレヨンで描く未来地図　島田　明美
華やかな宴になった君が居て　木嶋　盛隆
句碑一基我が人生を華やかに　小島　蘭幸
華やかに送ろう地味に生きた母　鈴木　栄子
華やかさの裏でローンに追われてる　島田　握夢
豪華な宴水を飲めないガザの子よ　川端　一歩
二人だけの食卓だから赤いバラ　川端　六点
思いきりお洒落したけど杖ついて　みぎわはな
頂点はずっと座れる場所じゃ無い　松岡　篤
タイガース　アレのアレにて日本一　飛永ふりこ
脚光を浴びれば消えていた謙虚　小野　雅美
華やかでなくとも老妻美しい　鴨谷瑠美子

佳

百年を華やかに咲き椿落つ　古今堂蕉子
おしゃべりを載せると華やかなお皿　中村　恵
初恋は猜疑心なき花サラダ　栃尾　奏子
華やかなフリルで隠す恋の傷　平井美智子
華やかな嘘脱ぎすてて帰郷する　米田利恵子

人

華やかな蝶は毛虫の時忘れ　藤田　雪菜

地

震災の霊も見に来るルミナリエ　村田　博

天

華やかと遠いところにボランティア　水野　黒兎

軸

種と土命結んで大輪たわわ

兼題「家　族」　新家　完司　選

家族とは入らないのに家族風呂　藤井　則彦
犬二匹を扶養家族にしてほしい　松下　英秋
愛犬をうちの子と呼ぶ老い二人　柿花　和夫
ポチ抱いて救急車をと叫ぶ祖母　矢倉　五月
ワンちゃんもネコも食事はお茶の間で　佐々木満作
父ちゃんの帰りを待った夕ごはん　上田ひとみ
家族でも違う九条思い入れ　出口セツ子
入院も手術の時も要る家族　鈴木　栄子
入院の妻がひさびさ夢に出る　酒井　健二
厄介だがちょっぴり癒される家族　立蔵　信子
ママさんに言えても家族には言えぬ　鈴木　栄子
母さんが寝込んで知った守備範囲　谷口　東風
アルバムで辿るファミリーヒストリー　鈴木いさお
ウーバーイーツ一人一人で取る家族　西出　楓楽
波平が仕切る家族のおおらかさ　青木　隆一
大縄跳びの中にいるのは我が家族　小島　蘭幸
太陽を家族写真のまん中に　吉道あかね
同じ屋根泣いて笑って食べて寝る　木嶋　盛隆
隠し事それぞれ持っていて家族　柿花　和夫
ルームシェアしているような家族です　髙杉　力
風呂入る順でもめてる大家族　奥野健一郎
大家族コンダクターはお母さん　中井　萠
百歳と零歳います我が家です　柴本ばっは
八人家族のような玄関の脱ぎっぷり　島田　握夢
鴨居にある写真も僕の家族です　糀谷　和郎
免許返納急がせるのも家族愛　斎藤　隆浩
秋晴れの散歩に孫と赤とんぼ　藤田　雪菜
ダイチュキと孫に言われて命延び　みぎわはな
祖父の恋家族会議が開かれる　廣田　和織
家族会議夫婦で議長副議長　松岡　篤
「ほっといて」と言えばほんまにほっとかれ　斎藤　隆浩
一日中会話無くても家族です　藤原　大子
女系家族ペットもコオロギもオンナ　川端　六点
味付けはそれぞれ違う三世代　奥野健一郎
家族にも知らせてならぬ当たりくじ　木嶋　盛隆
母妻娘同居で喋る隙がない　村田　博
祖母も母も小太りでしたわたくしも　敏森　廣光

佳

母が逝き今年の冬は寒そうだ　原田すみ子
イケメンも美魔女も居ない一つ屋根　小野　雅美
猫が死にほんとの独りぼちになる　居谷真理子

温和しくなった家族の立てる音　粟原　道夫
乾杯へ母はエプロン着けたまま　小野　雅美

人

妻逝って優しくなった子供たち　石田　孝純

地

胃潰瘍と家族は言うが癌らしい　川端　六点

天

運動会やはり息子は足遅い　加藤江里子

軸

逆らわぬ柔和な家族抱き枕

兼題「自由吟」　小島　蘭幸　選

お話のうまさが席を立たせない　恵利　菊江
老いてこそ生きるヒト科にある魅力　藤井　則彦
「買い物ブギ」はアカペラで唄えます　鈴木いさお
変異する結婚前の誓約書　野口真桜子
ドラエモンに届かなかった子の悲鳴　山田　耕治
日向ぼこ内緒の基地を持つ仔猫　澤井　敏治
スクラムを組んで女の強さ知る　米田利惠子
金魚にも名前を呼んで餌をやる　山田　耕治
生きている限りエンピツ離さない　佐々木満作
染み渡る愛に浸っている月夜　中村　恵
ちょっと寄るわ息子はふいにやってくる　加藤江里子
ハロウインみなで群がりみな孤独　長谷川崇明
平和呆けアドレナリンが出て来ない　木嶋　盛隆
元気かと試されているプルトップ　新阜　義明
万博の過疎化心配してあげる　大久保眞澄
スリッパ一つ退屈したんだねポチよ　澤井　敏治
タイガース優勝ぼくもがんばろう　新家　完司
妻はロゼ僕は片手に缶チューハイ　今井万紗子
良弁さんと並ぶ齢を生かされる　森　廣子
十一月今年は虫の声がない　奥澤洋次郎
神無月まだ吉報が届かない　水野　黒兎
僕の方が少し大きいはんぶんこ　髙杉　力
亡母の夢見た朝甘い玉子焼き　中井　萠
キンモクセイ君が生まれた日の記憶　島田　明美
ひらがなになった無防備にもなった　吉道あかね
すきとおるように恋から覚めました　栃尾　奏子
いつか出来たらいいな川柳甲子園　西出　楓楽
眠れない夜がありますかあなたにも　上田ひとみ
貯金は大事貯筋はもっと大事です　大浦　初音
ノンアルのくせにからんでくるのです　中岡千代美
バッカスとライン交換してしまう　栃尾　奏子
爆発をしてます絵手紙のざくろ　荻野　浩子
ガザ地区の阿鼻叫喚はゲルニカだ　鈴木いさお
無くなると寂しい車内販売も　立蔵　信子
旅立ちに友は誘うてくれなんだ　川端　六点
手酌酒あの世で会えるからいいか　奥澤洋次郎
64年胸に住んでた人が逝く　谷口　東風

佳

逢えますかラストダンスのその後も　鴨谷瑠美子
老いの階段登った先もまだこの世　今井万紗子
吊るし柿兄と競ったしちならべ　森田　旅人
ふわりゆるりデイサービスのようなジム　冨永　恭子

人

秋叙勲川柳人が洩れている　川端　一歩

地

地下街へまぎれ老人Aになる　藤井　宏造

天

父さんは泣かない 泣ける場所がない　平井美智子

軸

初霜降りる痛むところはないですか　島田　明美

何があっても川柳は譲らない

新同人紹介

〒689-0405
鳥取市鹿野町鹿野1065
山野（やまの）すみれ
—盛桜・茶子・朱夏推薦

各地柳壇

毎月24日締切・35句以内厳守
掲載は原稿到着順となります。
楷書で誤字のないようにお願いいたします。
編集部

川柳塔打吹（鳥取）　斉尾くにこ報

座っても立っても見映え良い背筋　滋
座る席自然といつも決まってる　富隆
孫達に胡坐組み方指南する　照彦
五百年座ったままの石地蔵　石花菜
友人が肝が座った人で好き　悦子
座っても立っても花のある女性　美知江
座り続け膝痛かろう大仏さま　龍枝
庭の草のびる力にこりごりだ　貴恵
大雨で土砂くずれして家を飲み　久米代
毎朝にコーヒー飲みに来るお客　龍枝
結婚は不向きと知った離婚歴　節子
こりごりをまだ耳たぶがひきずって　美ッ千
日に三度生きてるコールせよと言う　三津子
兄弟が寄ると仏壇気色ばむ　重利
かけ寄ってながめた草とふたりごと　紀子
爺さんも親父も俺も左寄り　完司
どうしても吸い寄せられる縄のれん　紀の治
忍びよるビルの谷まの不況風　重忠
足早にビルの谷間の人の群れ　貴子
カジカ鳴く声に誘われ谷川へ　芳江
谷伝い上流めざす好奇心　大鯰
ビルの谷間で叫びたくなる一人ぼち　みゆき
欲望と希望渦巻くビルの谷　余光
人生の谷間で力試される　芳光
ボンネット蝶々が座る駐車場　くにこ

川柳塔みちのく（青森）　稲見則彦報

詫びる姿なぜか悲しく哀れです　澄子
一泊の留守に拗ねてるプランター　則彦
九十度頭下げれば事が済む　ひとし
照りすぎた夏の太陽詫びなさい　ひろ
ラクビーの勝った負けたと詫びるまい　友二
ごめんねと言えず無口な日が続く　慕情
親不孝詫びて先祖の墓洗う　一呑
詫びながら年に一度の墓の草　隆樹
副流煙吸わせた君にいま詫びる　風来坊
台風は詫びず猛進理不尽に　義明
ほめ上手な親でなかった今詫びる　初枝
ごめんなさい素直に言える生きやすさ　真由美
お詫びする言葉に添える酒一升　重虎
ごめんねと鍋に投入しじみ貝　美鈴
たわい無い会話漸く沁みて秋　のぶよし
早苗田に逆さ岩木が揺れている　英子
早咲きを七桜継ぎ飽きさせず　柳子
にんげんとしての頂点みな違い　龍馬
夕食は家族揃っていた昭和　ふさゑ
しあわせは口にとろけるスチューベン　劦
マスクとりほうれい線を自慢する　孝子
貼り紙コありゃりゃあそこもつぶれたか　霜石
スカーフが緑の風に踊る初夏　洋子
ピンクピンク三年女子はバラ軍団　和香子
沈黙の夏か野菜の芽が出ない　規子
フラスコの胴に映してみた景色　吹喜

和歌山三幸川柳会　西川千鶴報

滝行は夏に良さそうやろうかな　一雄
徘徊じゃないのよ夜のウォーキング　宏枝
辛抱のいい汗をかき夕焼ける　昭枝
滝のような汗を流してボランティア　ひろ子
ついて来た影を木陰で休ませる　俶子
ゆっくりと歩いてこの世見定める　和子
日本に住んでよかった四季がある　保州

がむしゃらに歩きストレス振り払う　菜摘
香煙へゆっくり過去が昇華する　純子
センターを守り終わって倒れ込む　まき
花屋では見ない素朴な草の花　起世子
生活に地の香りする裏通り　敏照
ひと知れず苦労を偲ぶ汗の跡　康則
練習で将来決める汗の量　侃大
来年の汗までかいたこの猛暑　俊介
歩けるだけで幸せ日日感謝する　眞智子
照る日曇る日歩く躓いても歩く　あき子
人生に落差の違う滝がある　悦男
リハビリに喜びを知るまず一歩　和美
マイナスイオン滝の魔力を浴びている　明子
好きなことやると自然に汗が出る　彦弘
傷痕を一気に流す滝の水　知香
もやもやが大きな滝に吸い取られ　よしこ
足が言う歩けるうちに歩こうよ　明宏
お互いに歩幅あわせて散歩する　満喜子
歩こうと元気な足が歌い出す　隆
立ち姿確かに滝に神が居た　幸
汗かいて働く姿美しい　明美
汗みどろ玉音聴いて耐えた飢え　保子
かるがもの親子の歩き時止める　幸彦
わら帽子杖にかぶせて汗拭う　三重子

玉の汗自然の風に高値つけ　高義
情報が一人歩きのユーチューブ　泰博
奥山の滝ごうごうと人恋し　與一
さりげなく席を譲った鼻ピアス　千鶴

川柳さんだ（兵庫）　酒井　健二報

芝の葉の緑がにじむラガーの手　英秋
さといもの葉っぱの露で書く願い　美和子
花も葉も絵にも歌にもなる桜　野薫
天国へ木の葉の切符渡される　千賀子
追憶の彼方に母の針仕事　修平
先輩のフォローもらった初仕事　直子
親の背に子供を預け急く職場　三ツ代
もうご飯作ることにもあきました　ひとみ
どうしても一タス一が一になる　洋次郎
この猛暑酸素マスクのご用意を　俊朗
百三歳苦しい治療お断り　利子
百均が名前変えてと言っている　宗鉄
アレマークつけたドロップ大人気　正和
値引きラベル待って我が家の夕ご飯　おさむ
中身よりラベルが高い化粧品　博
マイナカード私の顔もインプット　一子
酒飲むと癖が悪いと言われてる　宏造
半額のラベルをつけて二度の職　耕治

太田昭選

笑われたなら笑ってやるさ ケセラセラ　のぶよし
騙されていよう幸せなんだから　奏子
読めないが立派な事が書いてある　小鹿
ボロボロのパンツが似合うのも若さ　一歩
適当に息を抜くから生きられる　廣光
死ぬ時は麻酔を打って下さいな　時雄
たが外れ自制の文字を遠く置く　恭子
遅いけど貴方についていく歩幅　精子
花が好き花を愛する人も好き　弘子
ごめんねと言えた私を誉めてやる　ひとみ

佳句地十選（11月号から）

松原寿子選

正論を吐くたびさびていく刀　重利
騙されていよう幸せなんだから　奏子
現役の時より多忙翔んでいる　稲佐岳
黒塗りを当然にした公文書　宏造
愛情に触れて涙が堰を切る　隆彦
万歳は日本一を取ってから　一歩
寄り添うて互いに杖となる余生　武彦
ふくれてる頬っぺた突いて仲直り　耕治
僕にとって君は薬や若返る　朝子
目標が決まり大きくなる歩幅　和織

親不孝石に詫びてももう遅い　徹
生前に詫びたかったと墓の前　喜久子
ごめんなさい老いにもあるの反抗期　弘
詫びてから話始める日本人　雅尚
新米にウインク返す仏の灯　敏夫
最高のお世辞と思う弔辞聞く　哲男
やさしい人は優しい顔になってゆく　廣光
十八年生きて浜飛ぶ千羽鶴　哲夫
鈴虫が鳴いても夏が終わらない　健二

岸和田川柳会（大阪）　石田ひろ子報

テニスから将棋に変わる習い事　香代
秋日和運動会のパレードだ　國代
スポーツの精神親子反骨に　あさ子
ゆったりと齢重ねてまだ現　恵子
ウエストはゴムの緩みに逆らわず　和美
油断してスリにやられたお巡りさん　喜代志
楽しみの年金暮しどこ行った　忠彦
喜びを分かちあいたく末席に　桃代
目に見える油断大敵温暖化　愛子
璃花子さん大病越えて銅メダル　世紀子
孫が来て喜ぶ母は恵比寿様　康則
喜びも悲しみも越え祝米寿　彦弘
世話かけず我が身の事が出来る今　規予子
喜ぶとすぐに泣きだす母でした　勝彦
嬉しいな老いて子からの補聴器を　五十美
美しい町だゴミ箱置いてない　あかね
パソコンとゆったり遊ぶ雨の午後　航太郎
座りたいがヒップサイズが遠慮する　洋二
ふる里の空独り占めただ青い　ダン吉
嫁姑モラル守って仲が良い　明子
ゆったりと牛の背揺られ干支一番　親典
魂を飲み込みガンジスのながれ　ふさゑ
金婚式笑顔いっぱい良い写真　節子
心底で喜びあえる真の友　俊子
辛党の舌が喜ぶ今年酒　義泰
親としてのモラル問いたい子の悲惨　ひろ子

竹原川柳会（広島）　古田比呂子報

あっさりが好き人間も料理もね　宣之
あっさりと本音をさらす酒の癖　敬子
あっさりとタマが奪った妻の膝　和子
苦労したナンプレあっさり解いた孫　京子
あっさりがいいねで五十年夫婦　蘭幸
懐かしく見入る写真の片づかず　弘子
人生の歩みを見てる古写真　栄香
一枚の写真昭和に夢あふれ　白狐
テレビラジオみんな暑いと言ってるよ　笑子
汗しても実らぬことが続く日々　夢香
最高の暑さを記録令和五年　比呂子
扇風機付きのチョッキで配達夫　輝恵
この猛暑墓地に造花が咲き誇る　慶子
暑い暑いとトマトきゅうりもつぶやいた　千代美
次世代に引き継ぐ八月の記憶　昭紀
特売で最後の一個それも運　歩美
シコリ解け今日を笑い合う幸せ　厚子
ひと山ふた山と無事に越えて秋　幸子
祝米寿子孫曾孫勢揃い　初音
自慢する声は大きくなってくる　貞子
秋の夜まったりアイス食べてます　史子
妹がローソクふーってけせれたよ　小三　沙弥
ちかのねぞうどれだけわるいか見てみたい　小二　央
ふねにのってうさぎにあいにいく　五歳　すず

川柳塔鹿野みか月（鳥取）福西　茶子報

エリンギとアスパラ僕のエネルギー　ゆたか
居るだけでピリピリしてた嫁姑　弘子
謝って済むはずもない汚染水　楓花
噛んだのか判らぬままに飲むナメコ　茶子

老いてなおピリピリ感を忘れない　草文
松茸山囲いの中は玉手箱　静恵
ピリピリを感じたいから君のそば　すみれ
内緒です家で松茸作れます　文道
ベルよりもやっぱり別れは銅鑼の音　恒
土のなか犬が頼りのポルチーニ　小鹿
トイレ中玄関のベル急きたてる　重忠
本番を前にピリピリ近寄れず　弘六
国民に謝りますとマイナンバー　瑞子
くどくどと謝ったあと舌を出す　一平
おにぎりはやっぱり辛子明太子　宏章
年の瀬のジングルベルに活もらう　孝子
がむしゃらに走り謝る事ばかり　紫陽
レトルトの松茸ご飯秋香る　白周
蟹提げて謝りにゆく子のけんか　蟹郎
食欲はモグラと同じくらいある　完司
顔パックピリピリ剥がす夜の顔　延子
椎茸のステーキ前に酒一杯　大鯰

ふうもん吟社（鳥取）　**山下凱柳報**

ご飯皿ねぶって犬は礼つくす　紫陽
醤油餅食べた後でも皿ねぶる　頼太
ねぶるのはみっともないけ止めんさい　凱柳
指ねぶり風向き読んでいる策士　無限
（ねぶる＝因幡方言で舐める）

物価高財布も人もやせ細り　紀美江
心臓のアラームが鳴る炎天下　ぬりこ
婿養子さん付けで呼ぶ妻の名に　亨
歓声の「アレ」が波打つ甲子園　毅
甘酸っぱいおんなの頃もありました　振作
反骨の首が棚田に落ちていた　拓治
七輪で焼いたサンマよ亡き母よ　みつ子
逆光の中で真実だけが浮く　美知江
米寿まで我に尽くして呉れた影　秋月
六十年尽くし尽くしたダイヤ婚　壽峰
寄付の分だけは神でも尽くすだろう　紘一
あらゆる薬尽くしてみたが効かなんだ　蟹郎
総理様国民の為尽くそうよ　勲章
天命に尽くす定めの地に生きる　由紀女
老老を尽くして覗く万華鏡　賢悟
拾っても尽きぬ砂丘の粗大ごみ　一平
年金の目減り歩幅を喰い尽くす　稲佐岳
虫の声酷暑が続き途絶えがち　勝
そわそわとしだした秋だ腹の虫　龍江
泣き虫も大人になれば強い母　厚子
公約は玉虫色の空手形　美知恵
夢の中泣き虫だった僕がいた　昌鼓
腹の虫収まらないのが平和論　金祥
虫干しをしよう心の窓開けて　真理子

交流はＳＮＳと言う気楽　茶人
マスク取り交流する村おこし　(門)千代
老若男女笑顔持ち寄るサロン会　哲子
楽しみは鴨と挨拶ウォーキング　回春子
交流をずっと信じている港　舞
交流の宴訛りのハーモニー　欣之
交流も消えて過疎地はがらんどう　みゆき

川柳茶ばしら（愛知）　**金子美千代報**

酔っぱらい地球が揺れる千鳥足　三樹夫
目標はいつになっても高い壁　まみ子
生きてればいつでも君の壁になる　かつ子
80の壁をぴょんと飛び越えたい　美千代

倉吉川柳会（鳥取）　**大羽雄大報**

プライドがあって人間美しい　酔芙蓉
舞台裏コロナが入り禁固刑　照彦
チビゆえに冷やかされて涙した　紀美恵
プライドをプライドがぶつかる甲子園　鬼一
プライドを捨ててしまった三日酔い　重忠
よく休む広場の時計なまけもの　風露
初舞台何をしたのか忘れたな　さちこ
空豆のご飯にしょうか塩ゆでか　恵子
古くても毎日元気チクタクと　智恵子

失言へ風は冷たい音で鳴る　日出子
清水の舞台なら何度も立った　けいこ
プライドが僕の余生の重荷なる　凱柳
選ばれてプライド自覚自信持ち　大鯰
今日の舞台川柳会で映えている　麦青
高校で初めてもらう腕時計　道春
産声を上げ人生の初舞台　由紀子
飲兵衛のプライド酒は残さない　完司
プライドに行動の舵決められる　雄大

川柳花の輪（大阪）　**川本　信子報**

おだやかな母が見通す子の心　やすの
見通しを立てどっしりと動かない　亜成
針の穴見通すだけで疲れ果て　みち
大物は泰然小物あたふたと　笑子
太公望話段々大物に　泰子
楽天家大物になる器かも　愛子
自らを大物と呼ぶ小賢しさ　正太郎
頭の中整理するには書き出して　順子
ぐちゃぐちゃの机の上は僕の城　和織
大物も酔って泣きたい夜もある　信子

きゃらぼく川柳会（鳥取）**後藤　宏之報**

暑くても熱燗を呑む粋な人　ひろし
祝意より欲しい敬老祝い金　紀の治
お疲れさんたばこしましょうお茶どうぞ　久直
太陽に殺人罪で逮捕状　雨奇
ほどほどの暮らし隣家と仲が良い　令位子
母からの野菜で元気百倍だ　美穂
断捨離にエイと気合を入れている　俊久
留学生きれいな言葉使っている　美緒
退き際を思い今夜も寝付けない　宣子
久し振り名前忘れて笑顔です　菜々
投句する郵便ポスト遠くなる　治代
歩くのがつらくなりだす足と腰　恵子
暇つぶし少しいたずらでもするか　宏之

川柳塔すみよし（大阪）　**田中ゆみ子報**

この人に賭けた人生悔いはない　いさお
ちょっとからちょっとへ賭けの蟻地獄　寿之
合掌の心に鬼は棲みつかぬ　宏造
男と女心変わりの秋の空　克己
内孫が出来て紫煙と縁を切る　五月
一生を賭けて結婚今離婚　舞夢
情熱を賭けた仕事がくれた夢　大子
小さい秋見つけに足を延ばしてる　とみ子
エンディングノート心して書くありがとう　万紗子
一生を賭ける仕事に出会う幸　アヤ
ケチな僕心ばかりという便利　篤
だんまりを貫き通す妻の賭け　民子
母の涙こころの隅にいつもある　一歩
心ない言葉心を傷つける　智子
難民の心が痛む子の憂い　満作
国連へゼレンスキーの心意気　里子
ざわついた心を癒すソロキャンプ　憲彦
子の行く末案じて止まぬ親心　福貴子
逆転に賭けるラガーの底力　ふりこ
訳あって長い祈りをする社　まつお
この人に賭けた人生良しとする　志津子
口下手で感謝の心通じない　さくら
賭け事は一切しない負けるから　勝弘
爺婆がわくわくしてる同窓会　芳香
助け合う人の心に道ひらく　小枝子
親心元気でいるか食べてるか　萠
心から愛した日々は二・三年　蕉子
めっちゃ元気煙たい人と言われてる　ゆみ子
青春が同窓会で蘇る　裕之
精魂を賭けた脱サラ今がある　敏明
敬老日届いた箱を振ってみる　満知子
古い日記燃やせばピンクの煙立つ　シマ子
人生を賭ける男を間違えた　朝子
ごく稀に綺麗と言われ落ち着かず　真桜子

遠足のあのワクワクが懐かしい　直子

プラザ川柳（大阪）　藤塚　克三報

エキスポは算段つかず正念場　克三
歌体操笑い声聞く開講日　園子
譲り合い遠慮がすぎてババ掴む　政夫
若者に席を譲られ齢を知る　悦夫
昼休みやかんの水で書くコート　景子
やかんの水で渦巻き描き目が回る　和代
譲り合う席に割り込む第三者　一彌
笛吹きケトル敬老の日のプレゼント　清乃
ギブアンドテイク思えばギブばかり　弘光
譲られて素直に会釈どっこいしょ　正子
禅譲の積りの秘書は馬鹿息子　淳司

わかやま吟社　松原　寿子報

たましいの欠片を探す葬儀場　大輪
たましいを丸洗いする武者修行　紀子
包み込むように諭され立ち直る　あきこ
効果などなくてもわたくしを通す　夕胡
能書き通り即効怖いくすり　俶子
友達の効果じわじわ温い嘘　寿子
ニンニクの臭い夏バテ遠ざける　小雪
一通の便りに心動かされ　真弓

盆暮れの効果なかった付け届け　敦巳
回転に備えわたしを強くする　知香
寝返りをうつ度ヒツジ増えていく　佳子
間一髪くるり躱していた安堵　冨美子
当選後そっとくるりと背を向けた　八茶
待ちぼうけ日傘くるりと雑踏へ　精子
先行きもくるり反転火の車　信勝
今日の顔油断がないかチェックする　よしこ
新入生お局さんにチェックされ　節子
運転の前に必ず免許証　光

南大阪川柳会　松岡　篤報

うっかりの母ちゃんしっかり貯めてはる　ばっは
顔洗うしっかり眼鏡掛けたまま　昌紀
あらららら隣のチャイム鳴らしてる　篤
情けないうっかり押した削除キー　勝弘
ブレーキとアクセル違え肝冷やす　国和
うっかりと押しちゃダメだよ核ボタン　力
チリに勝って日章旗がひらめいた　ルイ子
ひらめきが失せた米寿の脳細胞　柳右子
ひらめいた妙手に一つ歩が足りぬ　一歩
午後の陽射し羽根ひらめかせ舞うアゲハ　蟻日路
ひらめいたレシピが踊るフライパン　志華子
直感で決めて良かった帯の色　三智

ビビビッと感じた人は僕の妻　博
おとぼけが過ぎて真面目も疑われ　大子
とぼけても隠せぬ腹が迫り出した　克己
ニコニコととぼけていると平和です　峰子
とぼけても証拠のメールたんとある　実
とぼけた奴だ僕の財布で梯子酒　亜成
結婚をとぼけられてる薬指　まゆみ
かまととと言われたことも今昔　紫
ゆっくりとお経唱える時が好き　加お里
ゆっくりと仮面を脱いで素に戻る　常男
じらすよに名残り惜しげに日が沈む　蕉子
青信号見ても急がん老いの足　コスモス
ゆっくりと喋りますけど呆けてない　志津子
ゆっくりと先延ばしするえんま様　弘子
生前葬ゆっくりせいと誰も来ず　敏治
嫁がない娘にもゆっくり白髪ふえ　海音
雲を追い秋を探しに行くところ　千鶴子
人間の業を背負って老いを行く　いさお
毎日を咲く朝顔に貰う活　柳伸
リングはずし次の恋でも探そうか　一心
病む妻へ日本海溝ほどの愛　東風
初恋の欠片探しに同窓会　双葉
スーパーとコンビニがわがテリトリー　楓楽

長柳会（大阪）　大島ともこ報

目星つけ手は打ってある形見分け　ともこ
毎日の薬が俺の命綱　靖博
同世代阿吽の空気感じ合う　ヒロ
大阪のオバチャン居たらすぐ分かる　孝
ハグされて育む愛に児の歩み　澄子
奥河内訪ねてみるも留守多し　規之
ふりかける魔法の言葉「ありがとう」　純風
秘密抱えやさしくなって行く私　ふみ
惨敗のくやし涙は明日の糧　克巳
穴あき飴見通しよくてアレを呼ぶ　おくみ
言うことを聞かぬトップが二人いる　正博
頬杖でしずく数える老いふたり　淳司
ポタポタと女の武器に負けいくさ　光弘
上空を北のミサイル飛ぶ脅威　隆彦
お気軽な言葉一つで首が飛ぶ　和子
背負う物無くて気軽に暮らす日々　登美子
還暦を越えてまだまだ上り坂　たけし
ばあちゃんトマトに砂糖ひと口だけ　佳子
酒抜きで呑んべの友の通夜の席　くにお
気軽にと始めた趣味の虜なる　福子
この椅子は今も亡夫の指定席　正美
想い出が燃えて悲しいマウイ島　由夏
島影が見えてときめく里帰り　孝代
日本列島虎視眈眈と狙われる　幸子

川柳塔さかい（大阪）　内藤憲彦報

ルール無視ロシアも北も中国も　いさお
その時の気分で母のマイルール　禮子
まずビール酎でつないで酒ワイン　敏治
ピンチにも笑顔忘れぬマイルール　憲彦
洗濯機シャツとティッシュが回ってる　蒴
杜の機密酔いに紛れてついホロリ　清
フィッシングメール騙されつい返事　憲
お月さま薬のんだか知りません　(西)桂子
子育てをああもこうもと振り返る　満知子
重荷にはならぬ笑顔は持ち歩く　(米)俶子
社会面今日も気持ちが重くなる　有生
ひきこもり重くて開かぬ心の戸　恵子
嫁はんがオレの体重超えよった　義明
両親の期待の重い塾鞄　ひろ子
人付き合いは重いものだと今になり　さくら
重い罰科しても命戻らない　世紀子
抱き上げた介護の妻の軽いこと　進
気の重い国にぐるりと囲まれる　時雄
しまったと気付くうちならキズ軽い　富夫
朝帰り月下美人は咲き終り　和夫
朝帰りシャツに口紅ちょっとつき　(田)勝弘
プーチンの誤算欧米の結束　志津子
平服でどうぞと書いてあったのに　玄也
臍を噛む吐いた言葉は戻せない　恭子
面接日朝寝坊して棒に振る　満作
秋風におでん肴に君と飲む　美津子
秋虫のオーケストラに聞き惚れる　(江)勝弘
秋雨の起き抜け散歩桐一葉　素頓馬
アレに酔う大阪の街狂喜する　(友)淑子
あれそれで終わる夫婦の昨日今日　万紗子
温かく大きな心の君頼る　五月
ありがとうお互い様と気付く愛　(中)佳子

城北川柳会（大阪）　近藤正報

もう寝ようなるようにしかなりません　千恵子
絵具箱明日へ生きる色を選り　野鶴
好きすぎてぎゅっと束縛したくなる　朝子
ふるさとの頂点に居る父と母　満知子
四六時中ヒヤリハットの交差点　洋志
崖っぷち落ちる寸前目が覚める　賢子
お祝いに嬉しさも入れ熨斗をかけ　杁香
コロナウイルス次の変異を思案中　博
草ぬいてけじめの里の墓じまい　久仁雄
病院は好きじゃないけどちゃんと行く　篤

優勝は好きだがビールかけ嫌い　こみつ
噂した人が後ろにいてドキリ　宏造
駆けこんで席を取ったら優先車　実
昔の輝く亡母の里自慢　万紗子
好きなもの集めていたらごみの山　峰子
スーパーもバスもなくなる里の秋　章
思案しても子等は自由に飛んで行く　榮子
図星です痛い所をえぐられる　廣子
米が好き瑞穂の国に生きる幸　福貴子
里山を荒らし届いたブーメラン　遊子
デート日に父親連れて現れる　正彦
カタツムリバックできずに思案する　捷二
酒好きは自動運転待ってます　宗鉄
逆流へ鮭はふる里忘れない　一歩
昼下がりおしゃべり好きのティールーム　繁子
家計簿と思案している熨斗袋　郁夫
ガラス越し声をだされず好きと書く　五月
行き詰まり思案の挙句端歩つく　満作
補聴器をはずせば小言も心地よい　廣光
なるようになるさと割切れず悩む　かずお
仏壇に月見団子と缶ビール　隆浩
飢えた子が半鐘鳴らす戦の愚　和夫
考えても思い出せないパスワード　黒兎
月光でどっきりさせる鬼瓦　志華子
お好きにと突き放されて椅子がない　恭子

川柳あまがさき（兵庫）　大浦　初音報

わからんのスキスキビーム出してんの　厚江
バーゲンと聞けば浮き立つ主婦の性　照代
気落ちした心を友に励まされ　眞理子
いい人だ今日もニコニコ座ってる　廣光
やっと秋タオルケットを取り替える　純
永く生きた爺のヒントは味がある　菊江
エンドロール席を立てずにいる二人　和夫
さつまいもほおばる秋の日曜日　雪菜
プロローグ見たか多弁な彼の口　真桜子
ヒントないパズルのような世を生きる　龍
「三秒ルール」舐めてた飴をすぐ拾う　英坊
褒めるとこ探して拾う管理職　英秋
雑音まで拾う補聴器箱仕舞う　(入)修平
インボイスよく分からんが反対と　宗鉄
ドクターが妻と一緒に来いという　楓華
まさか一夜で夏から冬へ初雪が　朝子
左手で鍵盤たたくピアニスト　紀華
女房のへソクリ億がつくらしい　紀惠
我が家にもやっぱり来たか認知症　祐康
核ゼロを夢で終わらせたくはない　宏造
六十年飲み会つづく同期会　勝弘
相棒は無口なとこがよいところ　耕治
飲んべえで飲み友ならばすぐに出来　義明
会いたいネばかりで友は遠くいる　初音
友は皆仲良い順に消えていく　りこ
友人は作らないんだできるんだ　和子
国民みんな国の借金九百万　一歩
吉野家の肉はすき家が仕入れ先　隆一
捨てたのに拾われたなら惜しくなる　新録

川柳de遊ぼう会（大阪）　石田孝純報

ワシャ蝉かジイジジイジとうるさい児　てるひこ
きっちりと消費税乗せお年玉　晋一
何をして遊ぼうあと少し此の世　美智子
なにもせずただ聴いているピアノ曲　幸徳
ほぼ他人婿が呼び捨て娘の名前　次郎
かさぶたが剥がれる頃に出る涙　(阪)恵子
髪の毛は毎月カット一センチ　康雄
七回目次は有料もういいか　はるみ
半額にきっちり儲け乗せてます　雅美
きっちりと返したはずが足らぬ顔　和男
夕ごはん何でもいいよ旨いなら　よしみ
昨日よりちょっとハッピー葱刻む　(岡)恵子
ダシの効いた蕎麦で胃袋つかまえた　のり子
三度のめし決めた時間に座る父　喜美子

物忘れ顔を見合わせ苦笑い　爽也
洗いたてパジャマ何とも心地よい　満知子
思い出を波にした八月二日　孝純

ほたる川柳同好会（大阪）水野　黒兎報

林君も森君も居た友の輪に　則彦
森林浴で老いた頭を活性化　奈津子
デジタルの森で迷っているわたし　宏造
地震国なのにタワマン林立し　勝弘
すたれゆく林業に森放置され　契子
行く道をまだまだ迷う林住期　黒兎
さあ飲むぞ長い挨拶すんだから　篤
さあ買うぞ「アレ」の特売トラグッズ　一弥
医者の出すビタミン飲んでさあやるか　正子
さあ大変無駄な買い物火の車　順子
何するもさあと掛け声勢つけ　直子
コンビニの中を徘徊猛暑日は　蟻日路
「お風呂が沸きました」美女に急かされる　春代

川柳藤井寺（大阪）　鈴木いさお報

三日後に筋肉痛がやってくる　満知子
時間カネ糸目をつけず辺野古基地　勝久
運動のつもりでしてる風呂そうじ　かずお
子育てのじわじわ染みる親の恩　ひろ子
哀しいな家事も手抜きの日々が増え　喜代子
免許返納歩数が増えて秋の土手　志津子
戦争がじわじわ地球狂わせる　正義
ガム噛んでしゃべって脳を鍛えてる　みつこ
子を盾にじわじわと妻強くなる　瑠美子
フレイルを防ぐ軽めのスクワット　満作
一周忌遺言じわじわ噛みしめる　亜成
お散歩を徘徊なんて間違われ　ちづる
万国旗手をつなぎ合う運動会　比呂志
たっぷりの運動してる医者通い　さくら
階段をあがっただけで褒められた　憲彦
戦前にじわじわ迫る恐ろしさ　一歩
指折りの軍事大国あと少し　ダン吉
漢方はすぐには効かぬじわじわと　いさお

はびきの市民川柳会（大阪）藤原　大子報

コック唸るクーラー唸るガス唸る　冬のト
渡良瀬の空にぷかりと熱気球　ひとみ
母ちゃんは熱があっても飯を炊く　さくら
愛国の熱が支えるウクライナ　憲彦
青空に再会誓い手をあげる　千鶴子
青筋を立てて怒った若かった　瑠美子
青物がメチャメチャ高くなっている　勝弘
ウクライナいつ来るのかな青い鳥　一歩
健康をもらっています青魚　みつこ
故郷の青い海辺が懐かしい　フジ
青い鳥探しあぐねてはや傘寿　勝久
露草の可憐な青に癒される　ちづる
転ぶから走らないでと老い仲間　理恵
走りの秋刀魚もはや庶民に届かない　こみつ
北風が吹くと走ってみたくなる　扶美代
バーゲンのチラシを持って走り込む　一文
福男背負いきれない福もらい　庸郷
走ること忘れていたら明日こない　かつ美
ライバルはいつでも前を走ってる　宏造
ロケットの緊張走る今朝もまた　正義
投げる打つ走る翔平三刀流　いさお
そら走れステーキハウス五割引　洋一
バーゲン場素早く目だけ走らせる　大子
パインアメなめつつアレへまっしぐら　久仁雄
走ったらこけるのんびりいく余生　まつお
色々な彩る秋を楽しもう　雄太
もう少し泣いてお話ししてみたい　専平

西宮きたぐち（兵庫）　緒方美津子報

優勝セール早過ぎ準備足りません　宗鉄
曾孫来るこのしあわせな盆送り　迪
飽食へいつもどこかがかったるい　野靏

じっくりと手紙にこめた胸の内　敦子
歳相応役目はあると生きている　千賀子
ドーナツの穴も役割り果たしてる　ゆきみ
被災地に真心配るボランティア　武彦
追伸の本音ウフフと笑い出す　紀乃
廻る寿司ゆっくり食べる気になれぬ　富次
配給の米で育って早や八十路　野薫
跡継いでやっと揉み手が板につき　敏子
稚児の笑み仕合せ配るキューピット　恵美子
メールより手紙が心和ませる　良種
こっそりと小窓の秋を貰ってる　靖夫
忘れたっていいよ私は風だもの　ひとみ
父ちゃんの麦わら帽子きた案山子　ばっは
心配りできる爺ちゃん愛される　廣光
もうすっかり老婆だろうなかぐや姫　緑
プレイオフ余計な事は止めましょう　新録
年老いてすっかり丸くなった父　宏
放流の風評流し邪魔してる　邦男
紫陽花もすっかり白くなって秋　隆一
便利さに狂ってしまっている地球　洋次郎
ごめんよな蝉の亡骸踏んじゃった　勝弘
介護終え隠れて食べるあずきバー　利子
惚れて好きに姿見るたび出る元気　和宏
森林火災見る影もない焼け跡に　義幸
三陸の白砂青松堤防に　盛夫
ミサイルへテープのように遺憾の意　宏造
年数でもらう賞状すこし邪魔　和夫
コート着て届く新聞嵐の日　美津子

豊中もくせい川柳会（大阪）初代　正彦報

鍛えてるワールドカップのアスリート　多美子
お昼寝のもみじの手からりんご落ち　英三
脳トレで頭脳鍛えてボケ防止　晴子
裏の意味あって勘ぐる世は辛い　時子
もずのため残した柿は陽にまぶし　武彦
味付けが違う夫婦で半世紀　健二
息してたら勝手に卒寿迎えてた　真理子
子離れを先送りしている賢母　北舟
難題に私の心鍛えられ　むべ
足腰も心も鍛え遍路笠　敏昭
ウォーキング衰えさせぬ足と腰　憲央
秋の空五体鍛える遊歩道　ヨシヱ
これからは追われる立場聡太の座　野靏
何故かしら湧き出す力バナナ食べ　義明
鍛え上げて最前線に送り込む　肇
還暦のわたし完熟ラ・フランス　哲男
フランスディナー最後を飾るマスカット　(福)正彦
子や孫へ残す言葉を模索中　満作
足腰を鍛えてからの再起動　千鶴子
面白いのはこれからだと気を持たす　英旺
プイと立ち部屋に鍵する反抗期　武人
遅咲きの花をこっそり咲かせたい　美津子
百歳にまだこれからが待っている　いさお
妻が出て行ったこれからどうしよう　和織
これからは花はいらぬと墓の父　一歩
姑のおかげでイジメ何のその　眞澄
老いた今こころ鍛えるもの欲しい　(岩)玲子
楽しいのはこれまでよりもこれからだ　則彦
顔認証で全て完結近未来　こみつ
コトコトと母の手間隙渋皮煮　宏造
戦争より地球を守ることが先　勝弘
悔しいと思えたならば大丈夫　ひとみ
探しても戦無い世が見つからぬ　黒兎
夕映えが明日の夢を膨らます　洋志
気晴らしに舞いませんかと赤トンボ　(初)正彦

六甲川柳会　糀谷　和郎報

避難所へ希望運んだボランティア　狸月
もう少し派手に生きたらよかったな　忠志
虫の音とコラボしている大イビキ　崇史
自分には嘘をつかずに楽に生き　次郎
何よりも守りたいのは子の未来　廣光

ぐらぐらと煮て夏乗り越えたゴーヤの茶　迪
追伸と書いてペン先進まない　利恵子
馬肥えて財布が痩せる神無月　正美
屋台骨ぐらぐらするから抜くと言う　栄
正論は襟を正して聞き無言　和宏
百才と思えぬ軽い足運び　千賀子
ウオーキング格好つけて足運び　克美
どこまでもわたしを生きるさらさらと　ヨシヱ
秋風にうきうきしてるスニーカー　利子
普段着のやさしさのまま母が逝く　すみ子
秋の冷えもう妻の手が荒れている　武彦
君と居るそれだけでいい秋の中　ひとみ
派手着たがどうも他人になったよう　洋次郎
これ以上派手なものない金メダル　道子
目薬を差すとき口も開けてます　和郎
よく揺れる橋の向こうで妻が待つ　和夫
老い二人せめて着メロ派手にする　祐一
五千円ネコババするか届けるか　隆浩
老いの身に残った奥歯動き出す　宏
法隆寺震度5かわす心柱　盛夫
揺れている足場一から組み直す　恭子
万全の防備を笑う大自然　美恵子
老いの生きざまぐらぐらせずにあるがまま　弘
どこまでも虹を運んでまいります　恵

派手好きの胸底に棲む寂しんぼ　緑
ぐらぐらの奥歯と遊ぶ寿司アワビ　義博
マスク取り薄い化粧も派手に見え　禎之
骨董品心ぐらぐら迷わせる　芳江
美輪明宏志茂田景樹にアパ社長　敦子
花組の緞帳めくる夢の風　澄雄

翠洋会（大阪）　原田すみ子報

白寿過ぎ日々研鑽とペンを取る　行久
ゆったりと大空泳ぐいわし雲　満作
老いた身にコミックまるで別世界　和夫
文楽人形浪速の民に研かれる　敬子
正直に言えば揉めそう惚けとく　大子
ソーメンからキツネうどんに変わる秋　善之
鏡の中母そっくりの私いる　江里子
万博が金食い虫になっていく　眞澄
人生も歴史も学ぶコミック書　蕉子
遺伝子が途切れてしまうひとり者　定生
遺伝子操作神へ冒涜ほかならず　楓楽
AIもDNAには追いつけず　恭昌
プーチンさん貴方は悪魔の申し子か　恵美子
先々で忘れ増えてくエコバッグ　弘美
青い柚やせた秋刀魚にしたたらす　理恵
鈴虫もうろたえてます温暖化　志華子

コミック本山と残して子は下宿　げんえい
打ち解ける心の隙間空けておく　昭
スパイスに出来ぬストレスあかんたれ　ふりこ
待合室老い百態を見ています　富子
親からの遺伝子人情温かい　弘子
サザエさん生きた昭和が目の当たり　すみ子

川柳塔まつえ吟社（島根）清水美智子報

存在感示さなくてもここにいる　塩子
あの人の軽さが重くのしかかる　アントン
ジャンピング昨日の笑いプラスして　紀子
「大丈夫」弾んだ声でほっとする　豊仙
指切りは軽い埃と雲隠れ　とも子
掃除する言葉のホコリ溜まってる　青帆
焼きナスの皮をむかれてからの品　弘充
軽石と漬物石を持ってます　知恵子
よく弾む諭吉出掛けて帰らない　雪代
新品の靴にやられて歩けない　あきら
軽く言ってのけるトマホーク配備　徳利
残酷なことをさらりと言った品　小鹿
国会の品位疑う乱れヤジ　ビル
行間に漂う品格の息吹き　美智子
上品な態度心拍数上がる　久枝
品よくてリリカルな愛募集中　孝子

金曜の軽さが月曜に欲しい　芳山
下駄弾み浴衣の金魚飛びはねて　ゆき子

川柳塔なら　大久保眞澄報

ブーイング無視して我はマイペース　げんえい
辺野古沖杭は打たさぬブーイング　比呂志
プーチンへ親指下に向けている　盛隆
沖縄に基地押しつけて平和ボケ　貫一
そんな顔出さんといてとブーイング　勝弘
最高裁判事についた×の数　史郎
ドライバーにあぜん路地裏のスピード　昌代
農相のあぜんとさせた「汚染水」　優
気にいらん奴は殺せとプーチン氏　和郎
物価高開いた口さえ塞がらず　昭
強盗もアメリカ流の凶暴さ　一歩
終電車若い二人に毒される　恭昌
南瓜を切らずに炊いたお嬢さん　武人
悪友もじわじわ減って日向ぼこ　良岩
温暖化じわじわ変異する地球　満作
十八年待った喜びじわじわと　和夫
青い地球じわじわあせていく予感　富子
じわじわと日にち薬の回復期　朝子
秋の恋じわじわ私染められる　ふりこ
棘一つ日毎に痛み増してくる　江里子
少しずつ草書になって生き延びる　敬介
のぞいたらあかん言うからのぞきたい　理恵
ピーポーが鳴るとあちこち覗く窓　則彦
孫の部屋覗くと宇宙人がいた　ひろ子
結界の覗き見をする好奇心　寿之
週刊誌こわごわ覗く性加害　定生
至る所監視カメラが顔のぞく　栄子
魅力的ウィットのぞく語り口　すみえ
長湯すると妻が覗きにやってくる　敬子
愛犬がのぞいた窓に涙する　かずえ
ルーペ掛け下界を覗く閻魔様　崇明
バーゲンを覗くだけよが2枚買う　じゅん子
心眼でのぞく女の万華鏡　まさじ
関係者除くと疎ら発表会　行久
秘する程覗きたくなる人の性　すみれ

川柳ねやがわ（大阪）　籠島恵子報

何年も使わないでも捨てられぬ　カズユキ
揉め事の後片づけにひと苦労　彰一
片付けた端切れが惜しい膝小僧　かすみ
遺言書下書き以来進まない　篤
昭和生まれ勿体ないが付き纏う　信子
共白髪おたがい様の間柄　千鶴子
あの時のあの一言に救われた　銀杏
父母の恩今まだ高い骨密度　ルイ子
恩人だったいちばん煙たかった人　亜成
受けた恩繋ぐと数珠が出来上がる　郁夫
城崎の外湯が旅情掻きたてる　祥昭
幸せと思う掛流し温泉　勝弘
甥っ子がたまには来いと言う里湯　鈍甲
満点の星と戯むる露天風呂　壽峰
温泉で心も四季の色になる　常男
生きている実感湯上りのビール　いさお
戸を叩く音がするよな午前二時　秀雄
朝の空気秋の気配を漂わす　かずお
然りげなく首筋を這う小さい秋　欣之
辛いとき励ます母の居る気配　賢子
妻無口何か決意のある気配　和織
妻だけは反対せんと思うたに　泰子
気がつけば昭和の歌を唄ってる　高志
夏越えた命やれやれ深呼吸　朝子
望みたい火傷残さぬ終り方　正靖
路地裏のルールは今も変わらない　武人
終活した母に秋色服を買う　千賀
大事なこと先にしてから気を抜こう　順子
失恋の痛手を胸に返し針　高鷲
節約の美学手作り上手です　后子
異常なし今日一日を句で閉じる　一歩

あの時の「ハイ」をしまったなと悔やむ　恵子

翠洋会（大阪）（前月分）原田すみ子報

昭和の子分けっこしながら育ってた　理恵
人生の選択悩む分かれ道　弘美
苦虫を噛り世間の鬼と会う　昭
戦争の巻き添え子等が痛ましい　志華子
ゴミの分別きっちり守り恙無い　桃花
ロケットの発射スイッチ押したいね　舞夢
世界大戦まさか起きぬと言い切れぬ　楓楽
免許返納辞職するよりパワー要る　大子
葬儀代払えば分ける金も無し　蕉子
秋匂うだけど残暑がまとい付く　ふりこ
始発駅常連さんの指定席　行久
日本発押してはならぬ核ボタン　満作
大台まじか施設の噂耳が寄る　敬子
分け隔てなく育てた次男やんちゃする　江里子
内閣改造見切り発車の縄電車　恭昌
リハビリは苦手なことで責められる　げんえい
食い意地が張ってるうちは大丈夫　眞澄
高齢者一か八かの脱マスク　定生
アレメンバー孫の婿にと夢の夢　恵美子
泣き声で体の変化聞き分ける　弘子
苦手の人へ殊更笑う不自然さ　すみ子

第20回川柳『信濃川』新春誌上大会

新作２句詠（一人一組、定形のリズム）
兼題と選者　「あい」
相田柳峰　吉崎柳歩　平井美智子
前田楓花　坂本加代　大内せつ子
永見心咲　　ほか１３名の選者
締　切　2024年１月31日（消印有効）
投句料　1000円（現金または郵便小為替）
90歳以上の方は無料（証明書不要）
投句用紙は自由 発表誌は３月10日
賞　コシヒカリなど
投句先　〒940-2042
長岡市宮本町３-2433
相田柳峰宛　電話 0258-46-5999

「川柳みるふぃーゆ」第２回全国誌上大会

課　題　二句詠　二人選　参加吟一句
「　風　」（表現自由）
高瀬　霜石・平井美智子選
「ソフト」　新家　完司・佐瀬　貴子選
「何でもかんでも」
佐藤　孔亮・真島久美子選
印象吟　津田　暹・中嶋　常葉選
締　切　令和６年２月20日（火）消印有効
発表会　令和６年３月16日（土）13時開場
船橋中央公民館
投句料　１口千円（切手不可）何口でも可
大会誌進呈
入　賞　特選・準特選他多数
大　賞　みるふぃーゆ大賞他に船橋の
特産品贈呈
応　募　投句用紙（コピー・便箋可）
封筒に投句料＋〒・住所・氏名
（ふりがな）
投句先・問合せ　〒274-0067
船橋市大穴南 1-19-6　島根写太
090-8509-4160（ショートメール可）

「川柳もやい傘」第１５０回 記念誌上大会

題と選者
「重ねる」　柴田　桂子　選
「長生き」　澤井　敏治　選
「懸　命」　内藤　憲彦　選
「悔しい」　銭谷まさひろ　選
「たまご」　居谷真理子　選
自由吟　吉道航太郎　選
各題２句
締　切　令和６年１月24日（水）正午必着
参加費　無料
＊投句先のメールアドレス
山本進　ssm.moyaigasa@gmail.com
＊メールの題名に「第１５０回記念誌上大会への投句」とご記入ください。投句はメールのみで、ご家族やご友人からのメーでもＯＫです。
＊結果は１月31日までに順次発表します（賞はありません）。

柳界展望

★グリーンピース創立10周年記念大会。参加者153名。同人成績。

天位　斉尾くにこ

地へ埋める最終章で咲くように

天位　永見　心咲

確かかと念を押される水海月

★第46回鳥取県川柳大会。参加者121名。同人成績。

鳥取県知事賞　原　徳利

この星が好きで毎日ゴミ拾う

鳥取県議会議長賞　田賀八千代

騙されてあげます花が咲くまでは

鳥取市長賞　伊塚美枝子

スプーンの上でブルブルゆれる幸

新日本海新聞者賞　前田　楓花

幸せっておいしいもので出来ている

川柳作家協会賞　斉尾くにこ

巻き舌のテラノザウルス連れ帰る

実行委員長賞　永見　心咲

事なかれ主義ですｄボタンの青

★第17回「ふるさと」川柳。参加者400名499口。同人・誌友成績。

秀句　郷田　みや

お日様が味方をひとり連れてくる

秀句　新家　完司

カニカマが遂に大海原の味

秀句　竹村紀の治

大騒ぎした夜独り鮭茶漬け

★第57回東大阪市民文化祭参加　第50回川柳大会。参加者49名。同人成績。

市長賞　岩佐ダン吉

言い分はあろうそれでも聞きなさい

★第75回西日本川柳誌上大会。参加者247名。同人成績。

天位　栃尾　奏子

まだ恋を知らないメリーゴーランド

天位　森山　盛桜

気を抜いちゃならぬ美人とスズメバチ

★第5回全国鉄道川柳人連盟・誌上大会。参加者247名。同人・誌友成績。

天位　岩佐ダン吉

太陽が二つあの朝の広島

天位　羽城　裕子

ライバルが私の影をふんでいる

▽訂正とお詫び△

11月号P38下から5行目、衣食十分あれど　人は生き、死ぬ―そして新しい命が生れる↓どれほど衣食が足りていようと人は生き、死ぬ―そして次の生命が生まれる。P78上段11行目、野川宜子→野川宣子。P79中段後ろから6行目、宇都満智子→宇都満知子。p89左側写真下、居谷眞理子→居谷真理子。P96上段後ろから6句目、仏壇で亡夫の時計が刻む朝→仏壇で亡父の時計が刻む明日。p101 10行目、吉道航太朗→吉道航太郎。p105最下段【兵庫】3人目、上田和弘→上田和宏。

▽訃報△

○八木千代さん（同人・米子市）10月21日午後1時27分、心不全にて逝去。満99歳。

○江見見清さん（元同人・豊中市）11月8日㈬逝去。90歳。

▽ご芳志お礼△

○鴨谷瑠美子さん（藤井寺市）より金一封を頂きました。

○平井美智子さん（大阪市）より金一封を頂きました。

▽新誌友紹介△

大阪市　**桑原ひさ子**
紹介者　澤井　敏治

香芝市　**中村かずえ**
紹介者　西出　楓楽
木本　朱夏
山下じゅん子

岡山市　**向井　俊一**

▽常任理事会△

11月7日（木）出席19名。①常任理事の役割分担について②「川柳雑誌・川柳塔社100周年記念事業」への取組について③「第29回川柳塔まつり」の評価と反省点④広報活動⑤「第29回川柳塔まつり」会計収支報告⑥財政再建について⑦定例確認事項

次回常任理事会12月7日（木）AM10～

句会名	日時と題	会場と投句先
川　柳 あまがさき	12日(火) 14時締切 続く・端（連記）・ばたばた 自由吟	会場　東園田町総合会館２F 阪急園田駅北口徒歩２分 〒661-0953 尼崎市東園田町3－49－5　藤井宏造
川　柳 ねやがわ	12日(火) 13時締切 カンニング・可笑しい・神技 舵・自由吟	投句先 〒572-0840　寝屋川市太秦桜ケ丘７－１７ 廣田和織
岸和田 川柳会	16日(土) 14時締切 酒・座る・がらり・ニュース	会場　岸和田市立福祉総合センター 南海電鉄岸和田駅東へ徒歩５分 〒596-0076 岸和田市野田町２-18-27　雪本珠子
川　柳 たちばな	16日(土) 13時45分締切 印象吟・足（脚）（互選） 焦る・自由句	会場　東園田町総合会館２F 阪急園田駅北口徒歩２分 〒661-0953 尼崎市東園田町3－49－5　藤井宏造
和歌山 三　幸 川柳会	16日(土) 13時15分締切 １２月・忙しい・歳月	和歌山商工会議所　４階 〒640-8570 ニュース和歌山編集部 「和歌山三幸川柳会」宛
川柳塔 みちのく	16日(土) 17時締切 炉端・平凡・ざっくり	会場 － 未定 〒036-8275 弘前市城西1-3-10 川柳塔みちのく事務局 稲見則彦 宛　TEL0172-36-8605
川　柳 藤井寺	17日(日) 14時締切 バトン・人生	会場　パープルホール４F 〒583-0007 藤井寺市林5－8－20－303　鈴木いさお
南大阪 川柳会	18日(月) 14時40分締切 戦争・悩む・ヒント・雑詠	会場　大阪市立住まい情報センター　5F　研修室 メトロ谷町線・堺筋線「天神橋6丁目」駅③号出口 〒569-1116 高槻市白梅町5-15-1008　松岡　篤
豊　中 もくせい 川柳会	18日(月) 14時締切 準備・引く・とうとう・自由吟	会場　豊中市立地域共生センター　桜塚会館２階 阪急宝塚線「岡町」駅　徒歩５分 〒569-0073 高槻市上本町5－26　初代正彦
川　柳 さんだ	19日(火) 13時30分締切 窓際・大きい・エピソード 壊す・自由吟	会場　キッピーモール　６F（JR三田駅前） 投句先 〒669-1322 三田市すずかけ台3-4-1 E棟804　村田　博
はびきの 市　民 川柳会	24日(日) 14時締切 灰・祝う・ざっくり・席題	会場　陵南の森公民館 近鉄南大阪線「高鷲」駅下車　北へ徒歩10分 〒583-0864 羽曳野市羽曳が丘1-11-8　徳山みつこ
川　柳 ふうもん 吟　社	30日(日) 締切 ※第42回没句供養大会誌上大会。 洋食・白い・欠片・秋・昔話・ ゲーム　◎敗者復活吟	会場　県民ふれあい会館　４F　鳥取市扇町２１ 〒689-0202 鳥取市美萩野2－171－3　中村金祥
川柳塔 すみよし	休　会	会場　住吉区民ホール集会室４(図書館棟２F) 〒580-0026 松原市天美我堂3－130－2－404 森松まつお

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所（06-6779-3490）へご連絡ください。
★上記は年初の予定。諸般の事情のため、詳細は各柳社にお問い合わせください。

12月各地句会案内

（開催日順）

句会名	日時と題	会場と投句先
城北川柳会	2日(土) 開場13時　締切14時 例えば・やれやれ・ひと言 自由吟	会場　旭区老人福祉センター　3F メトロ谷町線「千林大宮」駅③番出口を左後側 投句先　〒536-0001 大阪市城東区古市1-8-14　江島谷勝弘
倉吉川柳会	2日(土) 14時締切 迷う・目くじら・楽・席題	会場　倉吉市明倫公民館 投句先　〒682-0722 東伯郡湯梨浜町はわい長瀬1028-1　天野道春
川柳塔まつえ吟社	2日(土) 13時40分締切 旅行・美・牛乳・山陰	会場　雑貨公民館 〒690-0012 松江市古志原7－19－19　中筋弘充
おりひめ☆ひこぼし川柳会	7日(木)消印有効 バトン・だるま・目標	投句先　〒573-0095 枚方市翠香園町2－7 『おりひめ☆ひこぼし川柳会』　藤田武人
あかつき川柳会	8日(金) 去・河豚・あくせく・時事吟	会場　大阪保育運動センター（新谷町第1ビル2F203会議室） メトロ「谷町六丁目」駅③番出口南へ3分（道路向い側へ） 〒543-0013 大阪市天王寺区3－6　木村ビル2階 あかつき川柳会
川柳塔なら	8日(金) 13時50分締切 アホらし（詠み込み不可） やれやれ・こわばる	会場　奈良市中部公民館 近鉄奈良駅③番出口徒歩5分 奈良県磯城郡川西町結崎421-64　長谷川崇明
川柳とんだばやし富柳会	9日(土) 反省・流す・自由吟・席題	会場　富田林市立中央公民館 近鉄南大阪線「富田林」駅南口から西へ 200 m 〒584-0066　富田林市錦織北1－14－6　中村　恵
六甲川柳会	9日(土) 14時締切 席題・飛・はらはら・洩らす 自由吟	会場　灘区民センター　5階 E室 JR「六甲道」駅南隣　メイン六甲内 〒658-0083 神戸市東灘区魚崎中町2－12－5　敏森廣光
川柳塔わかやま吟社	9日(土) 14時10分締切 兼　題＝終了・育つ・ナビ 課題吟＝美	会場　和歌山県JAビル11階 兼　題　〒642-0024 海南市阪井652－14　小谷小雪 課題吟　〒592-8349 堺市西区浜寺諏訪森町東2-208-5 来原道夫
川柳塔打吹	9日(土) 13時30分締切 スイッチ・走る・かりかり・席題	会場　倉吉市上灘町9　上灘コミュニティーセンター 〒682-0034 倉吉市大原637－3　牧野芳光 方 川柳塔打吹　事務局
西宮北口川柳会	11日(月) 13時30分締切 席題・パンチ・染める・静か 自由吟	会場　西宮市立中央公民館　6F　講堂 阪急「西宮北口」駅南出口徒歩3分「プレラにしのみや」 〒663-8112 西宮市甲子園口北町27－4－602　梅澤盛夫
ほたる川柳同好会	12日(火) 13時30分締切 意外・強い・あっさり	会場　豊中市立蛍池公民館 阪急・モノレール蛍池　蛍池駅前ビル 5F 〒561-0813 豊中市小曽根2－4－1　水野黒兎
川柳塔さかい	12日(火) 14時締切 道・稼ぐ 折句：け・や・き	会場　東洋ビル2F（堺東駅北西改札口から2分） 欠席投句先 〒599-8122　堺市東区丈六77－4　齋藤さくら

編集後記

★10月30日夜、池袋のホテルで編集後記をまとめているところ。
★10月3日の検査で、コルセットを外してもよくなった。「東京に行ってもいいですか」と主治医に聞くと「いいですよ」と言ってくれたので、リハビリを兼ねて東京行きを決行することにした。いつもは昼夜とも予定を入れていたが、今回は基本的には昼だけにした。
★27日、劇団鳥獣戯画「元気うどん」（ザ・スズナリ）。28日、国会図書館。サントリー美術館「幕末明治の絵師たち」。29日、トーハク特別展「やまと絵」。鈴本演芸場昼席、主任・蝶花楼桃花「任侠流山動物園」。今日は『近・現代川柳アンソロジー』を共に編纂した堺利彦さんと7箇月ぶりの会食。末廣亭昼席途中から、主任・柳家小ゑん「アキバぞめき」。明日は末廣亭余一会昼の部「春風亭一朝・一之輔親子会」。
★昼だけの活動だが一日の歩数が7000歩程度で足がガクガク。（道夫）

💎女性登用、とやらで閣僚にも何人かの女性の名がみられる。管理職の女性の割合を増やそうと、企業も数合わせに四苦八苦している。問題は数？
💎40年前のこと、子供が入園するときに、入園準備の説明会があった。お稽古バッグや上靴入れは、お母さんの手作りで云々。なんでや、と思いながら、不器用で縫い物は靴下の穴かがりだけの私も、夜なべで作った。下の子には買った物を使わせた。
💎小学校に入学すると、今度は給食当番のエプロンや三角巾を古いYシャツで、という手引きをもらった。誰が作るんや！
💎教職に就くと、女の先生は…と言われ、頼みの組合婦人部（現女性部）は被爆者に贈るひざ掛けを毎年編む。何で編み物？
💎総菜売り場は「おふくろの味」を売りにする。こうして政府の思惑通り「女性は家庭」なのである。思わず浮かんだ一句。

　おふくろの味もう死語にしませんか　（眞澄）

◆川柳勉強会で「鳥が飛んで行く」は「ゆく」では？との議論になり、その場の結論は「ゆく」は飛ぶに添えてあるだけの動詞だから平仮名で良いし、読みやすいとした。
◆ヤフーで調べると、動詞の本来の意味をそのまま持つのを「本動詞」と言う。一方「食べてみる」の「みる」のように本来の意味が失われている動詞を「補助動詞」と言い、基本的には平仮名表記にする、とある。
◆「学校へ行く」「テレビを見る」など本動詞の場合は漢字表記が良い。一方、よく使われる（いる、みる、くる、ある、ゆく、おく、いただく、あげる）など補助動詞で使う場合は平仮名表記が良い。使い分けが必要。
◆後日の勉強会で、本動詞の下に添える補助動詞は、「書いている」「始めてみる」「買ってくる」「手伝ってあげる」など平仮名表記するよう再徹底をした次第。（憲彦）

ひとこと

ネジバナ

六月六日の誕生日の花。モジズリとも言う。道端の何処にも見られた野花。しかし最近、全く見られなくなった。あちこち友達に聞いてみたが無いと言う。大変だネジバナまで無くなるなんて！一生懸命探したら、何とか寺の墓土地の一角に見つかった。すぐ御住職・奥様に頼む。一等地にも拘わらず二坪程の土地を守って頂いた。農薬・草刈機の故で、多くの草花・生物が失われているのだ。蝶々・トンボ・コオロギ等の姿も見ない。何と哀しい事だろう。

　みちのくのしのぶもじずり
　たれゆえにみだれそめにし
　われならなくに
　　嵯峨天皇の皇子・河原左大臣の御歌。

（松本　文子）

川柳塔（同人）・水煙抄（誌友）投句用紙

種目「　　　　」発表（2月号）

地名

都道府県　市

姓雅号

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

きりとりせん

同人・誌友　マルで囲んでください。

投句先　〒543-0052 大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201

「川柳塔」への投句について

(1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友（誌代半年分以上前納の定期購読者）に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用してください。

(2) 愛染帖・檸檬抄・一路集・インスピレーション・ナビ（印象吟）への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集・初歩教室は川柳塔柳箋（本社事務所取り扱い）、檸檬抄は本紙綴込みの投句用紙を使用してください。

(3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所（県・市名）を明記してください。

(4) 各欄への投句数および**投句締切期日の厳守**をお願いします。ファックスでの投句は御遠慮下さい。

川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の**10時から14時までにお願いいいたします。**

檸檬抄投句用紙

「のほほん」（12月15日締切）

2月号発表

川本真理子 選　――共選――　鈴木いさお 選

B	A

地名　都道府県　市　姓雅号

切らないで下さい

B	A

地名　都道府県　市　姓雅号

左右に同じ句を書いて下さい

きりとりせん

◎楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

個人用

寒中見舞広告　原稿台紙

料金は払い込み用紙をご利用下さい。

1/9頁　1/6頁　1/3頁　2/3頁　1/2頁　1頁

（ご希望の大きさを○で囲んでください。）

原稿を貼布される方は、
この位置に貼り付けて下さい

締切12月15日（金）

姓・雅号	住所	電話	川柳など掲載希望事項
	〒	（　　） ー	

送付先

〒543ー0052
大阪市天王寺区大道1丁目14番17号
花野ビル201

川柳塔社

きりとりせん

川柳塔誌新規購読申込書

年　月　日

氏名	住所	電話	紹介者	
フリガナ	〒　―	―　―	（無記入でも可）	年　月から半年　5000円 年　月から一年　9800円 該当の方に○をつけて下さい

川柳塔のホームページアドレス

https://senryutou.net

〒543-0052
大阪市天王寺区大道1丁目14番17号　花野ビル201
川柳塔社（電話　06―6779―3490）
振替　00980―4―298479

◎この用紙は新規購読申し込みのみにご使用下さい

作品募集

2月号発表（12月15日締切）

川柳塔（8句）　小島蘭幸選
水煙抄（8句）　川上大輪選
愛染帖（2句）　新家完司選
檸檬抄「のほほん」（2句）　鈴木いさお・川本真理子　共選
インスピレーション・ナビ（2句）　大西泰世選
集「尖る」　長谷川崇明選
一路集（2句）「鎖」　山下じゅん子選
初歩教室「必ず」（3句）　水野黒兎担当
初歩教室「必ず」は3月号発表

本社11月句会

とき　12月7日㈭　13時開場・13時40分締切
ところ　アウィーナ大阪　3階　葛城の間
天王寺区石ケ辻町19―12　電06・6772・1441
おはなし「愉快な老境」　新家完司氏
席題「　」　澤井敏治選
兼題「笑う」　今井万紗子選
「まぶしい」　木本朱夏選
「妥協」　川上大輪選
「宝の持ち腐れ」　島田握夢選
「自由吟」　小島蘭幸選
（各題2句以内）
会費　1000円
投句料　1000円（切手不可）

3月号
檸檬抄「泥」
一路集「奥」「明らか」
初歩教室「高い」

本社1月句会
8日（月・祝）午後1時から
兼題「玩具」「ポチ」「重い」「輝く」「自由吟」

本社句会欠席投句のお薦め

＊幅4.5センチ×長さ25センチの句箋一枚に一句ずつを書き、裏面に題とお名前を記入のこと。
＊投句料1000円（切手不可）。
＊句会日の前々日までに事務所に必着のこと。

川柳・俳句・エッセイ・小説
新聞・広告・ポスター・伝票等
あなたの思いをかたちにします。

美研アート
〒531-0061 大阪市北区長柄西1-1-10
TEL（06）4800−3018
FAX（06）4800−3028
Eメール bikenart@ea.mbn.or.jp
ホームページ https://www.bikenart.com

定価　八百円（送料100円）
半年分　五千円（送料共）
一年分　九千八百円（同）

二〇二三年（令和五年）十二月一日発行
発行人　小島和幸
編集人　榮原道夫
印刷所　美研アート
〒543-0052
大阪市天王寺区大道一―一四―一七
花野ビル201号室
発行所　川柳塔社
電話（〇六）六七七九―三四九〇番
振替　〇〇九八〇―四―一九八四七九番

川柳塔のホームページアドレス　https://senryutou.net

令和五年十二月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年　通巻一一五九号　川柳塔　十二月号
定価　八百円（送料　百円）

川柳塔創刊百周年記念

合同句集　川柳塔　発刊ご案内

「川柳塔」は大正十三年の「川柳雑誌」創刊から数えて、令和六年で百周年を迎えます。これを記念して合同句集「川柳塔」を発刊致します。

合同句集は昭和四十九年以来十年ごとに刊行し、今回は平成二十六年に続く第六集となります。

同人・誌友はもちろん、一般の方々のご参加も歓迎致します。一人でも多くのお申し込みを心からお願い申し上げます。

川柳塔社

☆**刊行**　令和六年七月一日発行

☆**締切**　**令和六年一月三十一日（水）**

☆**体裁**　B6判・ハードカバー・上製本
八〇〇頁（予定）

☆**参加費**　五千円（句集一冊呈・送料込み）

☆**掲載句**　一人　十五句（自選）

☆**申込**　所定用紙に掲載句（平成二十六年以降の発表句、または未発表句）を記入し、左記川柳塔事務所へお申込み下さい。

☆**送付先**　〒543―0052
大阪市天王寺区大道一―一四―一七
花野ビル二〇一号
川柳塔社　合同句集係　宛
FAX専用　〇六―六七九六―九〇六六
振替　00980―4―298479
（加入者名　川柳塔社）

橋詰農園の味好みかん

～家族で作り上げるこだわりの味～

健康なみかんの木から採れる絶品

余韻に浸れるほどの「コク」をお楽しみ下さい

〒649-0141　和歌山県海南市下津町小南 349
TEL & FAX　073-492-1692
E-mail　beetrus@nifty.com
http://www.hashizume-nouen.com

雑誌 05703―12